公羊傳なり唐の五經とは異なる所多し。

日本と韓國　◎神功皇后の征韓　皇后親ら師を率ゐて新羅を征し、國王奈勿を降す(奈勿は朴赫居世より十六代の王なり)而して百濟また風を望んで我に朝貢せり。◎任那府　垂仁天皇の朝弁韓の故地に任那を置き新羅百濟を都護す。◎百濟背反　百濟は近肖古王の後三傳して辰斯王に至り、禮を我國に失す、應神天皇紀の角を道りて之を廢し阿花王を立つ、時に新羅密に辰斯王を助く、故に我軍また新羅を征す、新羅救を高麗に乞ふ。◎高句麗の廣開土王　一に好太王と云ふ、故國原王の孫にして勇武大略あり、新羅と同盟して我に抗す。◎任那府陷る　新羅はまた百濟を伐ち勢に乘じて我任那府を陷る、韓體欽明の二朝屢師を朝鮮に出し、百濟を助けて新羅を征せり。

第二期　魏晋南北朝時代

（西紀二二〇年―五八九年）

後漢―魏四十六代五十二代（西晋十一代）東晋十一代（南朝）宋八代六十一代　齊七代二十四　梁四代五十六　陳五代三十三
　　―呉四代五十二
　　―五胡―（北朝）後魏九代一百四十五　西魏四代二十四　北周五代二十五　隋
　　―蜀四代二十四　　東魏一代十七　北齊五代二十八

第十九章　三國の分立

魏　曹丕（高祖文帝）即位の年西紀二二〇年　（都）洛陽　（領）江北
蜀漢　劉備（昭烈帝）　西紀二二一年　（都）成都　（領）蜀
呉　孫權（太祖太帝）　西紀二二九年　（都）建業　（領）江南

魏―司馬懿―師
　　―昭―炎
呉―晋に滅ぼさる
魏―晋に滅ぼさる

蜀―魏に滅ぼさる

諸葛亮 ┬ 南夷征討
　　 ├ 魏征討 ┬ 第一征
　　 │　　 ├ 第二征
　　 │　　 └ 第三征(五丈原)

昭烈帝親ら吳を伐つ

三國の國號を記し並に其初の君の名を記せ《海兵三四》

吳魏の交戰

諸葛亮南夷を平らぐ

孔明の辭記《海兵三二》

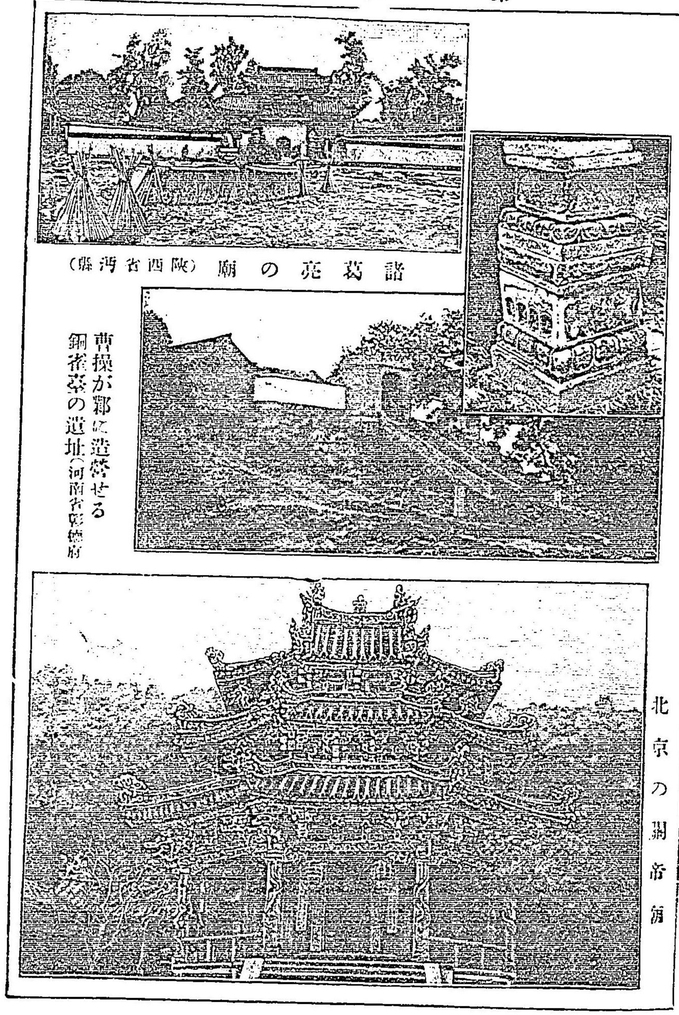
三國交涉

吳魏の相結びて關羽を攻殺するや、昭烈帝は之を憤り、關羽の仇を報ぜんと欲し、親ら兵に將として吳に侵入せしが、攻守六ヶ月にして遂に吳將陸遜の爲めに夷陵(湖北宜昌府東湖縣)に破られ憂憤して死す。◎吳魏の交戰　此際孫權魏に降りしかど、質子を出さゞりしを以て、吳魏の和忽ち敗れて、吳蜀の和また成り、魏の文帝は自ら大軍を率ゐて吳を征せしこと二回なりしが、共に江水の漲溢に會うて空しく師を班せり。

諸葛亮の出征

◎南夷を平ぐ　諸葛亮、遺詔を受けて輔相となり、大に內政を修理し、官職を整へ、法制を修め、吳と連和して魏を攻め、中原を復するを以て志とせり。會、南夷の孟獲と云ふもの背きたる故、亮自ら獲を討じて之を服し、悉く南方を平げ後顧の憂なからしめ、よりて師を出して魏を

第九圖



諸葛亮の廟（陝西省漢中府）

曹操が鄴に造營せる銅雀臺の遺址（河南省彰德府）

北京の關帝廟

祁山第一征

祁山第二征

祁山第三征
五丈原

諸葛亮死す

司馬懿

討たんとす。㈠第一征　時に魏は文帝既に死し子明帝位にあり、亮の漢中より進みて祁山を攻むるや、天水、南安、安定の諸郡背きて亮に歸し魏國震駭す。明帝乃ち張郃をして拒ぎ戰はしむ。蜀將馬謖、亮の節度に違ひ、爲めに大に敗れ亮遂に漢中に還る。㈡第二征　亮また兵を出して陳倉を圍みしが、糧盡きて還り、後二年を經てまた魏を伐ち、祁山を圍む。魏將司馬懿能く拒ぐ、亮之と戰て利を得しがまた糧の盡きたるが爲め、退て漢中に還る。㈢第三征　是より亮は專ら農を勸め、武を講じ、兵糧を儲へ、民を息ひ、士を休むる三年、また兵十萬人を率ゐ進て五丈原（今の陝西鳳翔府郿縣西南）に屯す。司馬懿堅く守て戰はず、亮乃ち渭濱に屯田して持久の策を爲す。吳の大帝も亦大軍を發して魏を伐つ。魏よりて吳軍を伐ち却けしが、懿、亮と相持すること百餘日にして、亮病に罹り軍中に死す。時に二三四年なり。是に於て姜維軍を整へて蜀に還れり。

魏、司馬氏の專橫

㈠司馬懿　是より先き遼東太守公孫度、威を北燕に振ひ、東高句麗、西烏桓を伐ち、大に領土を開く。度の孫淵、燕王と稱し、吳、魏に款を通じ、叛服定まらず。是に於て明帝、司馬懿を遣り高句麗の山上王と合

曹爽　司馬師　司馬昭、　司馬氏魏の國權を握る　蜀亡ぶ　魏亡ぶ　吳亡ぶ

擅して淵を滅ぼさしめ、其地を併せたり。尋て明帝死して太子芳立つや、懿曹爽と遺詔を受けて政を輔けしが、爽驕奢度なきを以て懿遂に爽を殺して自ら丞相となり權を一身に集めたり。◎司馬師　懿死し其子師、政を執りて威を振ふ。帝芳其專恣を惡む。師帝を廢して廢帝髦を迎立す。◎司馬昭　師死して其弟昭職を襲ひ、相國となり晉公に封ぜらる。魏帝威權の日日に去るを以て、昭を誅せんと謀り、反て其黨に弒せらる。昭よりて元帝を推立し、悉く國家の實權を握れり。

三國の滅亡、晉の興起

◎蜀の滅亡　蜀は諸葛亮の死後姜維事を用ゐ、國力外に竭き國政內に亂る。魏の司馬昭乃ち鍾會（シヨウクワイ）、鄧艾（トウガイ）の二將に命じ、二道より兵を進めて蜀を伐たしむ。蜀軍拒ぐ能はず成都陷り後主出て降る。蜀は昭烈帝より二世四十三年にして亡ぶ。實に二六三年なり。◎魏の滅亡　司馬昭、蜀を滅ぼしてより威望益〻高く、爵を進めて晉王となりしが、死して其子炎嗣ぐに及び、元帝に逼て位を禪らしむ。之を晉の世祖武皇帝となす。魏は凡五代四十六年にして亡ぶ。蜀の滅後僅に二年、時に二六五年なり。

◎吳の滅亡　吳は孫權より二帝を經て帝皓に至る。驕暴にして酒色に耽り、刑罰を濫にして朝政大に亂る。而して外にはまた交州の反亂ありて國力大に衰へしかば、晉の武帝は杜預、王濬（オウシユン）を將として六道より之を伐たしむ。建業陷り吳遂に亡ぶ。吳は凡四代五十二年、魏に後るゝこと十五年なり。三國鼎立してより茲に六十年、晉遂に天下を一統す。實に二八〇年なり。

晉の武帝

第二十一章　西晉の治亂

西晉の初政

武帝即位の初め意を政治に注ぎ、(一)魏の孤立して亡びたる、(二)宗族を各地に封ずるは、(三)清談……竹林の七賢

晉室衰亂の源因

一、武帝の遊宴……諸州の兵備を撤す
二、宗族を各地に封ず……八王の亂
三、清談……竹林の七賢
四、氏羌雜居
五、賈后專權
六、劉淵起る

るに慾り、大に宗族を各地に封じ以て藩屏たらしめんとせしに却て諸王の威望並くして骨肉相鬩ぐの基をなせり。(二)當時士大夫の間に清談に耽るの風行はれ、貢老無爲の道を欣慕し、浮誕を喜び、實務を卑み、醉裸、放誕昏醉放縱を悦ぶに至り、一人の國家を憂ふるものなし。(三)氏羌種族の雜居を許し、中原の亂を招けり。(四)吳を滅ぼして後武帝氣驕りてまた政治を省みず、內は遊宴に耽り、外は州郡の武備を徹したり。(五)二八九年武帝死して惠帝立ち性不慧なり、皇后賈氏權詐多く、朝政に干渉し、太后楊氏を廢し、其父太傅楊駿を殺し、汝南王亮を相國となせり。

清談の流行

賈后權を弄す

八王の亂　既にして趙王倫賈后を殺し、惠帝に迫りて位を讓らしめしが、其後齊王冏、成都王穎、河間王顒、長沙王乂、東海王越等の諸王交々起りて政權を爭ひ、骨肉互に殘害して晉國分崩し、五胡其間より競ひ起りて、中原に驅逐するに至れり、之を八王の亂と云ふ。八王とは汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、長沙王乂、成都王穎、河間王顒、東海王越の八人なり。

一、汝南王亮
二、楚王瑋
三、趙王倫
四、齊王冏
五、長沙王乂
六、成都王穎
七、河間王顒
八、東海王越

清談の流行　後漢の末士大夫名節を重んずるの極、士風稍固陋に陷りしが魏晉の際に當り其反動として禮義法度を度外視するの流風を生じ、經學訓詁廢れて老莊虛無の說流行し、所謂清談の基を開き、人皆名を清談に假託して一生を夢送し、以て一身の安全を謀るに至れり。是等の徒は魏にありては王弼、何晏、晉にありては竹林の七賢、山濤、王戎、劉伶、阮籍、阮咸、稽康向秀の如き尤も著名なるものなり。

竹林の七賢

劉淵の興起　此時に際し、夷狄四方に蜂起して、連に內地を侵す、會、匈奴に劉淵と云ふ俊傑あり、惠帝の世五部の大都督となる、其子に劉聰、族子劉曜

劉淵

部將王彌(東萊人等是が爪牙たり。聰は驍勇にして經史に通じ、曜は文武の才あり彌は任俠を以て名あり騎射を善くす。勳は天資磊落にして勇略あり。淵遂に三〇四年を以て左國城(山西汾州府東北)に據りて漢王と稱す。

左國城

西晉の滅亡　尋て惠帝死し懷帝立つ。劉淵更に帝と稱し都を平陽(山西平陽府)に徙し遂に晉を攻めしが淵死し聰繼ぐに及び、石勒劉曜王彌等を遣し洛陽を陷れ懷帝を執へて之を殺す。愍帝よりて長安に卽位せしが劉曜進て是に於て司馬懿の曾孫瑯琊王睿建業に卽位し晉の祀を保つ。之を元帝と洛陽陷る
江北悉く匈奴の有となる

なす實に三一六年なり。史家元帝以前を西晉と稱し以後を東晉と稱す。

西晉帝系

武帝[1]——惠帝[2]
　　——吳孝王晏——愍帝[4]
　　——悼帝[3]

第二十二章　五胡十六國

五胡　五胡とは匈奴、羯、鮮卑、氐及羌の五族を云ふ。是等は中原に侵入せし夷狄にして匈奴、羯は土耳古種、鮮卑は通古斯種、氐羌は圖伯特種なり。

五胡

匈奴及羯　前漢の宣帝の時、呼韓邪單于內附し後漢の初め南單于もまた漠に歸服せしより匈奴の部族山西の塞內に入り漢人と雜居するもの多く年月を經るに從ひ戶口漸く滋く山西の地は大半匈奴の占據する所となれり。而して單于は先世漢の甥たりしとて自ら劉姓を冒したるが魏の曹操は其勢力を殺がんが爲め其衆を五部に分てり。◉羯●匈奴の別部なり。

匈奴及羯

鮮卑　後漢の初め北匈奴を討ちて勢頓に强く三國の初め魏を助けて功あり。遂西に居り晉室の大亂に乘じて漸く南下す。

鮮卑

氐及羌　共に圖伯特族にして羌はもと青海の地方に生息し氐は其東南岷山附近より巴蜀の間に散在し前漢の世漢に隷屬せしが漢の初め馬援

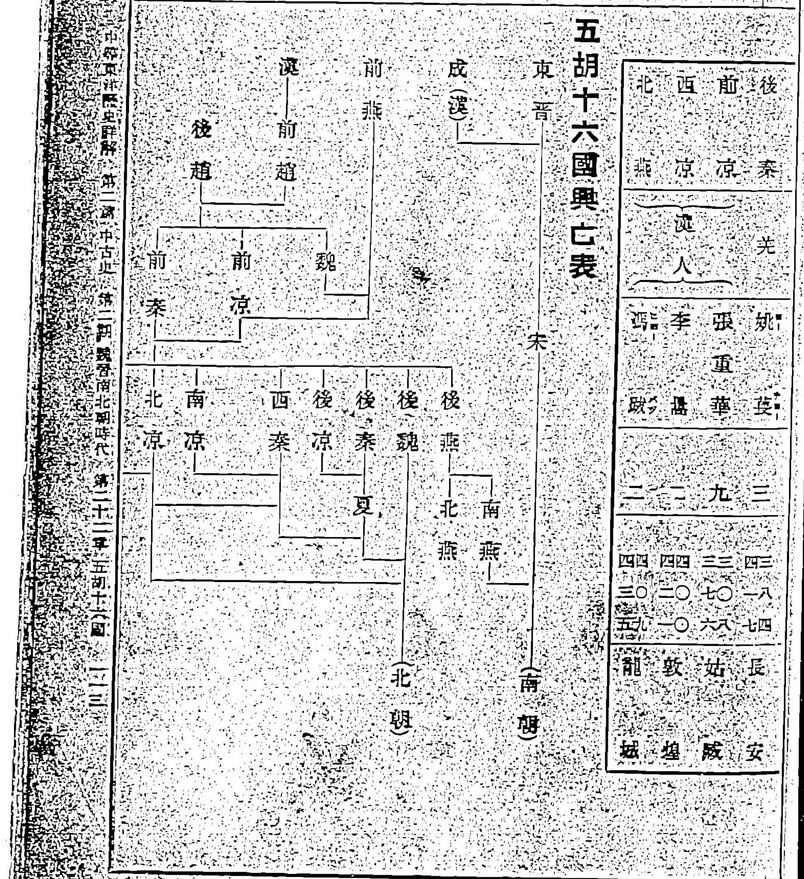
氐及羌

五胡十六國表

征服せられて關西河東に移され漢末に至り多く關中に住するに至れり。

國名	種族	始祖	代數	興亡年代	都城
前燕	鮮卑	慕容皝	三	三二七―三七〇	鄴
後燕	鮮卑	慕容垂	五	三八四―四〇八	中山
西秦	鮮卑	乞伏國仁	四	三八五―四三一	苑川
南燕	鮮卑	慕容德	二	三九八―四一〇	滑臺
南涼	鮮卑	禿髮烏孤	三	三九七―四一四	西平
北涼	匈奴	沮渠蒙遜	四	三九七―四三九	張掖
大夏	匈奴	赫連勃勃	二	四〇七―四三一	統萬
後秦	羌	姚萇	二	三八四―四一七	長安
成(漢)	氐	李雄	三	三〇四―三四七	成都
前涼	漢人	張重華	九	三一四―三七六	姑臧
後涼	氐	呂光	三	三八六―四〇三	姑臧
前秦	氐	苻洪	二	三五一―三九四	長安
後趙	羯	石勒	二	三一九―三五一	襄國
前趙	匈奴	劉淵	三	三〇四―三二九	平陽
前燕	鮮卑	慕容皝	三	三三七―三七〇	鄴

五胡十六國興亡表


東晉
宋（南朝）
成（漢）
前燕
後燕
南燕
北燕
前涼
後涼
南涼
西涼
北涼
前秦
後秦
夏
後趙
前趙
魏
後魏（北朝）
前燕
後燕
南燕
北燕
前涼
後涼
南涼
西涼
北涼
前秦
後秦
夏
後趙
前趙
魏
後魏（北朝）
姚萇
張重華
呂光
李雄
西晉滅亡
二
九
二
三
四
二
三
四
四
四
四
四
四
四
四
四
三
三
三
三
三
三
三
三
二
二
二
二
一
一
一
一
八
七
六
五
四
三
二
一
〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一
〇
九

前趙
後趙
冉閔
苻秦
王猛

漢(前趙) 劉淵死し子聰繼ぎしが聰の死後劉曜は自立して長安に據り國を趙と號す。

後趙 石勒乃ち襄國に據りて趙王と稱し、河北山東を併せ洛陽を界とし頻に前趙と爭ひ、三二九年遂に前趙を滅ぼして其地を取り成を北方に振ふ。然るに石虎嗣立するに及び都を鄴に移し、北は蘇峻氏を伐ちて大敗し南は東晉を侵じも志を得ず、西は前涼を征してまた敗れしかば國勢大に衰へ其領土四分五裂して遂に亡ぶ。

前秦 後趙の亂るゝや氐酋洪(前秦)王と號し興りて姓を苻と改む。其子堅立ち三五一年長安に入りて帝と號す。一傳して苻堅に至り王猛を用ゐて力を富國強兵に盡し其勢日に盛にして前涼及代を討ちて之を滅ぼし江北を一統して北領土は支那の大半に達せり。是に於て支那を一統せんとし破竹の勢を以て南下して晉を伐ち晉將謝玄謝石と淝水に戰て大敗す。之より勢頓に衰へ其領土四分五裂して遂に亡ぶ。

代王拓跋氏 拓跋氏は鮮卑の柔頭部より出づ。魏晉の頃拓跋力微可汗と

西涼

什翼犍
拓跋珪
後魏

なり部衆漸く盛なりしが後大に衰へたり。三八六年其曾孫什翼犍出でて昭にして能く國業を治め始めて官制を定めて庶務を分掌せしめ號令明白にして政事清簡なり是に於て地を四方に擴張し成を塞外に擅にし勢漸く強し。晩年繼承の亂あり秦主苻堅の乘ずる所となりて亡びしが苻堅の衰ふるに至り什翼犍の孫拓跋珪新に興りて盛樂に據り國を魏と號し後燕を攻めて之を滅ぼし、都を平城に遷して帝と稱す。後魏の道武帝是なり。時に晉の安帝隆安二年(三九八年)なり。

第二十三章 東晉の治亂

(一) 元帝 ┌政務(王導)
　　└兵事(王敦(反す)一)

　　蘇峻(反す)二)……庾亮(一)
　　　　陶侃(一)平定

(二) 成帝……兵事(桓溫) ┌一)成漢を滅す
　　　　　└二)前秦を討つ

三、前燕を討つ

四、其專權

(三) 淝水の戰　謝玄兵八萬　苻堅兵八十七萬

(四) 東晉―劉裕―宋(南朝)
北方諸國―太武―魏(北朝)

元帝

東晉の初政　西晉の亡ぶるや東晉の元帝位に建康に即き、王導を擧げて國政を掌らしめ其從兄王敦をして兵事を統べしめ其他文武の諸名士を任用す。然れども帝優柔にして統御の才に乏しく、王氏の勢漸く盛となり、

王導

王敦

內亂續起するに至れり。◉王敦は王氏の長者にして且つ兵權を統ぶるが故勢內外を傾け漸く不臣の志を蓄ふ。帝之を忌み稍其權を抑損せしかば王敦之を啣む。

王敦蘇峻の反　既にして王敦遂に兵を擧げて建康に迫る。帝よりて王導をして之を禦がしめしに利あらず敦を丞相とせしが暴慢頗る甚だしく、帝遂に憂憤病を發して死し明帝次ぐ。◉王敦死す　敦既に位を簒ふの

王敦死す

意あり、會病に罹りしかば其兄王含をして兵を帥ゐ建康に向はしむ。帝自ら簒戰して大に含の軍を破る。敦病を力め自ら行かんとして遂に死す。是に於て官軍大に賊軍を破り悉く內亂を平ぐ。◉蘇峻反す　時に明帝死し成帝立つ。歷陽の大守蘇峻王敦を討て功あり。威望漸く高く心に朝廷を輕んず。庾亮具れて其兵權を奪はんとするや峻反して建康に迫り其勢頗る盛なりしが、陶侃の入援により て僅に鎭定するを得たり。

蘇峻の反

陶侃

桓溫

桓溫の討伐　成帝の後康帝を經て穆帝に至る。桓溫と云ふものあり英略入に超え文武の才幹あり庾亮の弟庾翼に代りて軍事を統べ、遂に西して巴蜀に入る。◉成漢を伐つ　成漢は李雄の建國に係り、其版圖四川貴州に及び成都に治し帝號を稱す。雄死し弟李壽嗣ぎ國號を漢と改む。壽の子李勢立ち淫虐にして人心を失ふ。桓溫其機に乘じ一擧して成都を陷れ之を滅ぼす。◉前秦を伐つ　溫乃ち轉じて前秦を伐ち大に之を藍田(陝西西安府藍田縣)に破り、轉戰して灞上に至る。秦主苻健固守して出てず、尋て溫白鹿原に敗れて還る。◉前燕を伐つ　幾許もなく溫また姚襄を伐て之を破り、哀帝を經て帝奕の時大擧して燕を伐ち、慕容垂と枋頭(河南衞輝府淇縣)に戰ひ

桓溫蜀を取る

前秦を伐つ

前燕を伐つ

枋頭の役

大敗して還れり。

桓溫の廢立　哀帝の時より桓溫大司馬となり勢益〻盛にして頻に重職に上り陰に不臣の志を蓄へしが、防頭の大敗に逢て威名頓に挫く。溫乃ち帝奕を廢し簡文帝を立てて威權を振ふ。會〻帝在位九ヶ月にして死す。溫晉祚を遷すに意ありしが晉の名臣謝安、王坦之等孝武帝を奉じて溫をして敢て非望を遂げしめず、溫尋て病に罹りて死せり。

謝安、王坦之

淝水の大戰　秦の苻堅既に王猛の力を以て江北を一統し、東高句麗より西西域に至る六十二國を朝貢せしめて勢頗る盛なりしが王猛の死後其遺言に畔き、三八三年大舉して晉を伐つ。是より先き晉は謝安兄の子玄を擧げて北方を鎭せしむ。堅の軍戎卒六十萬騎兵二十七萬、謝玄兵僅に八萬を督して之を拒ぎ、大に秦軍を淝水（安徽風陽府壽州東）に破る。堅僅に身を以て免る。◉前秦亡ぶ。幾許もなくして堅は反者の手に死し、其後嗣もまた前後殺戮に逢ひ其領土は四分五裂して前秦遂に亡ぶ。

前秦の滅亡

江北の紛爭　淝水戰後江北大に亂れ、慕容垂は中山（直隸定州）に據て後燕を立て、慕容沖は平陽に據て西燕を興し、姚萇は長安を取て後秦を創め、禿髮烏

淝水戰後の江北

孤は河湟青海の間に南涼を興し、呂光は河西に後涼を創め、沮渠蒙遜は張掖に北涼を、李暠は敦煌に西涼を建つ。而して拓跋珪は平城に帝を稱して後魏の基を立て、慕容德は滑臺（河南衞輝府滑縣）に南燕を、馮跋は龍城（內蒙古熱河東北）に北燕を興し、尋て姚萇の子興は後涼を滅ぼし南北西の三涼を威服して威江北に振ひ、赫連勃々もまた朔方に據て大夏を建てたり。

桓玄の反

劉裕晉亡ぶ

東晉の滅亡　晉は淝水の戰後北方の分裂に依りて少康を得しも、安帝に至りて孫恩の亂あり、尋てまた◉桓玄の反に起る。玄は溫の子にしてオ氣を負み志を得ず、遂に反して江陵に據り進んで建康に入り帝に迫りて位を禪らしむ。劉裕乃ち玄を討じ之を斬りて帝の位に復し、後恭帝に迫りて遂に晉室を簒ふ。晉は東西合せて十五代百五十六年にして亡ぶ、時に四二〇年なり。

東晉の帝系

元帝 ─ 明帝[2] ─ 成帝[3] ─ 康帝[4] ─ 哀帝[6]
　　　　　　　　　　　　　　└ 帝奕[7]
　　　　└ 穆帝[5]

—簡文帝—[8]孝武帝—┬[9]安帝
　　　　　　　　　└[11]恭帝

宋(南朝)の興起　劉裕夙に大志あり、功を外に建て勢を内に張らんと欲し、晴うて北伐して南燕を滅ぼし、西討して後秦を降し、相國宋公となり遂に安帝を弑して恭帝を立て、爵を宋王に進めしが、幾許もなく晉の禪を受く之を宋の武帝とす。

宋の武帝

後魏(北朝)の興起　後魏は道武帝の後明元帝を經て太武帝に至り、勇健にして能く兵を用ゐ北燕、北涼を滅ぼし、夏を破り吐谷渾を降し遂に江北諸國を併呑す。是に於て支那は分れて南北二大國となる、よりて江北を北朝と稱し、江南を南朝と云ふ。

北朝

第二十四章　南北朝の對立

一、武帝(劉裕)
二、文帝、後魏に破らる

南朝
- (一) 宋
  - 三、明帝、諸王子を殺す
  - 四、順帝、蕭道成簒立
- (二) 齊
  - 一、高帝(蕭道成)
  - 二、賓卷、反亂起る
  - 三、和帝、蕭衍簒立
- (三) 梁
  - 一、武帝(蕭衍)、侯景の亂
  - 武帝—┬統—詧(襄陽)…西魏に走る
    　　└繹(江陵)…王僧辨
    　　　└綸(江夏)…陳覇先
    　　東魏に降る
- (四) 陳
  - 武帝(陳覇先)
  - 後主、隋の文帝に滅さる

後魏
- (一) 初葉—太武帝、柔然を征す
- (二) 中葉—孝文帝、都を洛陽に遷す
- (三) 胡太后稱制

(三)　末葉―明帝―(爾朱氏專横

(二)　魏分裂―東魏―孝靜帝…高歡鄴
　　　　西魏―孝武帝…宇文泰長安

(三)　南北合一―東魏―北齊←陳
　　　　西魏―北周→隋

四二〇年宋の武帝の卽位より、五八九年隋の文帝の陳を滅ぼすに至るまで、支那は南北に分れ、各朝簒奪相踵ぎ、弑逆の多き春秋の時に讓らず、南朝ば二十四君にして終を善くするもの十君、北朝もまた二十四君にして終を善くするもの十四君に過ぎず。

南北朝時代と稱するは如何なる時代なりや（女高三六）

南北各朝の興弑

宋（宋齊梁陳）

(一)　南朝（宋齊梁陳）

宋は武帝、廢帝を經て文帝立ち、後魏の河南を略するを憤り、太武帝の乘然を伐つを機とし兵を發して碻磝（山東東昌府茌平縣）を取りしが、王玄謨の謀を用ゐる大擧して北伐するに至り、太武帝自ら來り討ち、宋軍遂に大敗して淮西淮北の地を失ひ大に國威を損せり。◉宋亡ぶ　後三傳して明帝に至る、時に蕭道成と云ふもの南兗州の刺史となり淮陰を鎭す、深沈にして大度あり、博學文を能くして豪俊を收容し賓客甚だ盛なり。帝死し太子昱立つ、桂陽王休範の反あり、道成之を弑し、順帝を擁立して相國齊公となり、尋て簒立して國を齊と號す、高帝是なり。宋は武帝より八代五十九年にして亡ぶ、時に四七九年なり。

宋亡ぶ

齊の高帝

齊亡ぶ

梁の武帝

宋の帝系

武帝[1]―廢帝[2]
　　　　文帝[3]―孝武帝[4]―廢帝[5]
　　　　桂陽王休範―順帝[8]
　　　　明帝[6]―後廢帝昱[7]

齊

高帝より五傳して廢帝寶卷に至り專ら嬖幸を用ゐ、歷大臣を誅せしかば四方に反亂起る。齊の疎族蕭懿內亂を鎭定して威望を得、竟に帝の忌むところとなりて殺さる。◉齊亡ぶ　懿の弟蕭衍兵を擧げ、和帝寶融を奉じて建康を圍む。齊人寶卷を弑して之を迎ふ、尋て衍政權を握り梁王となり、遂に齊の禪を受く、梁の武帝是なり。齊は高帝より七代二十三年にして亡ぶ、

時に五〇二年なり。

齊の帝系

- 高[1]帝
  - 始安王
  - 明[5]帝
    - 廢[5]帝寶卷
    - 和帝寶融
  - 武[2]帝—長懋
    - 廢[3]帝昭業
    - 廢[4]帝昭文

東魏を伐つ

侯景の反

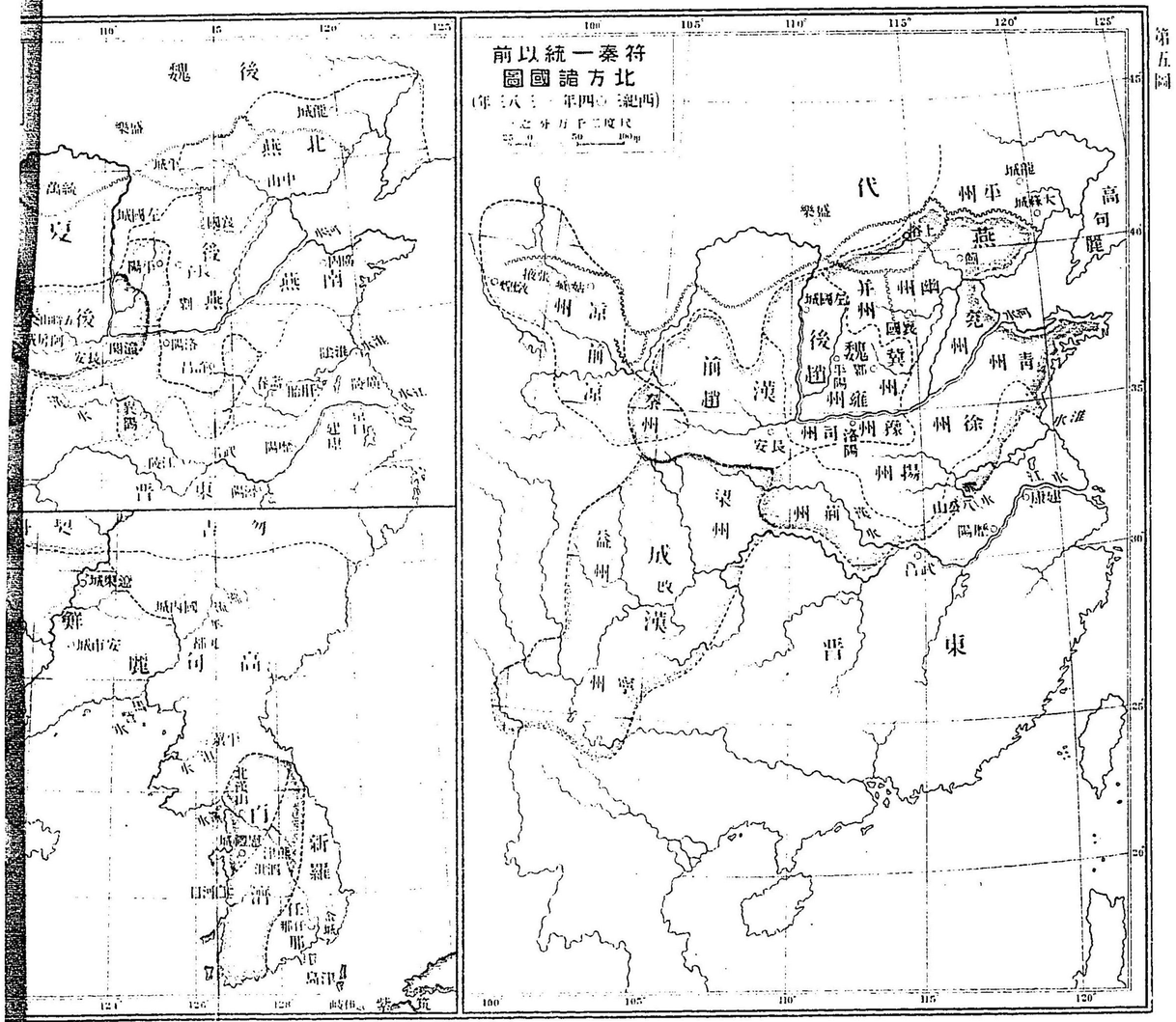
侯景簒立

梁室再興

梁

時に魏は東西に分裂せしが、武帝の時東魏の臣侯景來り降る。◉東魏を伐つ　帝乃ち蕭淵明と共に東魏を伐たしめしが、大敗して淵明は擒となり、景は南走して梁の壽春（安徽鳳陽府壽州）に據る。帝よりて其地を鎮せしむ。◉侯景反す　既にして東魏梁と和せしかば、景之を怨み兵を擧げて建康を襲ふ。時に太平日久く、加之帝は佛法に歸依して上下之に化し、武備大に弛みしかば、舉國解崩して善く防ぐものなく城遂に陷る。帝止むを得ず、景を大丞相となし和を結べり。◉侯景簒立　侯景乃ち武帝を幽す、帝憂憤して死し簡文帝立つ。景之を弑して豫章王棟を立て、また之を廢し自立して漢帝と稱す。◉梁室再興　時に武帝の子蕭繹（シ）は江陵に據り、其弟蕭綸

第五圖



侯景の反

◎侯景反す　既にして東魏を襲ふ。時に太平日久く、加之帝は佛法に歸依して上下之に化し、武備大に弛みしかば、擧國解崩して善く防ぐものなく城遂に陷る。帝止むを得ず、景を大丞相となし和を結べり。◎侯景簒立　侯景乃ち武帝を幽す、帝憂憤して死し簡文帝立つ、景之を弑して豫章王棟を立て、また之を廢し自立して漢帝と稱す。◎梁室再興　時に武帝の子蕭繹は江陵に據り、其弟蕭綸

は江夏に據り、武帝の孫蕭詧は襄陽に據りて互に攻爭せしが、詧遂に繹に逐はれて西魏に走り、綸もまた繹に破られて東魏に降る。繹乃ち王僧辨を遣りて侯景を討たしめ、陳覇先また兵を擧げ僧辨に力を合す。景遂に敗れて吳に走り其下に殺さる。蕭繹よりて江陵に卽位す、元帝是なり。◉後梁起る。既にして西魏の宇文泰梁を討ちて江陵を陷れ、元帝を殺し、詧を立てゝ梁王となす、後梁是なり。◉梁は武帝より四代五十六年にして亡ぶ、時に五五七年なり。

王僧辨
陳覇先
後梁
梁亡ぶ

梁の帝系

武帝[1]——簡文帝[2]
　　——元帝[3]——敬帝[4]

陳

陳の武帝

王僧辨陳覇先は元帝の子蕭方智を建康に奉じ制を稱せしが、北齊の文宣帝兵を出して蕭淵明を梁に納るゝに及び、僧辨之を迎へて覇先と爭ふ、覇先遂に僧辨を殺し方智を立つ、敬帝是なり。是に於て覇先丞相となり、僧を進めて陳王となり、尋て禪を受け國を陳と號す、武帝是なり。

(二) 北朝(後魏、東魏、西魏、周及齊)

北朝

太武帝の事業

柔然

社崙

孝文帝

都を洛陽に遷す

魏の政衰ふ

爾朱榮

後魏の初葉

太武帝既に江北を一統し、高句麗をして入貢せしめ、柔然を擊ち破り、大夏に勝ち、北涼、北燕を滅ぼし、また宋を破り、鄯善を降し、焉耆、亀茲を破り、破落那（フェルガナ）を招致し、ペルシアのササン朝をして朝貢せしめ國威を輝かせり。◉柔然　柔然は東胡の裔と稱す、東晉の初め車鹿會と云ふもの勇健にして部衆の推す所となり、始めて國を立てゝ柔然と號す、其後六傳して社崙に至り頻に諸部を并呑し、東高句麗より西焉耆に至る疆域を有し、屢、後魏を侵して太武帝に擊破せられ勢大に衰ふ、會、帝晩年私に逢ひ、文成帝、獻文帝を經て孝文帝に至る。

後魏の中葉

孝文帝性仁孝にして學を好む、頻に中國の文化を慕ひ、都を洛陽に遷し、國姓を元と改め、胡語、胡服を禁じ、禮樂を興し、制度を定む。◉政衰ふ　されど是より文弱の氣風を起し、國家爲めに衰ふ。孝文帝死し、二傳して孝明帝に至り、幼弱なるを以て胡太后（後）制を稱す、亂兆漸く現はる、太后尋て帝を毒殺す。◉爾朱榮（ジシュエイ）　と云ふものあり、晉に反賊を討じて功あり、六州の軍事都督となりしが、君側を清むるを名とし兵を擧げて洛陽に入り、胡太后を弑し、孝莊帝を立つ。榮功を負んで專横なり、帝手ら之を誅するや、榮の一族幷び反し、帝を弑して節閔帝を立て權を專にす。

高歡

後魏の分裂

宇文泰

東西魏の分裂

東魏

西魏

後魏の分裂

是に於て朔方の鎭將高歡は爾朱氏の民望を失ふに乘じ、之を破りて洛陽に入り、帝を廢して孝武帝を立て、大丞相となり、府を晉陽（山西太原府）に開き勢威甚だ盛なり。孝武帝畏れて之を伐たんと謀りしが、歡の兵を率ゐて來るに及び、五三五年長安に出奔して關西の大都督宇文泰に賴り、泰を以て大丞相となし高歡を討ず。歡は別に孝靜帝を立て都を鄴に遷して之に抗す。◉西魏・東魏　是より後魏は二國に分裂し、長安を西魏と稱し鄴を東魏と稱す。◉魏　は道武帝より此に至るまで十二代百四十九年なり。

東西魏

◉東魏　は高歡政を專にせしが、其死後子澄代りて丞相となり、位を簒はんとせしが其下に殺され、弟洋代るに及び、五五〇年帝に迫りて禪を受く、之を北齊の文宣帝とす。東魏は分立より是に至る迄一世十七年なり。◉西魏　は孝武帝宇文泰に弑せられ文帝立つ。泰政を總攬し大に綱紀を振起す、既にして帝死し太子欽立つや、泰また之を弑して其弟廓を立つ、恭帝是なり。泰死して子覺嗣ぐに及び五五七年遂に西魏の禪を受く、之

を北周の孝閔帝とす。西魏は分立より是に至る迄四代二十四年なり。

魏の帝系

道武帝[1]―明元帝[2]―太武帝[3]―景穆太子晃―文成帝[4]

―獻文帝[5]―孝文帝[6]―宣武帝[7]―孝明帝[8]

―彭城王―孝莊帝[9]

―京兆王―文帝[二]―廢帝[三]

―廣平王―孝武帝[一]《西魏》

―范陽王―清河王―孝靜帝《東魏》

北方の合一

◉北齊は文宣帝の後三傳して帝緯に至る。暗愚にして政事を用ゐる國政大に亂る。加ふるに陳は其南邊を侵して封土もまた蹙まる。時に北周の孝閔帝の孫武帝不凡の才あり、之に乘じ五七七年討て齊を滅ぼす。文宣帝より是に至る五代二十八年なり。

北齊　北周　武帝　隋の江北一統　後梁及陳の滅亡

北齊の帝系

文宣帝[1]―廢帝[2]殷

―孝昭帝[3]

―武成帝[4]―帝緯[5]

◉北周　孝閔帝明帝みな宇文護に弑せられしが、武帝立つに及びて護を誅し、尋て齊を滅ぼし江北を一統して國政大に治まる。武帝の後宣帝を經て靜帝に至る。年幼なるを以て太后の父楊堅政を輔け、五八一年其禪を受く。之を隋の文帝とす。孝閔帝より是に至る五代二十五年なり。

北周の帝系

孝閔帝[1]

明帝[2]

武帝[3]―宣帝[4]―靜帝[5]

◉後梁及陳の滅亡　隋の文帝立ちて先づ後梁を滅ぼして其地を併せ、尋て陳の後主叔寶が政を失ふに乘じ討て之を滅ぼす。陳は武帝より是に至る五代三十二年なり。

陳の帝系

武帝[1]―文帝[2]―廢帝伯宗[3]
宣帝[4]―後主[5]

隋の南北一統

●隋の南北一統 晉以來分裂せる支那も是に至りて始めて一に歸す、時に五八九年なり。

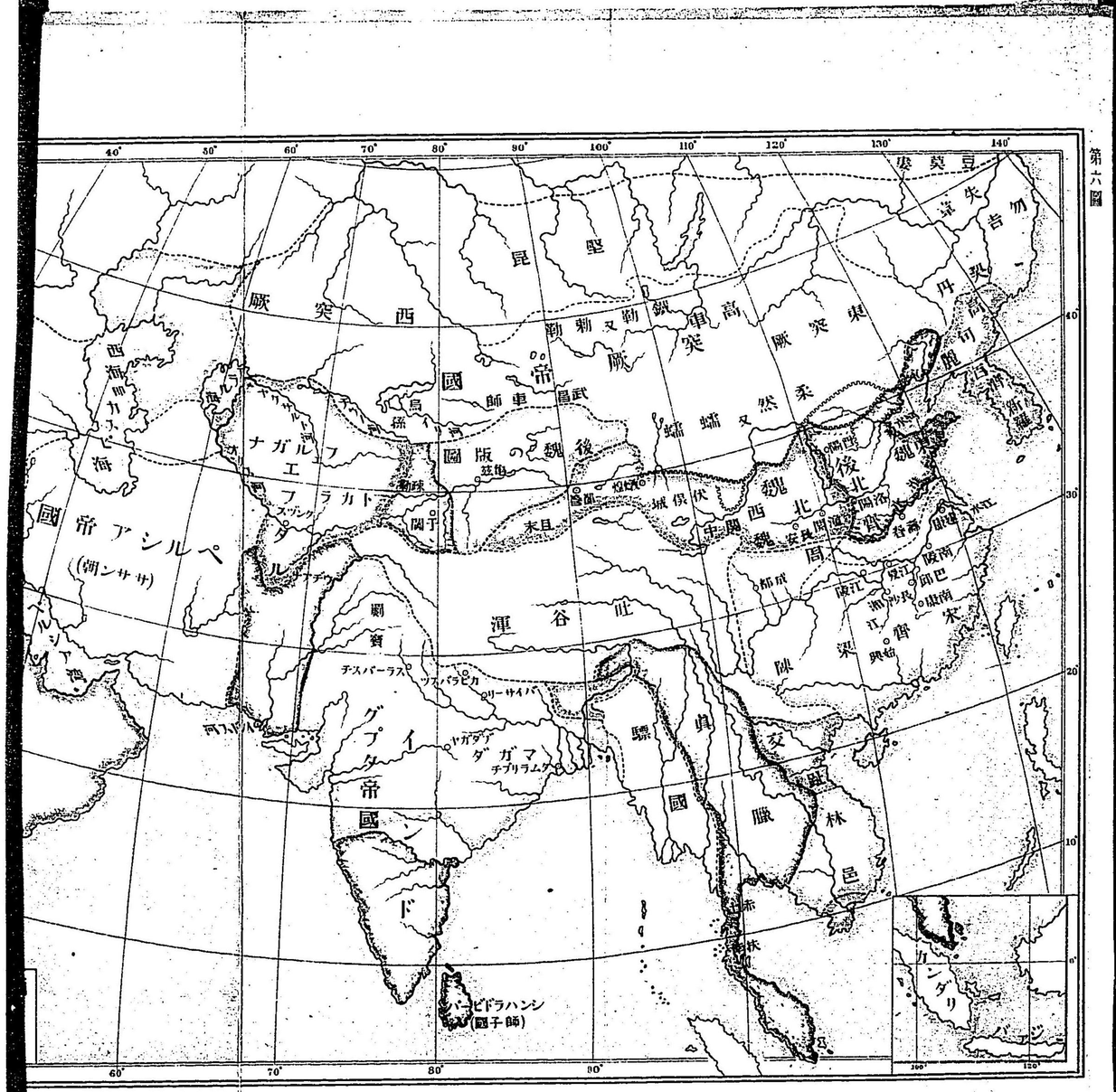
第二十五章 魏晉六朝の文化

(一) 儒學 南朝 范曄
北朝 王肅 王朔 王殉 何妥 杜臺卿 李鉉 熊安生

文 曹操 曹植 諸葛亮 陸機 潘岳 庾信 酈善 蕭統

(二) 文藝 詩 陶淵明 謝靈運
史學 范曄 沈約 蕭子顯 魏收
駢儷文 陸機 潘岳

(三) 道教 後魏の太武帝 周の武帝之を崇信す


第六圖
40° 50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120° 130° 140°
40° 30° 20° 10° 0°
豆莫婁
勿吉
失韋
契丹
室韋
高車
鐵勒又靺鞨
西突厥
東突厥
柔然又蠕蠕
昆
突厥
高句麗
百濟
新羅
帝國
車師
高昌
鄯善
且末
後魏
版圖
北魏
西魏
中國
後周
北周
南陳
南梁
南宋
江陵
建康
都所
興始
巴蜀
雲南
揚州
交趾
林邑
赤道
ペルシア帝國
(ササン朝)
ペルシア灣
ナガルフエ
トカラ
スラバヤ
ジャワ
ボルネオ
ニューギニア
ベンガル
ガンダラ
ガンジス
ヒマラヤ
ブッダガヤ
ダガダ
チブリラムダ
ヴィンディヤ
ゴダヴァリ
クリシュナ
カーヴェリ
ペンナ
ペンナル
ヴェンガイ
ヴァイガイ
ヴェンバル
ヴェンバル
ヴェンバル

第六圖

アジアの代時朝北南
(紀世六五紀西)
一之分万四五千三度尺
50 0 100 200 300 粁
東ローマ帝國
黒海
地中海
西突厥
東突厥
高車
鉄勒又
昆堅
吉尖
契丹
高句麗
靺鞨
新羅
百濟
倭
後魏の版圖
後魏
北魏
東魏
西魏
周
北周
陳
梁
後梁
後南朝
宋
南齊
南陳
吐谷渾
ペルシア帝國(ササン朝)
アラビア
グプタ帝國
ハルシャ帝國(戒日王朝)
ナガルジュナコンダ
アマラヴァティ
ヴァラビー
ヴィクラマシラ
ナーランダ
ヴィクラマシラ
ハリドラハンシ(玄奘師)
ヴァルダナ
ヴァルダナ
ヴァルダナ

(四) 美術 ┌書 顧愷之、張僧繇
　　 └畫 王羲之、王獻之

魏晉の儒學

南朝の儒學

北朝の儒學

文章

建安の七子

四六駢儷の體

儒學

六朝とは吳、東晉、宋、齊、梁、陳を云ふ。三國より隋の一統までの間なり。

◉魏・晉　魏の王肅簡約華美の學風を起し、鄭玄の敦厚深遠の學說と對立し、王弼、何晏また儒道に老莊を加へ清談の基を開く。是より北方は質實にして經學を尙び、南方は浮華にして詞賦を尙ぶに至る。而して晉初に於ける杜預の左傳集解を著名とす。◉南朝　東晉の世儒學盛ならず著作また少く唯范甯の穀梁集解ありしのみ。南朝に至ても更に振はず、經學專門の士甚少かりき。◉北朝　後魏の時徐遵明出て諸經に明なるを以て名あり、李鉉、熊安生等の碩學出て、諸經の註疏をなしたり。

文藝

漢末より文辭浮華に流れ徒に艷美を競ふ風あり。◉文章　曹操父子は文學を嗜み兵馬の間に斯道を忘れず、其下より建安の七子曹植、劉楨、王粲、陳琳、應瑒、阮瑀、徐幹出て、名を文壇に輝かせり。而して諸葛亮の出師表は誠意の滿てるを以て稱せらる。降りて晉及南北朝に至り文學益〻纖弱に流れて四六駢儷の体となり、所謂六朝の衰を致せり。されど詩賦大に進

文學者　南北朝時代に於ける學問の有樣は如何及び此時代の有名なる學者及び著作を擧げよ（海機二四）

梁の文學

史學

魏の太武北間

音韻學　研究文

歩し、五言詩の如き頗る妙域に達し、排律の基を開けり。◉文學者　晉初陸機、潘岳の名家あり、詩文を以て顯はる。晉末陶潛（淵明）出で詩に妙に冲澹雅遠の作を出せり。同時に謝靈運ありて頗る才藻あり。◉梁の武帝博學能く文を屬す。昭明太子蕭統、詞藻に富み文選を著す。謝朓沈約また詩文を以て名あり。稍、後れて徐陵庾信出づ。皆才學ありて其文体を徐庾体と稱す。◉史學　范曄の後漢書、陳壽の三國志、沈約の宋書、蕭子顯の南齊書、魏收の魏書等あり。

音韻學、駢儷文　◉音韻學は南北朝の時梁の沈約之を唱へ四聲譜を選して語言に平上去入の四聲あることを明にしたり。◉駢儷文　魏晉以來專ら文章の浮華虛飾を尚びしより、徒に字句の排偶を論じ聲調の整否を講ずるに至り、晉初陸機潘岳は駢儷文を創め文字を限り對句を用ゐたり。沈約の音韻學起るに及び音韻を以て文を綴し、四六を以て句を限り、變互に對句を作れり。而して此文體は唐に至りて衰ふ。

道教　魏晉以來老莊の學行はるゝにつれ盛に起り、佛教に對して優に一宗教となれり。殊に後魏の太武帝は天師道場を建て、太平眞君と改元し、符籙の武帝の排佛を受け頗る佛教を抑壓せり。周の武帝もまた道教を崇びるの餘り佛教を滅絕せんとせしが僧侶の之を爭ふによりて二教を併せ罷め、道士沙門を還俗せしめたり。

佛教　三國の時インドの僧法時、法蘭、佛圖澄、鳩摩羅什、龜玆國より來り、後秦の法顯は陸路よりインドに赴きて經を求め、數年の後海路より支那に歸れり。南朝にては梁の武帝深く佛教を信じ、有名なる◉菩提達摩　印度より海路渡來するあり、禪宗始めて行はる。北朝にては後魏の太武帝道教を信じて排佛主義を執り、頗る迫害を佛教に加へしが其死後貢武帝、孝明帝の如き信者出づ、殊に孝明帝の時には惠生、宋雲の二僧西域に入て經論百七十部を得て還り、佛教頗る盛なるに至れり。然るに北周の武帝は佛教を好まずまた迫害を加へしが隋に至て其勢を恢復せり。

法時、法蘭　佛圖澄　鳩摩羅什　法顯　菩提達摩　惠生、宋雲

第二十六章　傳記及解說

荀彧　荀叔の孫にして夙に才名あり、曹操に事へて謀主となり屢〻奇策を立てゝ功あり。操の九錫(キュウシャク)人臣無上の榮爵を要求するに當り之を諫め用ゐられずして自殺す。

周瑜　字は公瑾(コンキン)、孫策孫權に事ふ。策の江東を定むる其力多きに居る。赤壁の戰に瑜僅に三萬人を以て曹操の十萬に當り大に之を破る。次で瑜大に北方に發すあらんとして病んで死す。

關羽　河東の人なり劉備と友とし善し備兵を擧ぐるに及び張飛と共に奔走し艱苦を避けず義勇天下に冠たり。備の爲めに江陵に據り威を振ひしが呉將呂蒙に搦にせられて殺さる。

張飛　涿郡の人劉備に事ふ。其勇能く當るものなし。備呉を伐つに方り將に發せんとし仇家に殺さる。

法時　三國の時佛教は中國に流布し魏呉の諸帝尤も尊信す。インドの法時洛陽に來り戒律を譯せり。魏人爲めに戒を受け剃髮するもの多し。

諸葛亮　字は孔明、琅琊の人なり襄陽に寓居し常に自ら管仲樂毅に比す。劉備三たび其廬を訪ふ。亮其恩義に感じ遂に出でゝ天下三分の策を劃し、備を輔けて蜀漢を建て漢統を嗣がしむ。備の死後劉禪を輔導し、東呉と和し、北魏と爭ふ。後魏將司馬懿と五丈原に對抗し病んで死す。年五十四。其智略鬼神の如し。其出師表の如きは至誠忠烈讀者をして感泣せしむ。

姜維　字は伯約、天水の人、武幹あり。初め魏に事ふ。後諸葛亮に用ゐられ征西將軍に累進す。亮の死後費禕と共に內外の政務に當る。常に大擧して魏を伐たんとし三たび師を出して克たず。蜀漢の亡ぶるに至り遂に魏に降る。後長安に反し、却りて其將士に殺さる。

杜預　西晉の名臣なり。文武の才あり。鎭南大將軍となり羊祜に代て荊州軍事を都督す。呉主皓政を失するに及び武帝の命を受け王濬と共に呉を伐ち江陵より進み奇策を出して建康に至り遂に呉主を降す。預また心を經史に注ぎ諸書に註解す。就中左傳集解の如き尤も後世に重ぜらる。

張華　西晉の武帝惠帝に事へ文學才識あり古今の秘書珍籍を藏す。武帝曾

て漢の宮室制度を問ふ。華其沿革を述べて一も遺す所なし。是に於て常に命を受けて詔誥を草定す。累進して尚書武縣侯となり持節鄨州諸軍事に轉ず。八王の難事を以て趙王倫に殺さる。

陸機　字は士衡、呉郡の人。陸抗の子なり。身長七尺、音聲鐘の如し。幼にして才智あり。成都王穎に用ゐられ其軍を司る。穎兵を起し長沙王乂を伐つに當り大都督に任ぜられ、大敗して讒に逢ひ殺さる。機また詩文に長じ作る所の長篇皆金石の聲あり。

王衍　字は夷甫、風采秀麗の才子なり。清談を好み空理を談じて得意とす。大尉たりと雖も政治を以て任ぜず。石勒に殺さる。

佛圖澄　インドの僧なり。晋の愍帝の朝洛陽に來りて佛教を弘む。のち後趙の石勒に崇信せられ、大和尚となりて政治に參す。勒死し、石虎また師事す。三四八年壽百十七を以て死す。

祖逖　洛陽の人なり。少にして大志あり。中原亂るゝに及て南渡し、司馬睿に事へ請うて將となり河北を恢復せんとし、豫州刺史に拜し、纔に五千人を與へらる。逖江を渡る時誓うて曰く、我中原を清むる能はずんば、再び此江を渡らずと。睿後位に即て元帝となるに及び、戴淵來て豫州の軍事を督するに至り、感憤病を發して死す。

王導　字は茂弘、東晋元帝の功臣なり。力を盡して帝を輔導し、其勢漸く盛にして、一族皆高貴に任ぜらる。從兄王敦の反せし時、導は大都督となりて之を討つ。導性儉素、身は三世の相として倉に蓄穀なく、身に絹を重ねず、死するに及び詔して天子の葬禮を用ゐるを許さる。

陶侃　鄱陽の人、幼にして父を失ひ且つ貧なり。其母髮を切り賣りて生計を助く。長じて將才あり、東晋に事へて大尉となる。元帝の時湘州の劇賊杜弢を翠破す。明帝の時征西大將軍となりて荊湘等の軍事を總督し、銳意治を圖り、軍紀を正し、百性を撫す。蘇峻の反するや之を討て功あり。威望大に高まる。軍に從ふ四十一年、性聰敏恭儉、職を勤めて倦まず、常に曰く、大禹は聖人にして寸陰を惜む、衆人は當に分陰を惜むべしと。三三四年死す、年七十六。

王猛　字は景略、北海の人なり。夙に大志あり、陝西に隱居す。晋の桓溫關に入るをきゝ、粗衣を着て來り謁し、貳を捻りて當世の務を談ず。後前秦の苻堅に用ゐられて丞相となり、堅を輔けて江北に雄視せしむ。三七五年死す。

謝安　東晉の人、字は安石、會稽に居り山水を賞し、讀書を以て自ら娛む。無官と雖も重望あり、士太夫相謂て曰く、「安石出でずんば蒼生を奈何せん」と。年四十餘にして始めて官に仕ふ。桓溫密に不臣の志を蓄ふ、安之を沮て果さしめず。安文雅にして大に之を破る、官太保を以て死す。

法顯　俗姓は龔、平陽の人、晉の安帝の時佛法を求めんとし、長安を出て萬苦を經て印度に入り、三十餘國を歷遊し大に經律を得、轉じて師子國に至り、途上山河險崖、人未だ到らざるの地を經、具に寒暑飢疲を嘗め、歲を經る十二年にして歸國す。初め同行十餘人、無事に歸りしは法顯一人のみ、其著佛國記は名最も高し。

鳩摩羅什　龜玆の人、幼にして僧となり、罽賓に遊て佛敎を學び、疏勒、溫宿等の諸國に大小乘の奧旨を叩く。のち後秦の姚興に迎へられて長安に至り、其崇信を受け、徒弟と共に佛經三百餘卷を譯出す。四一三年長安に死す、年七十四、實に三論宗の祖なり。

陶潛　字は淵明、尋陽の人、陶侃の孫なり、曾て彭澤の令となりしが、監督官到るに及び歎じて曰く、「我豈に五斗米の爲めに腰を屈して鄕里の小兒に向はんやと、卽日辭して去り歸去來賦を作る。宋の文帝の時死す、靖節先生と號す。

謝靈運　陳郡の人、博覽にして詩文に工なり、姓豪奢にして禮節に拘はらず、仕へて太子左衞率となり、後出でゝ永嘉太守となる。尋て官を辭し門生數百人を隨へ山澤に行吟す、後誣告せられて叛し捕斬せらる。

菩提達磨　南インドの僧、五二〇年南海より支那に來り梁の武帝に見えしが、帝の佛理を悟る能はざるを知り、去りて嵩山に寓し、面壁九年にして五二八年死す、之を支那禪宗の祖とす。

蘇綽　西魏の宇文泰に事へて尙書となり、諸政を治め、周の法に依りて六官を定め、戶籍を作り、府兵の法を立て、新制三十六條を頒ち、晉以來の浮華なる文章を患ひ古文を復興す、其施設皆後世の模範となる。五四六年（西魏の大統十二年）死す。

六朝　吳、東晉、宋、齊、梁、陳を云ふ、何れも健康に都せり。

淸談　西晉の時行はれし一種の學風なり、蓋し漠亡て三國鼎立の世となり、

更に西晉の之に代るあり、時勢變遷定まりなきより、學者等皆老莊虛無の說を信じ、醉裸放吟して時と浮沈するを達となすに至りしより起りしなり、其徒に竹林の七賢等あり。

第三期　隋唐時代　（西紀五八九——九〇七年）

南朝（一百七十年）＼隋（三十年）／唐（二百九十年）
北朝（一百四十三年）／（二代）＼（二十代）／（五代）

第二十七章　隋の興亡

(一) 文帝（天下一統）
　善政仁政
　一、宮苑を營む
　二、運河を開く
　三、長城修築
　四、盛宴豪奢
　一、林邑を討つ
　二、琉球を討つ
　三、吐谷渾征伐
　四、高勾麗と交戰す
　群雄起る
(二) 煬帝
　外政
　一、林邑を討つ
　二、琉球を討つ
　三、吐谷渾征伐
　四、高勾麗と交戰す
　結果　群雄起る
(三) 恭帝（宇文化及上皇を弑す）
　唐公李淵隋に代る

文帝の政治

文帝、姓は楊、名は堅、父忠は周に仕へて隋に封ぜらる、靜帝位に即くに及び太后の父たるの故を以て、政を執り遂に周祚を移す、即位の年將を遣はして陳を平げ、遂に南北朝を併せて天下を一統せり、帝在位の間專ら意を內治に注ぎ、諸制を釐革し、自ら率ずる儉素にして百姓を撫恤す、故に府庫充實して天下泰平を致せり。

煬帝の驕暴

文帝先に事を以て長子勇を廢し、次子廣を太子と爲す、既にして之を悔ゆ、文帝病重きに至り廣遂に帝を弑して位に卽く、之を煬帝と

煬帝の驕侈

宮闕を營む（隋の煬帝の事業（高師三六））

隋東征の事（一高三〇）

運河を開く

す。性豪華を喜び、内は土木を起し、外は屢〻遠征を企つ、費用算なく、徴税百端怨聲漸く起る。

(一) 宮闕を營む　凡二百萬人を役して東京を營み、また西苑を築きて結搆の美を極め、海内の嘉木、異草、珍禽奇獣を求めて苑囿に放ち、また長安より江都に至る間に四十餘の離宮を置き、巡遊の用に供せり。

(二) 運河を開く　交通往來の便を得んが爲め、民百萬を發して、㊀邗溝を開く、即ち今の衛河にして山東以北の運河なり。尋て㊁永濟渠を開く、即ち今の浙江の運河なす。後また㊂江南河を鑿つ、即ち今の浙江の運河なり。其他到る處河を鑿ち、長安より舟行して江南に達するを得べし、而して其兩岸に楊柳を植う、帝は龍舟に乘じ皇后以下群臣を從へ、洛陽より江都に幸す、其巡遊の盛古今に冠たり。

(三) 馳道を作り長城を築く　また北方に巡幸して河北の丁男を發し、太行山を穿ちて、馳道を幷州に通じ、百餘萬人を發して長城を西北の地に築く。

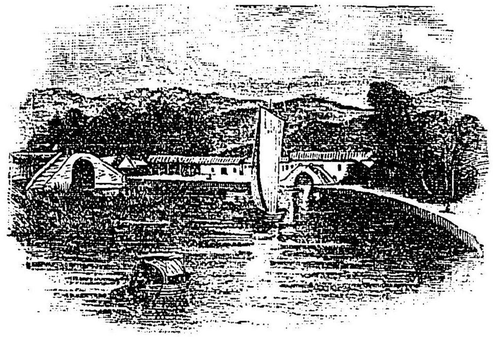
(四) 清夜の宴　或は天下の應師を集め、或は樂師を徴し、或は月夜に宮女數千騎を從へて清夜の宴をなし、奢侈逸樂を極めたり。

長城を築く

清夜の宴

第十圖

運河の圖



河南省龍門の千佛崖
（南北朝より唐代の彫刻）

唐平百濟塔碑
（韓國忠清道扶餘縣）

高句麗を伐つ

天下亂を思ふ

李淵

煬帝の外征　帝また遠畧を好み、南は林邑(ナアムン)を降し、東南は流求(臺灣)を征し、西は吐谷渾の餘衆を伐ちて青海の地を開く。◎高句麗を伐つ　是より先き高句麗の嬰陽王は隋の己を伐たんとを恐れ靺鞨族を率ゐて隋を侵す、文帝怒り兵を發して之を伐ちしが勝たず煬帝乃ち前敗を報ぜんと欲し、六一一年大兵を發して之を伐ちしが、大敗して還る。後二年又大兵を發して遼東城を攻め、又克つ能はず、翌年三征するに及び高句麗遂に降る。

群雄の割據　かくて煬帝は土木に征伐に財力を盡せしかば天下之に苦み、皆亂を懷ふに至れり。是に於て竇建德(トクトク)は河北に據りて長樂王と稱し、李密は河南の諸郡を略取して魏公と稱し、江南の地には林士弘、鄱陽に據り、蕭銑、巴陵に據り、北邊の地には劉武周、馬邑に據り、梁師都、朔方に據り、其に突厥に臣服す、而して小國其間に介在し、海內亂れて麻の如し。

隋の滅亡　是より先き唐公李淵、太原の留守たりしが世の亂るゝを見、其子世民の勸めに從ひて兵を起し、擾を突厥に借り、長安を取て代王侑を立て恭帝となし、煬帝を尊て太上皇となす。時に煬帝江都にあり、中原の亂れたるを見て北歸の心なく、日夜酒色に耽りしかば、從駕の士皆長安に歸ら

煬帝江都に弑せられる

隋亡ぶ

んと欲し、宇文化及を奉じて亂をなし、兵を引て宮に入り上皇を弑し、また悉く隋の宗室を殺す。此間李淵は大丞相となりて、唐王に封ぜられ、遂に隋の禪を受く、唐の高祖是なり。隋は凡三世三十七年にして亡ぶ、時に六一八年なり。

隋の帝系

文帝[1]
- 廢太子勇
- 煬帝[2]——太子昭——恭帝[3]
- 漢王諒

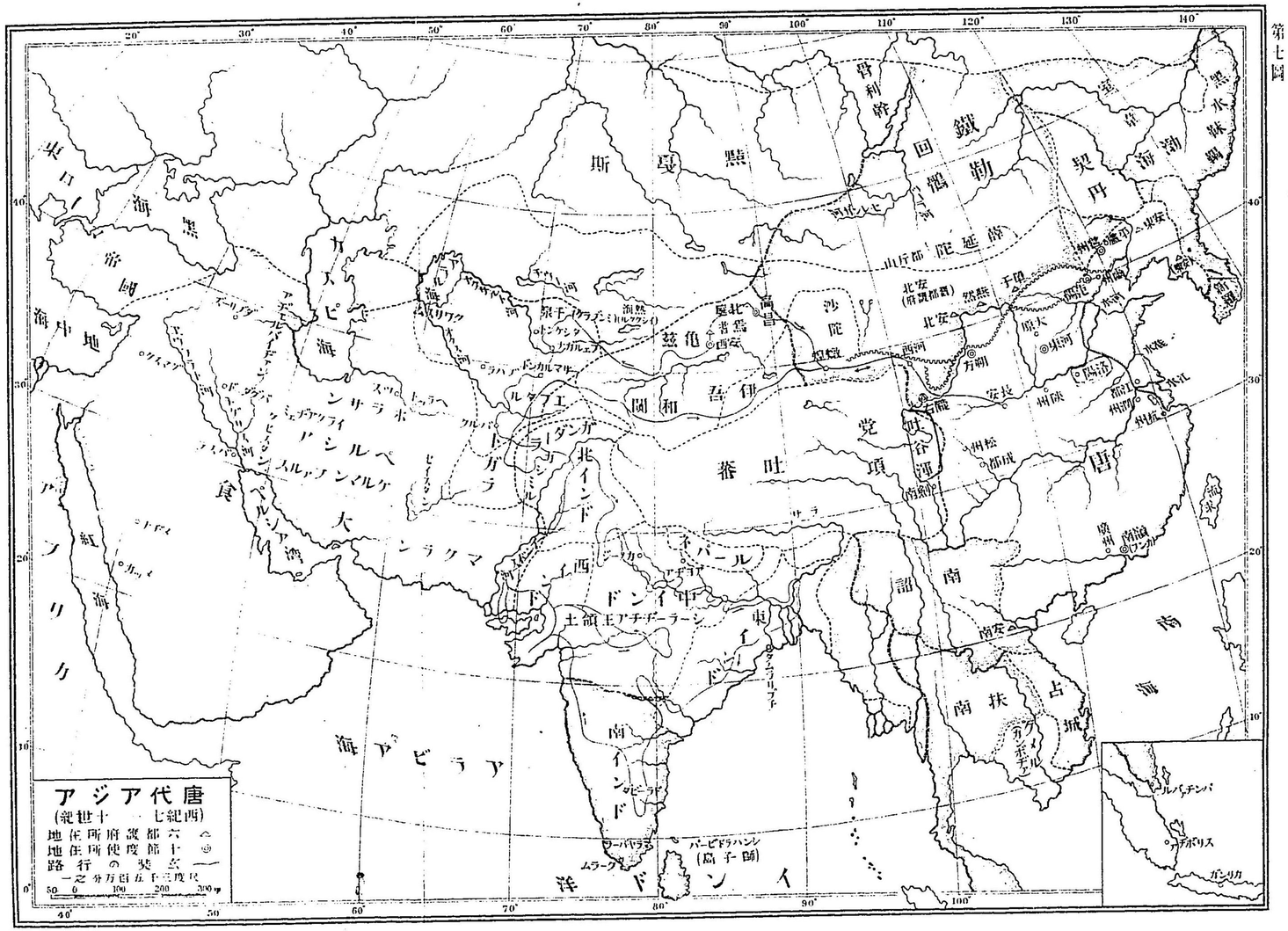
第二十八章　唐の初葉

(一)　高祖

隋の禪帝の禪を受く
天下一統
- 一、高祖を助けて天下を一統す
- 二、玄武門の變
- 三、高勾麗征討——功なし

其武勳

第七圖



(二) 太宗
- 其文績
  - 一、文學館——名士十八人
  - 二、貞觀の治
    - 1、宰相——房杜
    - 2、諫臣——魏王
    - 3、將軍——兩李

(三) 制度
- 一、官制
  - 三師、三公
  - 三省
    - 中書省
    - 尚書省——六部
    - 門下省
- 二、祕法——租、庸、調
- 三、兵制——折衝府——三等
- 四、刑法——五刑、八議、十惡

高祖の業 唐の高祖、姓は李、名は淵、隴西成紀の人なり。隋の煬帝の時賊を討じて屢〻功を立つ。帝位に上る時、群雄各地に割據して海內尚ほ未だ定まらず、高祖乃ち內は心を政に用ゐ、外は世民をして討伐を行はしめ、七年にして漸く天下を一統し長安に都せり。

唐の高祖

唐の天下一統 (唐の帝都 ⟨專門三八⟩)

唐の太宗
文學館
十八學士
玄武門の變
唐の太宗の事蹟（本書三七、三九）
貞觀の治
制度

太宗の治

高祖の業をなせしは皆世民の力なるを以て威名日に盛なり。

◎文學館を開く　世民國家の漸く無事なるを見て文學館を開き文學の士を招致す。房玄齡、杜如晦、虞世南、褚遂良、陸德明、孔穎達等十八人皆其會の學士たり。世民暇あれば乃ち館に至り、相共に文籍を討論し、名辰日に高し。

◎玄武門の變　其兄太子建成及弟元吉等之を嫉み、世民を殺さんとす。世民之を知り、先づ發して二人を玄武門に殺す。高祖遂に世民を立てゝ太子となし位を傳ふ。之を太宗となす。

◎貞觀の治　太宗既に位に卽き、貞觀と改元し、杜如晦、房玄齡等をして軍事を督せしめ、國威外に揚り、太平內に興る。夫として、李靖、李世勣等を擧げて朝政を統べしめ、魏徵、王珪等を諫議大稱して秦漢以來第一の名主となす。帝在位二十三年にして死し、子高宗位に卽く。高宗の初年は長孫無忌、褚遂良、李世勣等文武の諸名臣遺詔を受けて政を輔け、天下頗る太平なり。

唐の制度

太宗高宗の二代は實に唐室の最盛期にして諸般の制度もまた多く此際に成る。而して是等の諸制度は實に支那歷代の典範となりしのみならず、我邦及朝鮮に於ける歷代の制度もまた之に參酌せし所極めて多ければ、今左に制度の大略を敍すべし。

官制
三師三公
三省及六部
地方官制
十道

(一)官制

唐の中央政府には上に三省ありて天下の政治を統べ、更に其下に六部ありて行政事務を分擔す。而して別に三師、三公、◎三師三公とは太師、太傅、太保を云ひ、三公とは太尉、司徒、司空を云ふ。共に位尊くして實權なく、其人なき時は之を缺き、常設の官に非ず。故に實際中央政府に在りて、天下の大政を掌るは、◎三省と六部　となり。

三省名	長官名	事務分掌
中書省	中書令（天子の詔勅を宣奉す）	中書侍郎
尚書省	尚書令（既に確定したる事を施行す）	尚書僕射
門下省	侍中（詔勅を審査す）	門下侍郎

尚書僕射
- 左僕射
  - 吏部（官吏の進退）
  - 戶部（賦稅）
  - 禮部（禮儀）
- 右僕射
  - 兵部（兵備）
  - 刑部（刑罰）
  - 工部（土木）

六部

(二)地方官制

◎地方官制　天下を十道に分ち道の下に州あり、州の下に縣あり、縣には令を置き、州には刺史を置き、以て其地方の民治を掌らしめ、道毎に巡察使

官吏登庸法

を置き之を監察せしむ。㋑官吏登庸法　京師及地方の學校より出身する者を生徒と云ひ、州縣より推擧する者を鄉貢と云ひ、歲毎に生徒鄉貢を尙書省に會して之を考試し、合格せし者には官を授く。其科に秀才、明經、進士、明法の目あり。考試の科目は主として經義と時務策とにあり、經義は五經に就きて義理を問ふなり。此外天子親しく詔して行ふ制舉あり、以て非常の士を待つ、されど數年に一度のみ行ふ。

田制及稅法

(二)田制及稅法　天下の丁男年十八以上の者には官田百畝を給し、其二十畝を永業田として子孫に傳へ、自餘の八十畝は口分田として一代を限る。

戶籍

㋒租庸調　官田を受けたる丁男は年毎に收穫中より粟二斛を輸せざるべからず、之を租と云ひ、其土地の物産絹絁純麻布の類若干を納めざるべからず、之を調と云ひ、毎歲二十日國家の力役に服せざるべからず、之を庸と云ふ。卽ち租は田租、調は家稅庸は口稅なり。㋓戶籍　稅法は戶口に關係あるを以て、其調査を嚴にし三年毎に必ず戶籍を改む。

兵制

(三)兵制　全道に折衝府（セッショーフ）六百三十四を置き、折衝都尉をして之を統領せしむ。府に三等の別あり、兵千二百人を上府、千人を中府、八百人を下府とす。兵は地方を鎭壓するのみならず、年毎に交代して京城に參ず。㋔軍隊組織　十人を火として長一人を置き、五十人を隊として隊正一人を置く。されど高宗より以後は其制漸く破れ三百人を團として校尉一人を置くなり。

軍隊組織

刑法

(四)刑法　支那の刑法は唐に至りて尤も備はる。刑に五種あり、笞、杖、徒、流、死是なり、之を五刑と云ふ。笞杖徒の三刑は五等に分れ、流刑は三等に分れ、死刑は絞斬の二等に分る。皆相當の銅を納れて其罪を贖ふを許す。但し十惡を犯したる者は八議に當るも其罪を容さず。㋕八議　親故賢能功貴勤貧の孰れかに當れば、評議に附して減刑または宥怒す。㋖十惡　謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、不敬、不孝、不睦、不義、內亂の一を犯せば、八議の特典を受くるを得ず。

八議

十惡

六部設

唐の版圖

隋は南北を一統せしが、其國威尙ほ未だ塞外に振ふ能はず、唐に至り太宗、高宗の世四十年の外征に因り、中南、東三方の亞細亞大陸は殆ど皆唐に屬し、內屬の諸邦八百ありて、六都護（安東、安西、安南、安北、單于、北庭）之を統べ、漢族の盛運茲頂點に達し、ペルシア、東ローマ、大食の如きもまた

皆使節を通ずるに至れり（後章に詳述す）。

第二十九章　唐の中葉

- 其出世
- (一) 武后
  - 其專恣
    - 暴虐
      - 一、王后を殺す
      - 二、太子二人を殺す
    - 專横
      - 一、執政
      - 二、太子三人を廢す
      - 三、武氏祖考追王
      - 四、國を周と號す
  - 其結果
    - 一、善政
    - 二、惡政　名士任用　酷吏任用
    - 三、滅亡　張東之の唐室再興
- 專横
  - 一、其原因——中宗の約
  - 二、群小を愛し、忠良斥けらる
  - 三、重俊の反——平げらる
- (二) 韋后
  - 暴虐
    - 一、淫亂
    - 二、中宗を弑す
  - 結末　隆基に殺さる
- (三) 玄宗
  - 初年
    - 名臣——姚崇宋璟
    - 開元の治——善政
  - 晩年
    - 一、貴妃楊太眞
    - 二、奸相李林甫
    - 三、安史の亂
- (四) 安祿山
  - 一、其出世
    - 二、楊貴妃に結ぶ
    - 三、三鎮を領す
  - 二、其謀反——顔眞卿顔杲卿 / 郭子儀李光弼 } 賊を討ず
  - 三、其滅亡——李懷仙出て降る

武氏皇后となる

則天武后の事蹟（一七頁三七、三九）

唐室反乱の亡なるものを數へよ（圖解三四）

武后の執政

武后の暴虐

武后の出世

初め太宗の才人に武氏と云ふ者あり、太宗の死するに及て、尼となる。高宗の世に至りて王皇后は蕭淑妃と寵を爭ひ、窃に武氏をして髪を蓄へしめ、高宗に勧めて宮に入れ、遂に昭儀となす。武氏性驚悍にして機略あり、巧に王后を誣告す。高宗遂に王后を廢し武氏を立てゝ皇后となせり。

武后の專恣

武氏立ちて已に反對せし褚遂良、長孫無忌を貶し、漸く權を恣にす。◎武后の執政　高宗風眩を病み百司の奏事を視る能はず、武后をして裁決せしめしに諸事皆意に協ふ、武后是より諸政に參與し威權人主と伴しきに至れり。◎武后の暴虐　高宗歿するや、太子忠を廢して己の子弘を立つ、弘仁孝にして中外心を屬せしが、后の意に忤ふや之を殺して雍王賢を立つ。後また事に依りて之を廢し、英王哲を立つ、中宗是なり。在位僅に二ヶ月にしてまた之を廢して其弟豫王旦を立つ。太后乃ち朝に臨て廢太子賢を殺し、中宗を房州に遷し、武氏の祖考を追王す。◎李敬業兵を起す。武氏を討じ勝たずして走す。敬業は李世勣の孫なり。◎越王貞◎琅琊王沖◎唐室再興　張柬之

武后國を周と號す

武后皆密の門を閉く

在廷の名士

唐室再興

張柬之

武后逝く

韋后政を亂す

太后遂に大に唐の宗室を殺し、六九〇年自ら曌と名け、聖神皇帝と稱し、國號を改めて周と云へり。

武后の施政

武后既に帝位に上りて、人心の服せざるを知り、大に告密の門を開き、酷吏を任用して鍛錬羅織し、誅滅せる者數ふべからず、然れども權略ありて善く人を用ゐしかば、◎在廷の名士　徐有功、魏元忠、婁師德、狄仁傑等の徒皆其禦御を受けぬ。就中狄仁傑の如きは其尤も信重せらるゝ所たり。◎唐室再興　武后年既に老ひて政を親らせず、次て病に罹る。是より先き狄仁傑疏し、遺言して張柬之を任用せしむ。張柬之等武后の病重きに及び、同志と謀りて嬖臣張易之、張昌宗を斬り、武后に迫りて位を中宗に讓らしめ且を相王となす。唐の周を稱せし者十六年。◎武后逝く　中宗位に卽き、后を尊びて則天大聖皇帝と云ひ、上陽宮に遷し、此歲死す年八十二。

韋后の禍亂

初め中宗の廢せられて廬陵に在るや、皇后韋氏困厄を共にし慰勵尤も勉む、中宗依りて約して曰く、「他日再び天日を見るを得ば、其爲すに任せん」と。是に至り遂に朝政に與り、且つ武三思に通じて私をなす。是

重俊の反

より政權韋后と三思とに歸し、功臣張柬之斥けられて群小用をなす。◉重俊の反　中宗の子重俊太子たり、其行を惡み兵を起して三思を殺し、韋后を除かんとし事成らずして敗死す。◉暴虐益甚し　韋后尚ほ其行を改めず、淫亂暴虐益甚し、甚く、遂に中宗の女安樂公主と共に中宗を弒し、温王重茂を立て、同族を引きて要地に列せしむ。◉隆基韋氏の亂を平ぐ　是に於て相王の子隆基兵を擧げて亂を討じ、韋后及安樂公主を斬りて悉く其黨與を誅し、温王を廢して相王を迎へ立つ。睿宗是なり。睿宗、隆基を立てゝ太子となし在位三年にして位を讓る。之を玄宗皇帝と云ふ。

隆基兵を擧げて韋后を殺す

玄宗

姚崇
宋璟

玄宗開元の治

開元の治

玄宗晚年の治

玄宗既に禍亂を定め、刷新治を圖り、姚崇、宋璟、韓休、張九齡等の諸名臣を任用し、儉素を尚び賦役を輕くし、刑罰を愼み、專ら學術を奬勵せしかば、戸口繁殖して文物工藝大に興る。帝また十節度使を要地に置き兵馬の大權を委ねて四方を經營せしむ。後世之を開元の治と稱して唐の盛世となす。而して所謂宗治世の年號と云ひ、貞觀の治と并べ稱して唐の盛世となす。而して所謂姚崇を唐代の名相と稱す。◉晚年の治世　然るに帝は晚年に及びて漸く驕奢の念を生じ、奸黠なる李林甫を相とし、壽王の妃楊太眞を容れて貴

妃としまた國事を顧みず。尋て貴妃の從祖兄楊國忠代り相となるに及び、朝政爲に紊れて遂に安史の大亂を生ずるに至れり。

安祿山

安祿山（安祿山（高師三一））

安祿山楊貴妃に結ぶ

安祿山の出世

安祿山は營州の雜胡にして驍勇を以て知らる。曾て幽州の節度使張守珪の部下に屬して契丹を擊ち、敗軍の罪に依り斬に當る、守珪其才勇を惜みて京師に送り、朝廷の處分を仰ぐ。玄宗また其勇を惜み罪を赦して營州の都督とし、後遂に平盧の節度使となし、尋て范陽の節度使を兼ねしむ。◉楊貴妃に結ぶ　祿山先づ貴妃の意を得て玄宗の寵を固くせんと欲し、宮中に出入して諂佞至らざるなく、頗る醜聲ありしが帝更に意とせず、次て河東の節度使を兼ねしむ。祿山既に三鎭を領し、密に謀叛を企てし、林甫を憚て敢て發せず、林甫の死するに及び始めて反す。

安祿山の謀反

七五五年（天寶十四年）祿山遂に反し部下及奚契丹の兵凡十五萬を率ゐて范陽より南下するや、河北の郡縣皆風を望みて瓦解す。祿山進みて洛陽を陷れ自ら大燕皇帝と號す。◉官軍の擧兵　平原（山東府）の太守顏眞卿、常山（直隸正定府）の太守顏杲卿及朔方の節度使郭子儀河北の節度使、李光弼等各義兵を擧げて之を禦ぎしが杲卿は執へられて殺され、

玄宗蜀に出奔す

官軍皆敗れ、賊の勢頗る猖獗にして遂に潼關に入りしかば、帝は蜀に出奔し位を太子亨に禪り（七五六年太子靈武（甘肅靈州）に即位す、肅宗是なり。）

安祿山殺さるる

僞郭子儀、李光弼等兵を率ゐて之に會し、官軍漸く振ふ。◉安祿山殺さるる會、祿山其少子を愛し、之を立てゝ長子慶緒を廢せんとするや、慶緒遂に父を殺して自立す。尋て郭子儀等賊を破て長安を復し、廣平王また洛陽を取る。慶緒遂に鄴に奔りしが、幾許もなく其臣史思明に殺さるる。◉史思明殺さるる

大亂平定

された。思明もまた其少子を愛し長子朝義に殺された部下、李懷仙に殺され、懷仙出て降りて八年の兵亂全く平定に歸せり。

第三十章　唐の末葉

一、跋扈

原因—軍政に參す

行爲—天子廢立

二、宦官

(一)藩鎭

(二)抑制

討滅—西川鎭海淮西

唐滅亡の原因

(一)藩鎭

(二)宦官

(三)朋黨

(四)擾亂—王仙芝黃巢朱全忠

藩鎭の勢漸く重し

藩鎭の專橫と其背反

藩鎭の跋扈

玄宗の時邊要に十節度使を置きしが、安史の亂後內地にもまた節度使を設けたり。是等の節度使は皆甲兵、土地、財賦の三權を併せ握りしかば藩鎭の勢漸く重きを致せり。◉其專橫　加之、代宗は賊の降將李懷仙、田承嗣、李寶臣を盧龍（北京）、魏博（直隸大名府）、成德（直隸正定府）の節度使に任ぜしより、河北の諸鎭相結て朝廷を輕じ、或は其職を世襲し、或は士卒自ら留後を定め、其跋扈甚しく、遂に偕して帝王と稱し貢賦を納めざるに至れり。◉其背反　德宗位に卽きて精勵治を圖り、楊炎の兩稅法を採用し、國庫を

宰せしが宰相盧杞の政を専にするありて政令日に乱れ藩鎮の禍漸く熾にして朱泚田悦等の跋相踵て兵を起し李希烈朱滔また反するに至れり帝乃ち陸贄の説により杞を貶して天下に謝せしも漸く靜謐に赴せり。

朱泚の亂
陸贄
楊炎
兩稅法
稅間架除陌
奚元濟の亂

兩稅法及稅間架除陌

安史の亂後班田の法既に頽廢し藩鎮貢賦を私して國庫に納せず財政頗る困難なりしかば德宗は楊炎の建議を容れて◎兩稅法を行へり。其法毎戸主客を問はず凡て現在者を籍に上せ、各人其貧富に應じて一定の稅を夏秋兩期に納めしめ行商の者は其所在の州縣にて之に課稅し僥倖する所なからしむ是に於て國庫稍豐なるを得たり。後朱泚の亂をなすや盧杞の說にて◎稅間架除陌の法を行へり前者は民屋の廣狹を計て稅を課するを云ひ後者は公私の賣買百毎に其五を官に納めしむるを云ふ。

藩鎮の制抑

德宗の孫憲宗英武なり內は賢相杜黃裳李絳に任じ外は名將武元衡裴度を用ゐ先づ西川(劍閣)鎭海(李錡)の二鎭を討滅し漸く諸鎭を抑制することを得たり。◉吳元濟の亂 是より先き德宗の末年に吳少

誠淮西に反せしが少誠死して子元濟自立するに及び侵掠を恣にせしかば、憲宗は裴度に命じて之を討平せしむ是に於て代宗以來跋扈せる河朔の藩鎭も悉く朝命に從ひ天下稍〻寧靜を得たり。◎憲宗晩年の治 然れども帝是より宮禁に居て漸く朝政を視ず多く中官に委ねしかば國政日に亂れて藩鎭また反き帝は遂に宦官に殺せらるゝに至れり。

格頑全く期會に從ふ
憲宗の晩年
宦官專恣の原因
甘露の變
宦官の勢益々長ず

宦官の專橫

唐初宦者の位置頗る卑く勢威もまた輕かりしが武后の時より其人員漸く多く中宗の時には七品以上の者千餘人に上り玄宗の時には四千餘人に達し京畿の田園は大抵其有に歸したり。◉專恣の原因 德宗の時に至り宦官をして禁軍を掌らしめまた機務に參せしめたるより其勢益〻強く歷代天子の廢立弑逆をなし憲宗穆宗の如きは遂に其毒手に斃るゝに至れり。◎甘露の變 敬宗の後敬宗を弑て文宗立つ帝素より宦官の專橫を憤り鄭注李訓等と謀して宦官を誅せしめんとす是に於て訓等詐りて宦官を誘殺せんとし人をして後苑に甘露降れりと奏せしむ、帝仇士良等をして諸宦官を率ゐ往きて見せしむ士良等既に至り幕後に兵を執る者あるを見て大に驚き歸りて變を奏し禁軍に令して宰相王涯

等を執へ、所謂ゆるに謀反を以てして之を腰斬し、李訓、鄭注等を執へて之を殺さしむ。是より宦官の勢益盛にして、天下の事皆内省に決するに至る。

唐室衰亡の原因

朋黨の排軋　朋黨、李牛の爭は、穆宗より宣宗に至る六代四十餘年に亘れるものにして、藩鎮及宦官の禍忠と共に唐室衰亡の原因となれり。

李牛二黨互に政府に出入す

㊀李德裕と李宗閔　初め穆宗の時李德裕の翰林學士となるや、父の怨を以て李宗閔を貶す。文宗の時德裕兵部侍郎となり、宗閔吏部侍郎となる。宗閔宦官の助を借りて同平章事となり、遂に德裕を出して義成の節度使となし、武昌の牛僧孺を引きて幷び相となす。是より二人力を幷せ德裕の黨を斥け、專ら德裕を西川の節度使となせり。時に吐蕃の將降を乞ふ德裕之を納れんとし牛僧儒固執して聽かず、遂に之を送還す。是に於て兩派の雄長深し。㊁二黨互に政府に出入し、二黨交る〳〵相排擠して止まず。◉武宗德裕を任用す　武宗立つに及び德裕を擧げて相とす。德裕河東の亂を治めてより益優遇せられ、勢望漸く盛なり。依りて牛僧儒を貶し、李宗閔を流し、獨り其威權を專にす。◉主領皆死す　宜宗立つに及び、德裕の專橫を惡みて之を貶す。爾來三人

朋黨の爭始めて已む

相次て死し、朋黨の爭始めて止む。

王仙芝黃巢の亂

大賽皇帝

李克用

朱全忠

海内分裂す

内外の爭亂　宜宗は明察恭謙、能く諫を納れ民を愛し、爲に小太宗の美號を得しが、懿宗に及び浙東に裘甫の亂あり、徐州に龐勛の亂あり、幸にして忽ち平ぎしが、◉王仙芝黃巢の亂起る　僖宗の朝に王仙芝兵を起し、黃巢之に應じ、淮南、山東を抄略して勢猖獗なり。院にして仙芝は誅せられしが、黃巢の勢益盛にして遂に洛陽を陷れ、長安に入りて大齊皇帝と稱せり。◉李克用出づ　時に沙陀の部長に李克用と云ふ者あり、驍勇にして能く兵を用ふ。勅に應じて賊を討じ、連戰之を破り長安を復せしかば、破黨遂に黃巢を斬りて降る。是に於て爭亂平ぎ、帝長安に歸る。◉朱全忠出づ　時に黃巢の將朱溫、華州を以て降り、名を全忠と賜ひ宣武の節度使となり汴に在りしが、事に因りて克用を怨み、攻めて之を破る。是より全忠は汴に在り、克用は晉陽に在りて相敵視せり。

唐の滅亡　此時に當りて天下愈亂れて群雄四方に割據し、海内分裂して國政日に衰ふ。時に朱全忠の兵勢益盛にして天子を挾み諸侯に號令するの志あり。同平章事崔胤之を招くに及て兵を率ゐて長安に赴く。宦官韓全

海等帝を劫かして鳳翔に赴かしむ。全忠之を圍み悉く宦官を驅りて之を殺し、遂に帝を洛陽に移す。是に於て全忠の威天下に振ふ。然るに全忠勢に乘じ密に簒奪の志あり、人をして帝を弑せしめ、其子哀帝を立てゝ自ら相國となり、遂に帝に迫りて禪を受く。梁の太祖是なり。唐は二十主二百九十年にして亡ぶ。時に九〇七年なり。

唐の帝系

高祖[1]—太宗[2]—高宗[3]—中宗[4]
　　睿宗[5]—玄宗[6]—粛宗[7]—代宗[8]—徳宗[9]—順宗[10]
　　憲宗[11]—穆宗[12]—敬宗[13]
　　　文宗[14]
　　　武宗[15]
　　宣宗[16]—懿宗[17]—僖宗[18]
　　　昭宗[19]—哀帝[20]

第三十一章　隋唐の外交

(一) 韓土
　一、百濟滅亡
　二、高勾麗滅亡
　三、新羅一統
(二) 日本
　一、遣隋使遣唐使
　二、留學生
　三、遣唐使を罷む
(三) 突厥
　一、東突厥—太宗之を降す
　二、西突厥—高宗之を服す
(四) 回紇　唐に功ありキルギスに滅ぼさる
(五) 西域　太宗の時入貢す
(六) 印度　王玄策使して其内亂を平ぐ
(七) 渤海　睿宗の時唐の封册を受く
(八) 波斯　大食に滅ぼされ唐に降る

高句麗と隋との關係

吸陽王

唐の世に於ける東征の事蹟（一高三〇）

高句麗新羅を謀る

高句麗と唐との關係

唐の高宗百濟を伐つ　蘇定方

(九) 大食　西中アジアを併せ唐に通ず

韓土

高勾麗新羅百濟の情勢は既に前漢の末に述べたり。◉高勾麗隋兵を破る　高勾麗百濟同盟して新羅孤立するに當り、隋は南北兩朝を統一す、然るに高勾麗は先に陳と好を通ぜしを以て、隋の己を伐たんことを恐れ、嬰陽王に至りて隋の遼西を侵す。隋の文帝大に怒り、三十萬の大兵を發して遼東を攻めしが利あらず、高勾麗是より益〻横暴なり。會〻東部の大人泉蓋蘇文高勾麗の榮留王を殺して、寶藏王を立て百濟と親み新羅を圖るや、新羅救を唐に乞ふ。◉高勾麗唐の太宗を破る　太宗既に東突厥を滅ぼし、勢に乘じて親ら高勾麗を征し、安市城（盛京省奉天府東北平原縣）を圍みしも拔く能はず、會〻天寒く食また盡き大敗して歸る。◉百濟の滅亡　新羅頻年高勾麗、百濟及靺鞨の三國に侵略せられ、救を唐に乞ふ急なり、高宗乃ち蘇定方をして新羅の武烈王と會し、先づ百濟を伐たしむ。百濟の義慈王防戰して利あらず、六六〇年遂に唐軍に降る。其弟豐我邦に質たり、百濟の將鬼室福信、餘衆を糾合して之を迎へ、且つ援を我に乞ふ。齊明天皇筑紫に幸し、阿曇比羅夫等をして百濟を救はしむ。六六三年唐將劉仁軌大に我軍を白江口（錦江）に破る。百濟王豐高勾麗に走り、百濟遂に滅ぶ、時に六六三年なり。◉高勾麗の滅亡　唐既に百濟を滅ぼして之を伐たしむ。資藏王出でて降り、高勾麗亡ぶ、時に六六八年なり。唐乃ち平壤に安東都護府を置く。其子文武王嗣ぐ、また英主なり、頻に唐の領土を略し、遂に殆ど韓國全土を併せ、陽に唐に臣事せり。

百濟亡ぶ

高勾麗亡ぶ

新羅韓土を併す

日本隋唐の國際

日本と支那との交通

支那と韓土との關係漸く繁く、隨て我邦との交通もまた頓に盛大となる。蓋し我が邊民の支那と交通せしは既に久しき以前にあり、支那の正史に光武帝我が通交者に印綬を授け、我を倭または耶馬臺と稱せることを記せり。我朝もまた時に使を發して工女を吳（東晉及南朝）に求めたる事あり、然れども兩國々際上の交通は實に隋唐より始まれり。

遣唐使

◉遣唐使　推古天皇の時厩戸皇子政を攝し、佛法を興隆せんと欲して、六〇七年小野妹子を隋に遣はす。唐起るに及び歷朝遣唐使を遣はし同時に留學生を送り、制度文物一に彼に倣ふ。

留學生

◉留學生　當時學生僧侶の唐に留學する者頗る多く、粟田眞人、吉備眞備、阿部仲麿等は儒學を修め、道

道唐使止む

昭、最澄、空海等は入唐して佛法を傳へ、時に或は唐朝に仕へて高官を拜する者あるに至れり。◉遣唐使を罷む　唐の末世其國運の衰頽するや、菅原道眞宇多天皇に奏して遣唐使を罷む。爾後僧侶商賈の支那に來往する者尚ほ絶えずと雖も、兩國々際上の交通は是に至りて長く磨絶せり。

突厥の勃興

土門と木杆

突厥（トルコ）

突厥は匈奴の別種なり、世々金山（アルタイ山）の南に居り柔然に事へて鐵工となる。土門に至り始めて柔然に叛く、其子木杆可汗に至り遂に柔然を滅ぼし、西嚈噠（エフタル）を取り、東契丹（キタイ）を走らせ、北結骨を併せ、また周齊二國より貢獻を徴し、威令遠く遼東より裏海に及べり。◉東西分裂　隋の初め木杆の姪沙鉢略（シャバカ）可汗立ち、木杆の子阿波可汗と合はず、居を烏孫の故地千泉に移すや突厥遂に東西に分裂し、東突厥は金山より契丹に至るの地を領し、西突厥は金山より裏海に至るの地を領す。◉東突厥亡ぶ　唐は創業の際援を東突厥の始畢可汗に借りしを以て、建國以來贈遺甚だ厚かりしが始畢の弟頡利可汗に至り、始畢の子突利と隙を生じ、薛延陀、回紇は皆唐に降り、東突厥の勢大に衰ふ。太宗乃ち之を機とし、六三〇年李靖、李世勣等を遣り、薛延陀と挾撃して頡利を擒にせしめ其地を併せたり。

突厥の東西分裂

沙鉢略可汗

東突厥亡ぶ

頡利可汗

◉西突厥亡ぶ　西突厥は東ローマと通じ、ペルシアを破り、其勢盛なりしが、後内亂起りて大に衰ふ。沙鉢羅可汗に至りて國勢を恢復し、屢唐に寇す。高宗乃ち蘇定方を遣はして之を伐たしめ、沙鉢羅を擒にせり。

西突厥亡ぶ

沙鉢羅可汗

回紇

回紇は鐵勒の一部にして薛延陀と共に勢隆盛に赴き、部長菩薩の時、薛延陀の部長夷男と共に唐に降る。六四六年李世勣の東伐に遇ひ、鐵勒諸部潰散せしかば、回紇の部長吐迷度は遂に諸部を併せて唐に附く。突厥の亡ぶるや、其主懐仁可汗は悉く突厥の故地を併せ、安史の亂起るに及び之を救て功あり。後また屢唐を助けしを以て、唐より歳幣と公主とを得、漸く尊大にして往々入寇せり。後內亂ありて國勢衰へ、北隣なる黠戛斯（キルギス）に滅ぼさる。

回紇の興亡

吐谷渾と吐蕃

吐谷渾は鮮卑の支族にして青海附近にあり、頻に隴西に入寇したるが、唐の大宗の時、李靖に破られて降る。吐蕃は即ちチベットなり、初め吐谷渾に屬す、唐初勢漸く強く、吐谷渾、党項（タングート）の地を併せ、アサム、ネポールを征し、屢唐に寇せしかば、太宗之を伐ち破りて其降を納れ、公主を與へて和せり。是より吐蕃は唐の文物を模し、子弟を長安に留學せしめき。◉

吐蕃と唐との關係

高昌滅亡

尸羅阿逸多王

王玄策

南詔

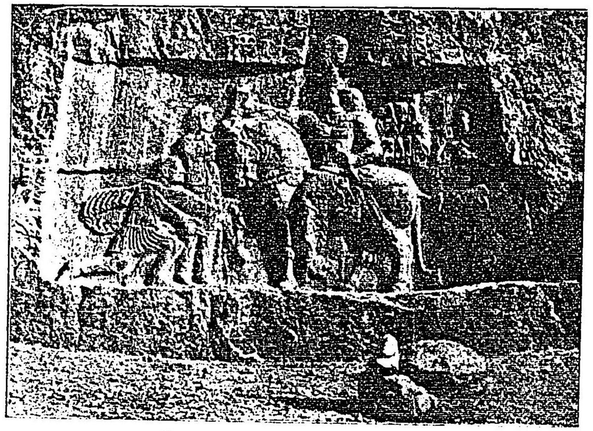
渤海の興亡

大祚榮

印度　隋唐の時印度にシラーデチア(尸羅阿逸多)王出でて中東西北の四印度に君臨し、大に文學佛教を興隆せしが、後其臣アルジウナ(阿羅順)に殺さる。時に唐は吐蕃を經て印度に通ぜしかば、太宗は王玄策をして印度に赴かしむ。王玄策乃ち吐蕃及ネパールの兵を發してアルジウナを討平せしが、尋て內亂起り、印度は遂にラージプト族の統一に歸せり。㊟南詔は印度支那族にして支那の西南方に居る、武后の時其王入朝し、玄宗の時雲南王に封ぜられしが、尋て離叛し、懿宗の時國を大理と改め、勢を唐末に振へり。

渤海　高勾麗滅亡の後遼東に渤海國起る。唐の初靺鞨に二大部あり、其粟末水(スンガリ江)の邊にあるを粟末靺鞨と云ふ。初め高勾麗に屬し、高勾麗の滅後其部人大祚榮自立して高勾麗靺鞨の衆を合せ、七一三年唐の玄宗に封ぜられて渤海郡王となる。是より國號を渤海と名づく。爾後益強大となり、我邦にも通交せしが、五代の世に勢衰へ、十四主二百二十餘年にして、遼の太祖に滅ぼされたり。

第十一圖



シアプルー世の彫像

ホスロー二世の浮彫

イスデゲルド三世慘死の圖

ササン朝

北波七

ムハメッド

大食（高麗三七）

大食衰ふ

波斯　二二四年ペルシア人アルタフシル安息を滅ぼしてササン朝を立つ。ホスロー一世の時國勢盛となり、突厥と結びローマと戰ひて版圖を擴む。孫ホスロー二世に至り、西突厥に困められ、ローマに破られ漸く衰運に向ふ。後イスヂゲルド三世立ち、大食人の東進を防ぐ能はず、援を唐に求めてイスヂゲルドの子ペルズ（卑路斯）唐に降り、ペルシア人の支那に來る者多し。

大食　大食は卽ちサラセンにしてムハメッドの創建せし國なり。ムハメッドは五七一年メッカに生る、後ユダヤ、キリスト二敎を參酌して新宗敎を創む、之をイスラム敎と云ふ。ムハメッド遂に此敎を弘めんとして、コーラン（聖書）貢賦、劍戟の三者を以てアラビア全土を統一せり。ムハメッドの繼嗣をハリファと云ふ。七五〇年カリフ卽ち援兵を送れり。然るにトルコ人共親軍に用ゐらるゝに及てハリファの權を殺ぎ、唐の末頃に至り大食大に衰へたり。

第三十二章　隋唐の貿易及宗教

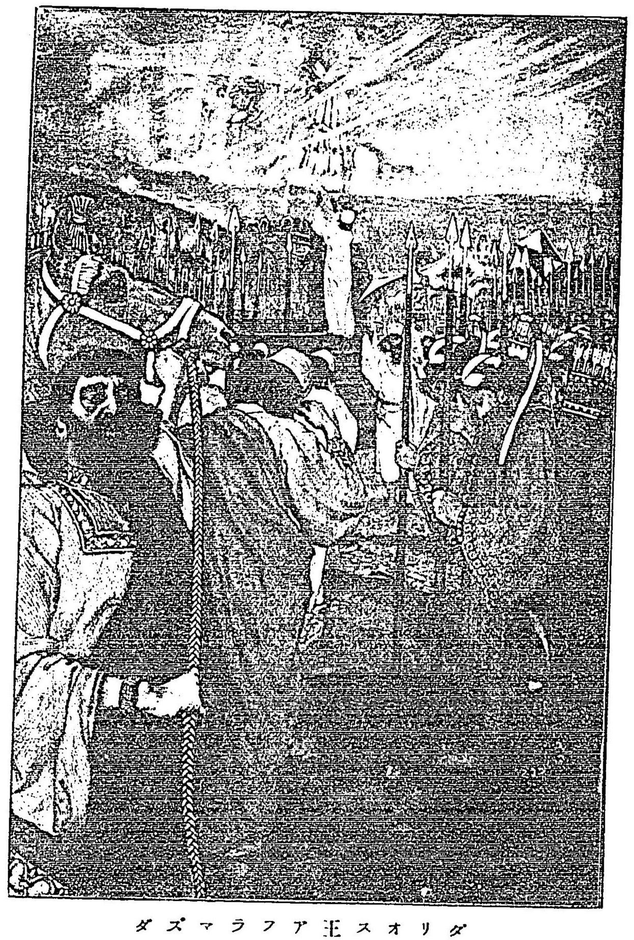
(一) 貿易
- 陸路　アンチオキア、ホラサン、中央アジア、天山南路
- 海路　瓜哇、スマトラ、セイロン、ペルシア灣、アデン

(二) 宗教
- 一、祆教(拜火教)——ゾロアストル
- 二、摩尼教——ペルシア、人マニ
- 三、景教——(ネストリウス——太宗の時オロペン來る、徳宗の時大秦景教流行中國碑建立)
- 四、回教——天山南路——回紇人中に行はる
- 五、道教——武宗國教とす
- 六、佛教——玄奘、義淨等印度に入り、名僧數多入唐

海陸貿易

魏晉の際ローマの商船は印度洋の航海權を專有せしが佛教東漸して錫蘭及南洋諸國と支那との間に通商開くるに從ひ、瓜哇(ジャワ)、蘇門答剌(スマトラ)を經て錫蘭に至る航路は遂に支那人の手に歸せり。◎隋唐時代◎　隋唐の初世に至り、支那の商船は更に其航路を擴張し、或は錫蘭より印度の西海岸に沿うてペルシア灣に入り、或はアラビアの海岸に沿うて紅海灣

第　十　二　圖



ダリオス王アフラマズダに犧牲を供ふる圖

錫蘭島

アラビア人

海關稅徵收

輸入物

ゾロアストル敎

拜火敎

其來歷

口アデンに至れり。◉錫蘭島は當時世界商業の中心となり、支那人、マライ人、ペルシア人、エチオピア人等四方の國民此に來集して交易に從事せり。◉アラビア人　アフリカ、西方アジア及印度の港灣は、多く其版圖に歸せしを以て、アラビア人は益、其海運を擴張して東に向ひ、南洋諸國を經て支那の沿岸に通商し、殆どアジアの全航海權を專有せり。◉海關稅徵收　唐は廣州(廣東)、泉州(福建)、杭州(浙江)等の諸港に提擧市舶なる官を置き、海關稅を徵收し以て歲入の大稅源となせり。◉輸入物　而して其輸入物は、象牙、香料、棉、胡椒、藥物等なりき。

祆敎(拜火敎)　祆敎は卽ちゾロアストル敎なり、太古バクトリアの人ゾロアストルの創唱に係る。其敎は陰陽二神を立て、陽神をば至善の主宰者、陰神をば至惡の主宰者となし、火を以て陽神を表して之を崇拜す、故にまた拜火敎と云ふ。◉來歷　夙にペルシアに行はれ、北朝の時旣に支那に入りしが、唐初に至てペルシアの大食に迫らるゝに及び、其敎徒は多く支那に竄入し、是より大に唐に流行するに至れり。

摩尼敎　第三世紀の初葉、ペルシア人マニと云ふ者、祆敎、佛敎及基督敎を

折衷して作れる一新宗派なり。此教もまた初め支那に入りしが主もに行はれたるは回紇なり。安史の亂に肅宗が回紇の兵を借るに及び、其教多少流行するに至り、諸州に摩尼寺起れり。

摩尼寺

景教　第五世紀の頃、東ローマの僧正ネストリウスの開きし基督教の一派なり。ネストリウス迫害を受けて西アジアに徙るに及び、教徒多く之に從ひ、ネストリウス宗と稱す。盛にペルシアに行はれ遂に中央アジアに弘まる。唐の太宗の世ペルシア人阿羅本(オロバン)其經典を齎らして長安に來るや、太宗之を尊信して爲めに波斯寺を建つ。尋で高宗、玄宗の尊信を得て其教は漸く上下に流布するに至れり。德宗の世に長安の太秦寺玄宗の末年波斯寺を改めて太秦寺と云ふ)の僧景淨(アダム)と云ふもの太秦景教流行中國碑を建つ。其碑久しく隱沒せしが、明末に至り發堀せられき。

ネストリウス派(景教)高昌(三八)

阿羅本

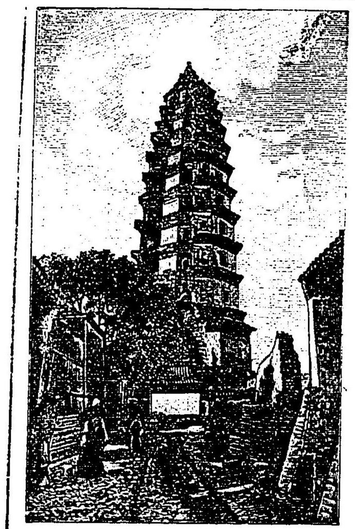
波斯寺

大秦景教流行中國碑

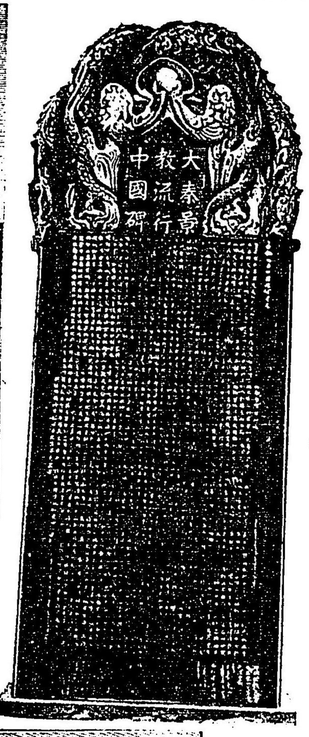
回教　ムハメッドの創めしイスラム教なり。後世回紇(ウィグール)人の崇拜する所となる。故に此名あり。大食國の勢を四方に張るに及び、漸く天山南路に入り、佛教に代りて大に流行せり。德宗の時大食人によりて支那の南方に傳へられ、廣東地方に會堂起りしが遂に盛に行はれざりき。

イスラム教

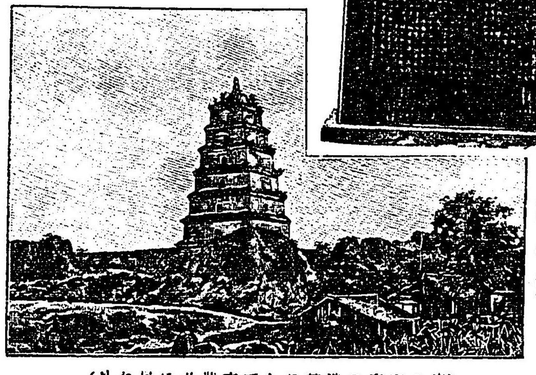
第三十三圖



開元寺の高塔
(唐の玄宗の造營)



景教の碑(陝西省西安府)



大慈恩寺の大雁
(西安府)

(唐の高宗の造營にして玄奘此に居れり)

以上の諸宗教は唐の中世に流行せしが、武宗位に即きて道教を信じ、自餘の諸宗教を嚴禁するに及び、概ね衰滅せり。

《道經（士官三五）》
唐朝道教を正教とす
老子道德經

道教 唐は國姓李にして老子と同姓なりしかば、道士等之に乘じ老子を以て唐の遠祖なりとす。是に於て高祖の時より頗る之を尊信して、遂に唐朝の正教として老子を廟祀せり。中宗は諸州に各一觀一所を治めしめ、玄宗に至り更に老子道德經を各戸に備へしめ、大に之を奬勵せり。武宗は痛く佛教を抑損し道教を以て唯一の國教となせり。

玄奘
《玄奘（高師三三）》
義淨
佛教の八宗

佛教 南北朝に至り益流行せしが、唐の太宗の時僧玄奘と云ふ者、天山南路より印度に入り、歷遊十七年を經て支那に還り、大に太宗、高宗の尊信を受け、盛に經典を譯す。是より佛教大に興隆するに至れり。尋て義淨また印度に赴き二十五年を經て還り、爾後印度の僧もまた來り、前代無比の盛を見るに至れり。◉八宗 當時行はれたる宗派には、三論、法相、律、華嚴、天台、眞言、禪、淨土等の八宗ありき。後武宗に至り道教の爲め佛教を禁じたるが、幾許もなくまた舊に復せり。

第二十三章　隋唐の文化

(一) 儒學 隋 劉焯 劉炫 王通
唐 孔穎達 顔師古 韓愈

(二) 文藝 韓愈 柳宗元 張籍 陸贄
詩 沈佺期 宋之問 王維 李白 杜甫 孟浩然 白居易
書 歐陽詢 虞世南 顔眞卿

(三) 美術 畫 呉道元 李思訓 王維

儒學

◉隋は天下を一統するに及て大に文學を奬勵して向北學派を採用し、大儒劉焯劉炫王通等出づ、而して劉焯の術も始めて此代に起る。◉唐の太宗學を好み孔穎達顔師古等の學者に命じ五經正義を撰せしめて經義を一定せり、是より學者正義の說を固守して敢て新說を出さず所謂◉訓詁註疏の弊に陷るに至る後韓愈出で、稍經學を振興せり。

文藝

唐初尙ほ六朝の餘弊を脫せず楊炯王勃駱賓王盧照隣の四傑最も駢體の文に長ぜり。◉韓愈字退之號昌黎、起りて荐に周漢の古文復興を

(韓愈(唐書三五))
柳宗元 唐代の詩人(唐書三七)
杜甫 李杜 白居易

唱へ駢麗の文を排す。◉柳宗元(字子厚)また古文を唱導して韓愈に亞せり是に於て駢麗纖弱なる文始めて衰ふ。是より文を論ずる者必ず韓柳を併稱す。其他李翺張籍陸贄等は皆古文を能くし杜牧は晩唐に出で詩文に巧なり。◉詩人◉唐の詩は文章より勝る。唐初に沈佺期宋之問王維陳子昂等あり、開元天寶の頃に至りて李白(字太白)杜甫(字子美)孟浩然等出で詩壇に空前絶後の隆運を開けり。憲宗の時白居易出でまた新生面を作る。韓愈また詩に妙なり、故に後世詩を論ずる者必ず李杜韓白を稱す。

史學

晩唐に杜牧あり盛唐の諸大家に伍するに足る。◉史學◉正史の撰述頗る多く、姚思廉の梁書陳書李百藥の北齊書令狐德棻等の周書魏徵等の隋書房喬等の晉書李延壽の南史及北史劉知幾の史通等の著あり。

美術

◉唐代は能書家の出でたること甚だ多く、歐陽詢虞世南褚遂良顔眞卿柳公權等尤も名あり。◉柏◉書の發達も頗る著く閻立本の人物吳道玄の佛畫李思訓王維の山水に長じたるが如きは其主なる者なり而して思訓を北宗派王維を南宗派の祖とす。◉音樂◉は雅樂俗樂共に玄宗の奬勵によりて流行し、我邦中古時代の音樂に大影響を及ぼしたり。

第三十四章　傳記及解說

智顗　潁川の僧なり初め律を學び後法華經を修め、業成りて國に歸る。陳の宣帝之を頂んじ、田地を賜ふ寺を造る三十六、經疏を著す百餘卷、僧を度すること一萬五千人なり。即ち天台宗の開祖なり。

裴矩　隋の文帝に仕へて吏部侍郎となる。突厥制御に對して屢〻謀を上る。煬帝の時西域の圖說三卷及地圖を上る。記する所四十四國悉く山河の要害を示す。隋西二萬里を過ぎ西域に三道あるを發見せり。

ムハメッド　五七一年アラビアのメッカに生る。初め羊を牧したるが、次て商業に從事して、シリアに往來す。後隱遁して思索に從事し、年四十イスラム教を唱ふ。即ち回教なり。メッカ人の迫害を受けてメヂナに逃れしが、後メッカを征服し、アラビアを一統し、更に東ローマ帝國を侵さんとし、病に罹りて六三二年メヂナに死す。

杜如晦　字は克明、唐の太宗の徵時より事へ、頗る知遇を被る。帝の位に即くや房玄齡と左右の僕射となる。如晦事を執る判決流るゝが如し、唐の賢

相を云ふもの必ず房杜を推す。

房玄齡　字は喬孫、學に精し、初め隋に事へじが唐起るに及び太宗に見へ、一見舊好の如し。是より如晦と共に帝の左右に侍し、諸政を統ぶ。玄齡能く謀り、如晦能く斷ず。

魏徵　字は玄成、少にして落魄せしが大志あり。初め唐の兩祖に事へて太子建成を助く。建成殺さるゝに及び、世民其罪を宥し擧げて諫議太夫となす。能く諫むるを以て名あり。

孔穎達　字は中達、博學宏識なり。隋の煬帝の時召されて洛陽に至り、諸學士と經義を討論す。穎達最も年少なりしが諸老儒能く及ぶ者なし。後唐の太宗に事へ祭酒に累遷し、歷經皆を御前に講ず。また詔を受けて五經正義を撰ぶ。

玄奘　姓は陳氏、唐の太宗の時佛經を求めんが爲め長安を發し、天山南路より印度に赴き、歷遊する所百二十餘國、年を經る十七年、印度に在りて佛書を研究し、經典五百六十七部を持ち歸りて飜譯に從事し、七十四部千三百三十八卷を成し、高宗の時寂す。

義淨 范陽の人幼にして僧となり法顯玄奘の事跡を慕ひ靈地巡拜を志し路を南海に取り印度に入りて二十五年間を費し三十餘國を歴遊し經典四百部を持ち歸れり其譯する所五十六部二百六十卷あり。

狄仁傑 (狄仁傑高卽三〇) 字は懷英性剛直好みて諫爭す夏師德の推薦によりて則天武后の親任を受け相位に上る能く名士を推薦し面折辭せず七〇〇年死す。

李白 字は青蓮蜀の人なり幼にして詩書に通じ擊劍を好み任俠を事とす。性酒を好み詩は多く酣酔中に成る玄宗に仕事せしが棄放なる性行は宮官后妃の忌む所となり去りて四方に遨遊し詩酒を樂しみ年六十二にして死す其詩高妙飄逸後世及ぶものなし。

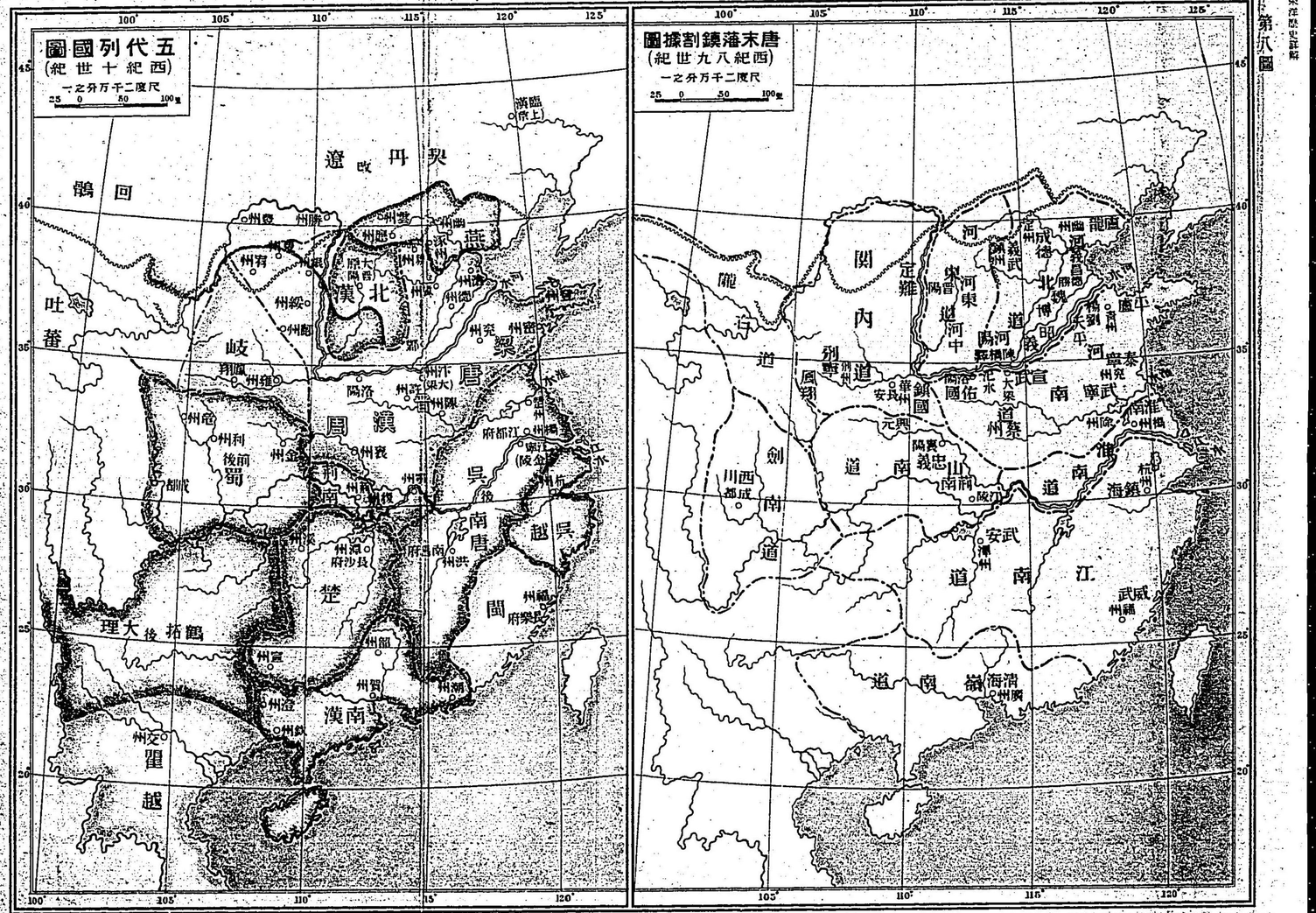
杜甫 (杜甫(高卽三七)) 字は子美襄陽の人なり開元の末進士の試驗を受け及第せず後賦三篇を獻ず玄宗之を奇とし制を集賢院に待たしむ時に京師亂れて志を得ず官を棄てゝ秦州に客たり貧困甚しく薪を負ひ橡栗を拾ひて自ら食めり後江南の各地を漫遊し洞庭湖上に客死す其詩悲壯沈鬱李白と並び稱せらる。

李林甫 號は歌奴張九齡に繼ぎて相たり性柔佞にして深く宮官妃嬪に結び玄宗の意を迎合して寵を固うす時人評して曰く口に蜜あり腹に劍ありと相たること十九年實に國亂を養成せり。

顏眞卿 字は清臣平原の太守たり安祿山反し諸州縣風を望んで瓦解せる時首として兵を起し賊を討ず四方勤王の兵起る皆其力なり屢功を立て累進して太子太師に至る德宗の時叛將李希烈の營に赴き拘へられて遂に縊殺せらる其容貌力遒勁大に世に尙ばる。

顏杲卿 字は昕與顏眞卿の從兄にして常山の太守たり安祿山の叛に義兵を起す賊將史思明迫るに及び援盡き矢竭き城陷りて執はる祿山已に反くを責む杲卿曰く我國の爲めに賊を討ず汝を斬らざるを遺憾とす何をか反と云ふ噪羯狗速に我を殺せと遂に殺さる。

張巡、許遠 張巡は眞源の令なり安祿山の反に屢賊を破り許遠と共に睢陽城を守る賊之を圍むに及び城中食盡き茶紙を喫し馬を食ひ鼠を堀り雀を捕へて食ふ皆盡く姜を殺して以て食ふ四萬の兵僅かに四百を餘すのみ。されど城を棄てず將士また病んで戰ふ能はず張巡西に向ひ再拜して曰く臣力盡きて城を全うする能はず死して鬼となり賊を殺すべしと



三人共に執へられて殺さる。

陸贄 字は敬輿、德宗に事へ翰林學士となる。朱泚反じて帝出奔せる時帝をして國人に謝罪せしめて亂を治めしむ。後同平章事となり裴延齡の讒を論じて貶せらる。

（舊書一三五）

韓愈 字は退之、南陽の人、六經百家に通ず。德宗の時進士に及第し員外郎となり累進して刑部侍郎となる。憲誠を上りしが、論佛骨表を上つるに及て帝の怒りに觸れ潮州の刺史に貶せらる。後赦されて吏部侍郎となり穆宗の時死す。文公と諡せらる。宏才卓識、孟子以後の大賢と稱せらる。其文雄渾奔放、並び庶以後の第一人たり。

（舊書一六〇）

白居易 字は樂天、香山と號す。大原の人、德宗の時進士に及第し、憲宗の時諫疏して宰相に忌まれ、江州の司馬に貶せらる。後三帝に歷事し、屢〻諫めて吐せらる。居易詩文に長ず。其作琵琶行長恨歌は世人の嘖誦する所なり。

（舊書一六六）

元稹 字子儀 鄂州の人なり。武を以て舉げらる。安祿山の反するや朔方節度使となり本軍を率ゐて河北節度使李光弼と攻征して大に賊軍を破る。玄宗蜀に至り肅宗靈武に位に卽くや子儀回紇の兵を借り共に長安、洛陽を復

（舊書一二〇）

す。代國公に封ぜられ邑千戸を食む。七五八年安慶緒を伐ちてまた之を破る。七八二年校中書令、太子少保を以て死す。年八十五。太子大傅を贈り、謚を忠武と曰ふ。

唐の五經　詩は毛詩書は古文尚書易は費氏易禮は禮記、春秋は左氏傳にして漢とは異れり。（漢代解說を參考せよ）。

三傳　左傳公羊傳穀梁傳を云ふ。

三禮　禮記儀禮周禮を云ふ。

九經　毛詩尚書周易の三經に三禮三傳を加へたるもの。

十三經　九經及論語孝經孟子爾雅を云ふ。

第四期　五代及宋時代（九〇七―一二七六）

唐―後梁十六年　後唐十三年　後晉十一年　後漢四年　後周九年　北宋百十年　南宋百五十年
二代　四代　二代　二代　三代　九代　九代　元

第三十五章　五代の興亡

(一) 梁、太祖朱全忠
　　次子友珪
　　三子友貞

(二) 唐（克用）—李存勗（莊宗）
　　王族李嗣源（明宗）—閔帝
　　明宗の養子李從珂

(三) 晋、高祖石敬瑭—契丹（遼）
　　從子出帝　太祖耶律阿保機
　　子太宗

(四) 漢、高祖劉知遠
　　子、隱帝—隱帝の叔父劉崇

(五) 周、太祖郭威……
　　子世宗（二、南唐を伐つ
　　三、遼を征す
　　姪恭帝

宋、太祖趙匡胤

五代　唐の滅亡より宋の興起に至るまで、其間僅かに五十四年に過ぎずと雖も、代を易ふること五、帝位にある者十三君に及べり。故に史に此間を五代と稱す。梁、唐、晋、漢、周是なり。而して群雄の方隅に割據する者前後十二國に達して紛亂止むなく、文化地に墜ちたり。

後梁　太祖初め朱溫と云ふ。黃巢に從て盜をなし、遂に唐に降り、名を全忠と賜はる。後勢力を得て帝位を奪へり。◉李克用と戰ふ　李克用黃巢を平ぐるの功を以て晋王に封ぜられ後屢梁と戰ふ。克用死し子存勗立ち、兵を用ふる父に讓らず、遂に北方の盟主となり、兵を將ゐて梁軍を破り、其勞益〻振ふ。◉國勢傾く　帝淫虐にして假子友文の妻を愛し友文を立て嗣とせんとせしかば、次子友珪帝を殺して自立す。第三子友貞（均王）兵を起して友珪を誅し遂に位に卽く。之を末帝と云ふ。◉滅亡　末帝位に卽きて

五代の由來
（五代の初年を略記せよ）（京門三五）

後梁と李克用との關係

後梁亡ぶ

梁の國勢益〻衰へ、將士晉に降る者あり。時に李存勗燕を滅ぼし、悉く北方の地を併せ、傅國の璽を得て帝位に卽く、後唐の莊宗是なり。莊宗兵を發して梁を討つ、梁將王彥章勇武にして能く之を拒ぎしが遂に殺され、大梁陷り、て末帝殺さる、梁は二世十七年にして亡ぶ、時に九二三年なり。

後店の莊宗
鄴都の變
明宗
後蜀荊南の建國
後唐の滅亡

後唐　莊宗既に梁を滅ぼして洛陽に都し、また皇子繼笈をして蜀を滅ぼさしめ、吳楚吳越の朝貢を受け、天下略〻定まるに及て奢侈に耽り、小人を親昵せしかば上下離反するもの多く、國政大に紊る。◉鄴都の變　是に於て士卒怨望して鄴都に反し、王族李嗣源を奉じて大梁に據る、莊宗之を征せんとして途に反者の手に斃れ、嗣源帝位に卽く、明宗是なり。◉後蜀荊南の建國　時に西川節度使孟知祥此內亂に乘じ四川の地を略し成都に據り、後蜀王と稱す、尋て荊南節度使高季興もまた南平王となれり。◉後唐の滅亡　明宗死し、子閔帝嗣ぎしが、明宗の養子李從珂反して洛陽を陷れ、帝位に卽く、時に石敬瑭河東を領して威名あり、從珂もと之と隙ありければ、兵を遣はして晉陽を圍みしが、敬瑭は契丹(キタイ)の太宗の後援を得て大に後唐の兵を破り、大梁に入りて、帝位を踐び後晉の高祖是なり、唐は四主十四年にして亡ぶ。時に九三六年なり。

後晉の高祖
後晉と契丹との關係
後晉亡ぶ
契丹の起原
耶律阿保機
契丹國號を大遼と改む

後晉　高祖の天下を得たるは契丹の力多きに居る、故に其報として山西、直隸兩省の地十六州を割き、歲に金帛三十萬を贈り、且つ臣屬の禮を執れり。◉出帝と契丹　高祖死し、姪出帝立つに及び、契丹に對して禮を執らざりしかば、契丹の太宗大に怒りて後晉に寇すること前後三回、九四六年遂に大梁を陷れて出帝を生擒す、晉は二主十一年にして亡ぶ。

契丹　契丹は東胡の裔にして南北朝の頃より潢河(シラムレン)附近に據り、後魏の頃より勢漸く盛なりき、其國もと八部に分れしが、後梁の時契丹に耶律(エリツ)阿保機(アボキ)起り、遂に八部を征服し、九一六年帝位に卽きて都を臨潢(潢河の北)に定む、契丹の太祖是なり、太祖は北室韋、女眞の諸部を服し、西吐谷渾(タングート)党項を降し、東渤海を滅ぼし、新羅の朝貢を受け、勢頗る强盛となれり、太祖死して子太宗嗣ぐや、後晉の高祖を助けて後唐を滅ぼし、後また後晉を降し、國號を大遼と改めて中國に君臨せんとしたるが、其兵四出剽掠せしを以て、諸民皆怒り、盜賊所在に起る、太宗遂に守兵を留めて北に還りしが、病て途に死し、姪世宗位を繼ぐ。

後漢の高祖

後漢　後晋の將劉知遠叛きに太原を守りしが、遼の太宗の北に歸るに及び、遼の守兵を攘うて大梁に卽位す。後漢の高祖是なり。◉滅亡　高祖死して子隱帝繼ぎ、多く宿將を忌みことを恐れ、部下を率ゐて反し、大梁に入り衆に推されて帝位に卽く。之を後周の太祖とす。漢は二世四年にして亡ぶ。時に九五〇年なり。

後漢亡ぶ

後周の太祖北漢國

後周　時に隱帝の叔父劉崇太原を守りしが、是に至りて河東に北漢國を建てて、援を遼に乞ひ、また南唐、後蜀に通じて、頻に恢復を圖る。後周の太祖死し、世宗新に立つや、劉宗之を機とし遼と兵を合せて後周を侵す。◉高平の戰　世宗逆擊して大に之を高平に破る。◉世宗の英略　世宗大志あり、天下を一統せんと欲し、先づ士卒を淘汰し、天下の佛像を銷して兵備を擴張し、西に向うて後蜀を略し、また地を南に開かんことを圖る。◉南唐を伐つ　世宗は王朴の策を用ゐ、自ら兵に將として南唐を伐ち、盡く江北の地を得て還る。◉遼を征す　是より更に遼を征して其諸州を降し、盡く關南を平げ、進んで幽州に赴かんとして病に罹り、大梁に歸りて死す。◉滅亡　子恭帝年僅かに七歲、九六〇年軍士等乃ち宿將趙匡胤の夙に威望あるを以て擁立して、位に卽かしむ、宋の太祖是なり。周は三世十年にして亡ぶ。

後周の世宗の英略

世宗の南唐征伐

世宗遼を征す

後周亡ぶ

十國五代

十國　朱全忠既に唐を簒うて梁を建つるに當り、藩鎭の各地に割據する者多く、就中左の諸國最も勢あり。史に之を十國と稱す。

國名	始祖	都城	領域	代數	年數
前蜀	王建	成都	四川漢中四十九州	二	二三
荊南	高季興	江陵	湖北三州	五	五八
後蜀	孟知祥	成都	四川漢中四十六州	二	四一
楚	馬殷	潭州	湖南桂管二十二州	六	五五
吳	楊行密	揚州	江淮以南二十八州	四	四九
吳越	錢鏐	杭州	兩浙十二州	七	八四
閩	王審知	福州	閩中五州	六	四九
南漢	劉隱	廣州	嶺北三十三州	五	七〇
北漢	劉崇	晉陽	山西十州	四	三一
南唐	李昇	金陵	江南二十一州	二	三六

此他燕、岐の二國あれども一代にして亡びたれば數へず、晋あれども後唐となりたれば省き、楚と江南とあれども同所なれば、一國と見做せるなり。

五代の帝系

- 梁● 太祖[1]—末帝[2]
- 唐● 莊宗[1]—明宗[2]—閔帝[3]
  - 廢帝從珂[4]
- 晋● 高祖[1]
  - 高祖の兄 石敬瑭
  - 出帝[2]
- 漢● 高祖[1]—隱帝[2]
- 周● 太祖[1]—世宗[2]—恭帝[3]

第三十六章　宋遼夏三國の對立

一、節度使を抑ゆ

二、通判

三、轉運使

四、兵制

五、刑税を寛にし、貿榮を奬む

(一) 宋太祖

- 内治
  - 二、通判
  - 三、轉運使
  - 四、兵制
  - 五、刑税を寛にし、貿榮を奬む
- 外征
  - 一、湖南
  - 二、荆南
  - 三、後蜀
  - 四、南漢
  - 五、南唐
  - 六、吳越
  - 七、北漢

(二)

- 太宗　遼景宗
- 眞宗→聖宗(母蕭氏專政)
- 澶州の役　其婿和條約
- 西夏(李元昊)大夏皇帝

(三) 仁宗—朋黨論(范仲淹、歐陽修、富弼、韓琦、曾公亮等 呂夷簡、夏竦等)

宋の太祖

宋太祖の内治

唐末以來藩鎮宿衛の權重く、遂に國家の大患をなしたりければ、太祖は宰相趙普と議し、其弊を除かんが爲めに左の政策を實行せり。

超普

(1) 宿將功臣に諭して節度使の權漸く弱し。

節度使の權を殺ぐ

(2) 節度使の配下たりし州郡は、更めて朝廷に隷せしめ、朝廷より特に文臣を派出して通判となし、軍民の政を治め、諸事朝廷にて專制せしむ。是に於て武臣漸く權を失ふ。

通判

武臣漸く權を失ふ

(3) 轉運使を新に各地方に任命し、其地方の租稅金穀を管理せしむ。是より節度使は全く財政の權を失ふ。

轉運使

節度使財政の權を失ふ

(4) 天下驍勇の士を精撰し、且つ其兵數を增して禁旅に補し、之を出して邊城を守らしめ、常に相交代して艱苦に習はしめたり。是に於て內外輕重相均く、兵士の跋扈もまた漸く止む。

兵士の跋扈漸く止む

太祖の仁政

帝また意を刑律に用ゐて多く寬恤を主とし、五代藩鎮の苛政に懲りて商征を寬にし、農商業を盛にし、工藝を奬勵し、大に民力休養の策を講ぜり。故に宋に至りて制度典章再び整然として備はり、學術技藝彬々として興るに至れり。

宋太祖の外征

かくて內治漸く整へりと雖も、獨立を稱して未だ宋の正朔を奉ぜざる國多かりければ、太祖は逐次兵を出して之を削平せり。

(1) 湖南●　內亂あり、太祖乃ち兼容延釗をして之を滅ぼさしむ(九六二年)。

(2) 荊南●　延釗は南唐征伐の途次襲うて之を降す(九六三年)。

(3) 後蜀●　大に恐れ北漢と宋を挾撃せんとす、王全斌襲うて之を降す(九六五年)。

(4) 南漢●　其主劉鋹屢、宋の境を侵す、宋將潘美討て之を滅ぼす(九七〇年)。

(5) 南唐●　南方の强國なり、宋將曹彬、吳越と兵を合して之を降す(九七五年)。

(6) 吳越●　王錢俶恐れて來朝し、南方全く平定す(九七八年)。

(7) 北漢●　遼の後援あり、尙ほ未だ降らず。

太宗の統一

太祖死し弟太宗立ち、太祖の志を繼ぎ北漢を討て其主劉繼

湖南
荊南
後蜀

南漢
南唐
吳越
北漢

太宗支那を一統す

元を降し、九七九年支那を一統せり。

丁部領

交趾の入貢　交趾は五代の時呉權之を統一して位を子孫に傳へしが、初呉氏衰へ、群雄亂をなせしかば、丁部領と云ふもの代て王となり、子丁璉に至り、宋に入貢して交趾郡王に封ぜらる。太宗の時に至り黎桓と云ふもの丁氏を排して王となり好を宋に通ぜり。

交趾好を宋に通ず

宋遼の衝突　初め宋遼互に好を通じたりしが、太宗の北漢を攻むるに及び和好遂に中絶す。太宗北漢を滅ぼすに及び、勝に乘じて幽薊の地を取らんと欲し、幽州を圍むや、遼の景宗其將耶律休哥を遣りて大に宋軍を高梁河（北京の西）に破り、爾後頻に來寇し、太宗もまた屢兵を出せしが常に利あらざりき。◎遼の聖宗　偶、景宗死し、子聖宗嗣ぎ年甫めて十二、母蕭氏政を攝す。太宗之を機とし、曹彬、潘美に命じ大軍を率ゐて之を伐たしむ。耶律休哥逆擊して大に之を岐溝關（直隸順天）に破る。是に於て高麗、女眞の二國共に遼に降れり。◎澶州の役　太宗死し眞宗嗣ぐに及び、遼の聖宗また西党項を破り、大擧して宋を侵す。宋の宰相寇準固く親征の議を執り眞宗遂に北伐して澶州（直隸大名府開州）に至り遼軍を却く。尋て講和の議起り、一〇

宋遼高梁河の戰

岐溝關の戰

澶州の役（一〇〇四）

澶淵の盟

○四年遂に和を結べり。◎其講和條約は

(1)。宋を兄とし遼を弟とす。

(2)。宋は毎歳銀十萬兩、絹廿萬匹を遼に贈る。

遼の版圖

遼の極盛　聖宗の世は遼の極盛時代にして、其領土は東日本海に至り、西天山に接し、南支那本部の北部を占め、北外蒙古のゲルルン河に及び、高麗、吐蕃、吐谷渾、黠戛斯（キルギス）以下六十國の朝貢を受くるに至れり。

四夏の恒拓拔思恭

西夏の興起　西夏は党項（タングート）族より出づ、其祖拓拔思恭唐末黄巢の亂を平ぐるに力あり、夏州に封ぜられ、唐の國姓を受け獨立の政を布く。◎其歷代宋の太宗の時李繼捧始めて入朝す、族弟李繼遷遂に降て夏王に封ぜられ、子德明に至り宋遼に臣附せり。◎李元昊（德明の子元昊雄器あり、文字を製し、學校を建て、制度を設けて大に國政を改革し、回紇を擊ちて河西を取り、都を興慶（甘肅寧夏府）に奠め、一〇三八年遂に大夏皇帝と號す。雄兵五十萬あり歷、宋の西邊に寇せり。時に宋は眞宗の子仁宗位にあり、韓琦、范仲淹をして之を拒がしむ。◎遼の要求　時に遼は聖宗に繼ぎて興宗位にあり、宋の西夏に苦めらるゝに乘じ、南下の勢を示し、後周の世宗が略せし故地

北歷代

李元昊大夏皇帝と稱す

遼の宋に對する要求

を得んとす。宋は富弼を遣はし、反覆辨難其地を與ふるを拒絶し、唯絹十萬匹、銀十萬兩を増すことを約して好を復す。◎西夏と宋との和遼既に宋と和し、更に宋と西夏とに說きて兵を罷めしめ、一〇四三年左の條約を結びて和す。

(1)● 宋は西夏に銀帛茶二十五萬を贈り、

(2)● 西夏は宋より封冊を受け臣下の禮を執ること。

仁宗の治

《前篇《第三〇》》

西夏と宋との和

宋朝第一の人君

名士朝に滿つ

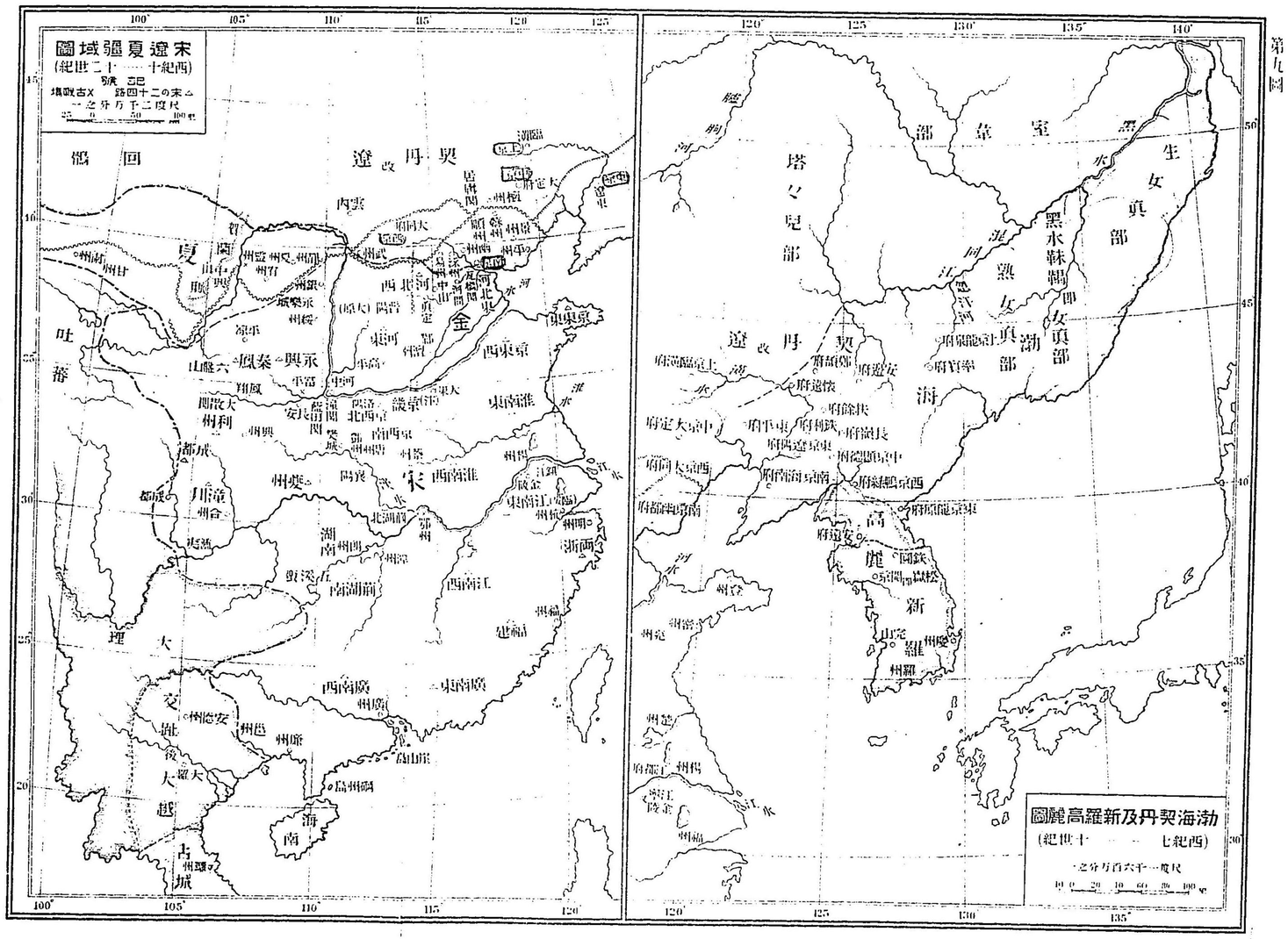
歷代の蘇臨

異宗に嗣ぎて仁宗立つ、恭儉にして民を愛し賢人を登庸し、學術を奬勵し、宋朝第一の人君として漢の文帝と併稱せらる。加之韓琦、范仲淹をはじめ、富弼、歐陽修、司馬光、胡瑗、周敦頤、邵雍、張載、程顥、程頤等の名士朝に滿ち、人才の盛なること古今に比なかりき。然れども政論大に起り、呂夷簡、張子厚の宰相を辭せしより、帝の終りに至るまで、其間二十年執政の交迭すること、凡十六回なりき。◎慶曆の黨議　慶曆は仁宗の朝の年號なり、黨議は卽ち朋黨の軋轢を云ふ。

(一)● 仁宗事により皇后郭氏を廢す。宰相呂夷簡之を贊す。

范仲淹、歐陽修、富弼等之に反對す。夷簡之を外に貶す。

第九圖



防路窓、出づ

(二)　又樞密使たり、歐陽修等の言に依り罷められ、杜衍之に代る。嫌乃ち杜衍等を黨人と稱す。

杜衍、歐陽修、王素、蔡襄等反對し、歐陽修朋黨の論を作りて辨駁す。是の如くして范仲淹參知政事となり、富弼樞密副使となる。帝乃ち仲淹、弼と日夜治を圖る、而も謗議愈、盛に出でて皆罷めらる。尋て富弼、文彥博相となり、彥博に次て韓琦曾公亮之に任じ、歐陽修參知政事となり、三人同心政を輔け、朝廷暫く治を致せり。

第三十七章　王安石の新法

(一)　失敗

一、太宗―交趾征討
二、真宗―遼征討
三、仁宗―西夏征討
四、神宗―王安石新法

一、青苗法
二、募役法

(二) 王安石新法
- 一、富國
- 二、強兵
- 三、市易法
- 四、均輸法
- 五、保甲法
- 六、保馬法
- 七、方田均稅法
- 八、撰擧法
- 三、其他

一、河湟の役(吐蕃)
二、苗蠻
(三) 外征の失敗
三、安南
四、遼
五、西夏

第一變　哲宗—高太后攝政—司馬光…舊(元祐更化)
第二變　哲宗—親政—章惇、蔡京…新(紹聖の紹述)
(四) 新法賛否
第三變　徽宗—向太后臨朝—韓琦韓忠彦…舊
第四變　徽宗—親政—蔡京專權…新

神宗　財政の困難

(王安石の新法の影響及主なる條目を記せ(海兵二三))
(王安石の新法(高師三五)(高門三六))
(青苗法(高商三六))
(王安石(士官三八)(高商三〇))
(王安石の新法幷に成蹟を記せ(士官三一))
(王安石均輸(高師三一))

神宗の雄圖

宋は國初以來外征に屈辱を重ね、太宗先づ交趾と遂とに失敗し、眞宗次て遼に失敗し、仁宗も亦西夏に失敗せり。仁宗より二傳して神宗に至り雄心あり、四夷を征して此屈辱を雪がんとせしが、當時(一)年々遼及西夏に多額の歲幣を贈りしと(二)建國以來功臣を優待して遇りに其子孫に官爵を授けしとに依り、◉財政非常の困難を極めしかば、神宗は王安石を任用し其所信を實行して、富國強兵の道を講ぜしむ。

王安石の新法

王安石は臨川の人なり、初め仁宗の朝知制誥となる。慨然として世を矯め俗を變じ法度を改めんとの志あり。是に至て用ゐられて參知政事となり、呂惠卿と謀りて新法を行へり。かくて

(一) 富國の目的を達せんが爲めに左の四法を行ふ。

(1) 青苗法　毎春朝廷より資金を百姓に貸し時二分の利子を添へて之を還納せしむ。

(2) 募役法　人戸の等級により相當の免役錢を出さしめ、從來の義務を解き、朝廷より別に無職の民を募りて役に充つ。

(3) 市易法　京師に市易務と云ふ官省を置き、市場に物品を購求

青苗法
募役法
市易法

し若しくは官物と交換し、また商人に資金を貸與して一定の利子を收めしむ。

均輸法

(4) 均輸法　各地の有無を制し、轉輸を便にす。

保甲法

(二) 強兵の目的を達せんが爲めに左の二法を行ふ。

保馬法

(5) 保甲法　十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副二人を置き、部下の保丁をして各弓箭を貯へ、武技を講習せしむ。

(6) 保馬法　保丁の馬を養はんとする者に官の馬を貸し、若しくは其價を給し、毎年其肥瘠を檢し、五等に分ちて賠償せしむ。

(三) 其他種々の便宜を圖りて左の二法を行ふ。

方田均稅法

(7) 方田均稅法　東西南北各一千步を一方となし、其肥瘠を檢して五等に分ち、稅率を定めたり。

(8) 撰舉法　從來進士明經等の科ありて詩賦論策帖經を試みしが、或は浮華に流れ、或は記誦に陷るを以て、安石自ら三經新義を頒ち是に由りて擧人の經義を試みたり。

撰舉法

新法の反對　是等の新法は素より悪く排斥すべきものにあらざりしが、

新法の弊害
宋に於ける朋黨の弊を述べよ（高南三四）
（宋朝の名臣）（東英三四）

帝及王安石が時勢を顧みず施行に急なるより、姦吏跋扈して弊害百出し、州縣其煩に堪へず。殊に青苗法の如きは全く國庫充實を目的としせしかば、人民大に喜ばず、反對の議論囂然として起り、司馬光、韓琦、呂公著、程顥、程頤、蘇軾、蘇轍等の名士は皆之を排斥せり。安石剛愎にして益、固執し、遂に邇卒を京師に聚け、言論を束縛し、苟も新法に反對する者は盡く排斥し、韓絳、呂惠卿等と共に新法を斷行せり。

安石反對者を排斥す

外征の失敗　王安石相たること前後二回にして、意の如く新法を行ふを得しと雖も、內は法令繁雜にして民其堵に安ぜず、外は四方に事を起して屢〻失敗せり。卽ち

河湟の役
苗蠻征服
安南遠征
遼との交涉
西夏との關係

(1) 河湟の役　吐蕃の一部を略せしが、兵士死亡多く屢〻吐蕃の入寇を來せり。

(2) 苗蠻　江南、江北、瀘州、渝州の苗蠻を降す。

(3) 安南　郭逵等を遣はして李氏を擊ち之に勝ちしが、宋軍死者半に過ぐ。

(4) 遼　北邊に戍壘を增して遼の境を侵したるを以て、遼の道宗（興宗の子）に責められ、七百里の地を失ふ。

(5) 西夏　を伐ち先づ靈州に戰て敗れ、また永樂に大敗す。

神宗在位十八年、勤倹にして政務に心を勞したれども、誤て王安石を用ゐて一事も意の如くなる能はずして死す。子哲宗嗣ぐ。

政局の第一變

元祐の更化
女中の幕拜
（司馬光の卒歿）
（一〇八三）

政局の變轉

哲宗立ちて尚ほ幼なり、太皇太后高氏朝に臨んで政を聽く。

◉第一變　太后新法の弊を察し、蔡確、呂惠卿の徒を黜け、司馬光、呂公著等を擧げて悉く新法を止めたり、之を元祐の更化といひ、后を稱して女中の堯舜と云へり、元祐は哲宗の年號なり、后の朝に在るや、遂夏も手を斂めて敢て冦せず、然るに司馬光死し、太后また死して哲宗政を親らするに及び、黨議再び朝廷に起り、朝臣等また洛（程頤）、蜀（蘇軾）、朔（劉摯等）の三黨を樹てゝ相爭ふに至れり。

紹聖の紹述
政局の第三變

◉第二變　哲宗親政するに及び、章惇、蔡京、蔡卞及呂惠卿等を任用し、先帝の諸政を紹述するの意を以て、年號を紹聖と改め、新法を復舊し、盡く元祐の諸臣を遠竄若しくは追貶せり、之を紹聖の紹述と云ふ。

政局の第二變

洛蜀朔三黨の爭
（一〇九三―一二五）

◉第三變　哲宗死して徽宗立ち年尚ほ幼なり、皇后向氏政を執り舊法を好む、即ち范純仁等の官を復し、司馬光等の官を追復し、章惇等を罷めて、韓琦、韓忠彦及曾布等を用ゐ、建中靖國と改元す。

政局の第四變

◉第四變　大后死し徽宗親政するに及び、曾布は韓忠彦と隙を生じて漸く元祐の諸臣を排し、再び司馬光等の官を追奪せり、蔡京用ゐらるゝに及び、忠彦、布相尋ぎて罷め、京遂に相となり、紹述の說に託して天子を箝制し、司馬光以下元祐の諸臣百二十人を姦黨とし、黨人の碑を端禮門外に立て、其子弟の入京を禁じ、王安石を尊んで孔子に配享するに至れり。

蔡京

蔡京の暴政

蔡京政を執ること前後二十年、威福を恣にし官制を更革し、子弟親族を引きて朝に列し、權勢朝に震ふ。此時宋朝承平日久く府庫盈溢す。蔡京益〻財利の道を講じ、帝に勸めて奢侈を窮極し、また盛に土木を興し珍奇を致す。帝もまた道教を信じ、宮を建て道士二萬人を宮中に養ふ。是に於て朝政は紊亂し、國民は怨望し、金兵の跳梁また益〻甚しく、終に南渡の源を開き宋朝の滅亡を來すに至れり。

朝政の紊亂

宋朝滅亡の遠因

第三十八章　金遼の興廢　高麗の盛衰

（生女眞（金太祖河骨打出づ）

金の起原

(一) 靺鞨 { 黒水……(熟女眞)
　　粟末……渤海 → 契丹(遼)

(二) 金太祖 ← 宋徽宗
　　遼主天祚帝 ← 天錫帝
　　妃蕭氏執政　西夏 → 黨項
　　王族耶律大石(西遼徳宗)

(三) 新羅 { 一、新羅
　　二、後百濟 — 甄萱
　　三、高麗 — 王建

金國の勃興

金は初め女眞と稱す、其地契丹の東に鄰し、黒龍江の上に在りて、南は高麗に接し、東は日本海に至る。

周……後漢……後魏……隋唐……五代……宋の朝に
蕭慎 — 挹婁 — 勿吉 — 靺鞨 — 女眞 — 金と稱す

阿骨打（西紀一一一五―一一二三）生女眞……阿骨打

宋金二國の國都及び北分領せし區域を問ふ（高師二一）

金宋同盟條件

女眞はもと黒水靺鞨と稱す、粟末靺鞨の渤海を逐つるに當り、之に役屬せしが、其後契丹の渤海を滅ぼすに及び、混同江の南西に居る者は、之を契丹に入れて熟女眞と稱し、東に居る者は唯臣屬するのみにて生女眞と云へり。◉阿骨打出づ　宋の仁宗の頃生女眞の一部なる完顏部に烏古廼と云ふ者あり、遼の女眞節度使となる。其孫阿骨打雄略あり、遼の天祚帝が政を失ふに乘じ、之に背きて混同江附近を略し、一一一五年皇帝と稱して國を大金と號す。金の太祖即ち是なり。太祖數、遼を破りて其諸州を取り、勢漸く強大に赴く。

金宋の同盟

宋の徽宗は盍ぞの議を用ゐて金と同盟し、遼を挾撃せん事を謀る。其同盟條約左の如し。

(1) 金は北より遼の中京を取ると同時に、宋は南より遼の南京を取りて、挾撃すべし。

(2) 成功の日は後晋の時契丹に與へし支那本部の燕雲等十七州を宋に歸し、自餘の遼の地は悉く金の有とすべし。

(3) 宋は從來遼に與へし歲幣を金に贈るべし。

天錫帝

宋軍の不利

宋の失敗

遼の末路

遼の滅亡

遼の帝系

遼の滅亡

金の太祖乃ち兵を進めて遼の上京に克ちまた進みて中京を攻め遼主天祚帝を逐うて西京を取る。◉天錫帝　時に遼の耶律淳燕京を守りしが之を聞きて帝位に即き天錫帝と號し軍事を耶律大石に委ねしが幾許もなく淳死し其妃蕭氏國事を掌る。◉宋軍破る　宋もまた約に從て盧貫、蔡收等を遣し遼の南京を攻めしが耶律大石に破られて進む能はず、遂に金の援を請ふ。◉遼の末路　金の太祖乃ち居庸關より入りて南京を下し、金帛富民等を悉く金の地に徙したり。◉宋の失敗　金は宋の出軍の期を失し且つ南京を下す能はざるを口實とし、宋の歳幣の外錢百萬緡、粳二十萬石を增さしめ、土地は僅かに南京及其附近の六州を與ふるに過ぎざりき。

遼の帝系

太祖[1]―太宗[2]―穆宗
　　　　―東丹王―世宗[3]―景宗[5]―聖宗[6]―興宗[7]
　　―道宗[8]―天祚帝[9]

遼の滅亡

遼の末路

宋の失敗

天錫帝

遼の興起

遼の亡ぶるや王族耶律大石餘衆を率ゐて西走し哈剌魯(ハラヒタイの)を伐ち回紇(ウイグル)を降し中央アジアに入りて、セミズカン(サマルカンド)を降し自ら黒契丹(キタイ)の溜兒汗(ハン)と號し都を吹河(アム)上の虎思斡耳朶(オルド)に奠む之を西遼の德宗と云ふ。德宗更にセルジウク朝の大軍を擊破し花剌子模(ホラズム)を降し中央アジアに威を振へり。

西遼

王建韓土を一統す

高麗の盛衰

新羅は一時朝鮮半島を統一して國運甚だ盛なりしが唐末に至りて政大に亂れ甄萱(キュンケン)は完山(全羅道全州)に據りて後百濟を建て王建は松嶽(京畿道開城府)に據りて國を高麗と號し三國また鼎立せしが既にして甄萱新羅を破りしかば新羅は遂に王建に降れり。王建尋て後百濟を服し九三七年遂に韓土を一統せり。之を高麗の太祖とす。◉太祖　晉の太祖石敬瑭に通じ之より五代を經て宋に貢せり。◉成宗(太祖の孫)　遼の聖宗高麗の宋に通ぜしを怒り之を伐つや成宗援を宋に請ひしが宋の

新羅の衰運

高麗の成宗

應ぜざるに及んで、遂に之と絶ちて遼の正朔を奉じぬ。◉程宗（成宗の子）大臣康兆に弑せられ、順宗兆に擁立せらるゝ遼の聖宗問罪の師を發して親ら高麗を伐ち兆を誅す。◉顯宗　立ちて文武の才あり、遼の命を拒て入朝せず、また其地を要求するに應ぜざりしかば、遼兵の侵入に遇ひ、屢〻之を破りしが、終に遼に抗し難きを見て貢を納れ臣と稱せり。其後遼の金に滅ぼさるるに至り、高麗また金に事ふ。等て武臣亂をなし權臣屢〻立つことあり、國勢漸く衰へたり。

第三十九章　宋金の交渉

(一)

宋

徽宗―欽宗

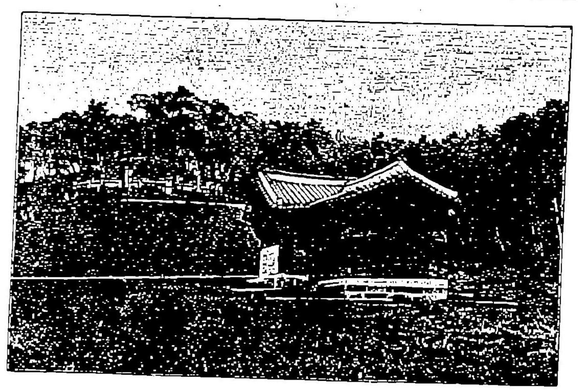
金　太祖―太宗

主戰論―李綱

媾和論―李邦彥

高宗（欽宗の弟）―靖康の難

第四十圖



高旒の太祖の陵
（奉天東京城道開城附近）

岳飛の廟　（浙江省杭州府）

（三〇六―三〇七）

李綱宗澤張浚等用ゐらる
黄潛善等の南渡說用ゐらる

(二) 南宋高宗 (一) 主戰派—韓世忠、張浚、岳飛
(二) 媾和派—秦檜專權

(三) 南宋孝宗(賢明)……小康……金世宗(小堯舜)
寧宗—韓侂胄の專權 (一) 諸學の禁
(二) 金に破らる

金の南侵

靖康の難

金の太宗既に遼を滅ぼして宋と界を接するに至りしかば、更に南侵して宋に冦する志あり。◉金宋に迫る 乃ち宋が金の敗將を納れ、遼の遺臣を招き、且つ所約の歲二十萬石を輸せざるを名とし、姪粘沒喝(ナムカ)、族幹離不(アクワフ)をして宋を伐たしめ、直ちに汴京に迫る。宋の朝野震駭し、徽宗自ら責を引きて土木を罷め、四方勤王の師を徵し、位を欽宗に讓る。◉欽宗立て國都を南に遷し金兵を避けんとす、李綱固く諫めて汴京を死守せしむ。然れども宰相李邦彥等戰を非とし、金に和を請ふ。金の要求領左の如し。

金の要求條項

(1) 金五百萬兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、裂段百萬匹を輸送すべし。

欽宗位を欽宗に讓る

李綱

(2)●中山太原河間三鎮の地を讓與すべし。
(3)●宋帝は叔父に對する禮を以て金帝に事ふべし。
(4)●宰相親王各一人を質とすべし。

宋は其要求を聽しと雖も所爲の稿師料を出す能はず、金人向ほ汴京と圍む。會〻四方勤王の兵漸く來り援ひ、李綱また勁めて戰を主とし兵頗る振く。◉また和を請ふ。時に宋將の期に先ちて金營を襲ひ敗れたるもの あり、欽宗大に驚きて三鎮を與ふるに及び、金軍遂に引き去る。◉京師陷る。されど三鎮金に入らざりしかば、一一二六年金軍また長驅して汴京に來寇し、遂に之を陷れて徽宗欽宗を執へ、張邦昌を立て、楚帝となし城中の子女金帛等を抄掠して北に還れり。時に欽宗の靖康元年なりしかば之を靖康の難と云ふ。

靖康の難

高宗

宋室の南渡

張邦昌金に立てられ位を僭すること三十三日、大心服せざるを以て欽宗の弟康王構を迎へ、康王應天府(河南商丘)に即位す。之を高宗となす。高宗位に即きて和を主とする者を貶竄し、李綱を召して相となし、宗澤を開封府の知事となす。綱銳意兵制を改め軍備を設にし、宗澤以下一意

宋の亦敗績ろ

恢復を圖り、河北河東等の州郡蜂應し勢日に張る。然れども帝もと怯懦なるを以て和を主とする黄潛善等を任用して李綱を罷め遂に金の餌を避けて一一二九年都を南揚州(江蘇揚州府)に遷す。故に是より以後之を南宋と稱す。

宋帝南遷す

宋金の交戰

劉錡青帝となる

主戰派の勝利

時に金軍三道より進む。宗澤四方の義士及群盜を募り屢〻金軍を破り頻に車駕の汴京に還らんことを請ふ。黄潛善等其功を忌みて之を沮む。宗澤憂死す。金の太宗は河東河北河南關中江淮の地を取り、宋の降臣劉豫を立て、楚帝となし諸將を遣はして楊州に逼らしむ。高宗之を聞き、雖を杭州(浙江杭州府)に避け、尋て温州に走り、韓世忠をして江淮の方面を防がしめ、張浚をして關西の方面を防がしむ。岳飛將才あり屢〻金軍を破る。會〻金の太宗疾あり、金兵引き退くに及び高宗都を杭州に奠めたり。

岳世忠岳飛等屢〻金軍を破る

秦檜の和議

金の太宗死して從孫熙宗嗣ぐ。厥宋を侵せしが其利なきを知り秦檜を宋に遣はして和を謀らしむ。檜は先きに宋の二帝の虜にせらるゝに當り從ひて金に行きたる者なりしが宋に歸りて高宗の信用を得遂に相となる。奸藏にして智略あり常に講和を主張す。詭許多なく金將九

秦檜

水大擧して入冦するや、韓世忠岳飛大に之を破り、飛は將に河北を恢復せんとするに至りしに、槍閣將を召還し、遂に岳飛を殺し、且つ文字の獄を起して學者武將等の主戰論者を貶竄殺戮して金と和す。其條件左の如し。

金宋講和條件

(1)● 東は淮水西は大散關（陝西鳳翔縣）を國界として以北を金とし以南を宋とす。

(2)● 宋より歲貢銀絹各二十五萬を納むべし。

(3)● 宋の君主は金の封冊を受けて、宋帝と稱するを得べし。

(4)● 徽宗の梓宮及韋太后を宋に送還すべし。

金都を燕京に遷す

金宋和約を改む

金宋の盛衰

金の熙宗（宋と和してより驕恣淫佚に耽り酗酒暴怒甚し、從弟迪古乃之を弑して自立す。また淫虐驕慢にして骨肉を殺し、奮勵を誅し、舍寧の僻陋なるを嫌うて都を燕京に遷し、一一六一年六十萬の兵を興して宋を伐ちしが軍中にて殺され、從弟世宗位に卽きて師を罷めたり。◉金宋和約の改正　時に宋は高宗死して養子孝宗立ち、金の內亂に乘じて恢復を圖りたるも克たず、金の請に應じて和を議す。其條項左の如し。

(1)● 君臣の禮を改めて叔姪の國とし、且つ宋の君主は皇帝と稱することを得べし。

(2)● 歲貢を改めて歲幣とし、銀絹各二十五萬を二十萬に減ずべし。

金の世宗の治

金宋の小康

◉金の世宗　此時に當り金は東高麗を威服し、西西夏を懷け、南淸淮二水より北ケルルン河に及べる大版圖を有して、東アジアの最大强國となり、世宗は賢明仁恕にして小堯舜と稱せられ善政美事多し、就中女眞の純朴なる舊風を愛して、女眞人の漢俗に倣ひ奢侈文弱に流るゝを制し、金室の盛なる其極に達せり。◉宋の孝宗　もまた南宋の賢主なり、恰も世宗と時を同うし、猶ほ回復の念なきに非ざりしが、內に良相の佐なく、外に乘ずべきの釁なく、南北休息を得るもの殆ど三十年に及べり。

宋の孝宗の治

韓侂冑の專橫

宋金を伐つ

宋の叛盟　其一

◉韓侂冑の專橫　高宗より二傳して寧宗に至り、韓侂冑擡立の功を恃み、宰相趙汝愚を斥けて之を貶し、且つ僞學の名を以て大儒朱熹以下の名士を斥け、威權上下を壓し頗る驕恣を極む。◉金を伐つ　時に金の世宗既に死し、章宗立ちて嬖幸事を用ゐ紀綱頗る振はず、且つ其北邊蒙古（モンゴル）の爲めに擾され、連年兵を用ゐて財乏しく民苦しみ、國勢日に衰へたり。韓侂冑之に乘じて北伐の大軍を出したるも皆敗れ、章宗勝に乘じ

て南下するに至れり。寧宗大に懼れ倪胄を殺し、其首を金に送り、左の條件を約して和漸く成る。

宋侘冑を斬て金に謝す

講和條件

(1)叔姪の關係を改めて伯姪の關係となすべし。
(2)歲幣を增して銀絹各三十萬とすべし。
(3)別に稿師料銀三百萬兩を金に贈與すべし。

金宋最後の交涉

宋の叛盟其二　其後幾許もなく金の蒙古に困めらるゝや、宋は歲幣を金に遣らず、金の宣宗屢〻督促すれども從はず。金乃ち兵を出して其違約を責めしが、舊時の如き勝利を得る能はず、後金の哀宗(章宗の子)の亡びんとするや、宋の理宗(寧宗の養子)は蒙古を助けて金を滅ぼし、尋て蒙古との約束を破り、中原を取らんとして蒙古の怒に觸れ、遂に滅ぼされたる事實は後章に詳かなり。

第四十章　宋代の儒學文藝及宗教

(一)　儒學　一、理學の起り　二、名儒

第十五圖

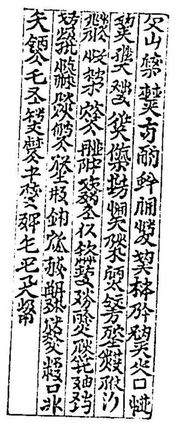
司馬光

朱熹

陸九淵

契丹文字

西夏文字



女眞文字

(二) 文藝 一、文章——唐宋八大家中六大家
二、詩賦——歐、梅、蘇、黄

(三) 美術 一、書——蔡襄、蘇軾、米芾
二、畫——李公麟

宋代儒學の發展

宋代に於ける儒者の學風は如何（一四三四）

性理學

宋の儒學

宋代の儒學は漢唐以來の訓詁註疏の域を脱し、新氣運を開展せり。蓋し魏晋以來佛教盛に行はれて、禪學の研究隨て起り、學者は儒學を研究すると同時に、心を印度哲學に潜めしかば、其影響漸く儒學の上に及び、遂に理學の起るに至りしなり。理學は性理の學とも、格物窮理とも道學とも謂ひ、儒學一段の進歩をなしたるものなり。

理學の大家

宋の名儒

理學の盛なるは仁宗の時に始まる。當時學者には范仲淹、胡瑗（エン）、歐陽修、周敦頤あり。范仲淹は文武の才あり。賢相として名高く、胡瑗は經學を實用に施すことを教へ、教育に功あり、歐陽修は文章を以て顯はる。此間專ら理學を以て稱せらるゝは周敦頤なり。其他理學の大家概ね左の如し。

姓名	著書
周敦頤	通書、太極圖說

邵雍……皇極經世書
張載……正蒙、東銘、西銘
程顥……定性書
程頤……
張拭……易傳、春秋傳
呂祖謙……南軒易說、論語解、孟子說、知言
朱熹……讀詩記、書說、左氏傳說、大事記
（四書集注、周易本義、小學、近思錄、通鑑綱目等）
陸九淵……語錄（門人の集めたるもの）

（朱熹、朱子）（1130―1200）
（高師三三）

五子
濂洛關閩
朱子
陸子
（陸象山）（1139―1193）
（高師三四）
歐陽修古文を完成す

◎五子……周敦頤、張載、二程、朱熹（江南の人、福建即ち閩に學ぶ）
◎濂洛關閩……濂溪―周敦頤　關中―張載　洛陽―二程
◎朱熹……周張二程の說を採りて、宋の儒學を大成す。
◎陸九淵……は朱子が周子の經傳の解釋を務むるを譏りて一派を立つ。

宋の文藝

唐末より五代に至れり。然れども歐陽修出づるに及び盛に古文を唱道して、宋代の文章に一生面を開けり。修また詩風を矯正し、門徒甚だ多かりき。之に次ぎて蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石等の大家出づ。就中軾は文と詩とに長じ、韓、柳、歐、蘇と併稱せらる。而して北宋に於ける大家左の如し。

歐陽脩派

北宋の大家

南宋の名家

姓名	詩文集
歐陽修	文忠集
梅堯臣	宛陵集
蘇洵	嘉祐集
蘇軾	東坡全集
蘇轍	欒城集
曾鞏	元豐類藁
王安石	臨川集
黃庭堅	山谷集

◎三蘇
蘇洵（老蘇）―蘇軾（大蘇）
　　―蘇轍（小蘇）
◎歐梅蘇黃（詩の大家）
蘇は蘇東坡
◎唐宋八大家（文章家）
唐―韓退之、柳宗元
宋―歐陽修、三蘇、曾鞏、王安石

◎宋室南渡後は理學盛に行はれて、詩文稍衰へたれども、李綱の奏議は以て一世を驚醒するに足り、呂祖謙の文はまた華麗を以て稱せらる。胡澹菴は時事を論じて其文特色あり。文天祥は悲壯慨慷人を動かし、謝枋得は

奇抜を以て群を拔く。而して詩人にはまた楊萬里(誠齋)、范成大(石湖)、陸游(放翁)等の大家あり。

◎史學　は宋の世頗る發達す。五代の時後唐の劉昫は唐書を撰び、歐陽修、宋祁之を改刪して新唐書を作る。歐陽修また薛居正の五代史について新五代史を撰ぶ。其他司馬光の資治通鑑、朱熹の通鑑綱目、馬端臨の文獻通考等あり。

宋の美術

太宗書を好み、徽宗書を好みて、奬勵の道能く備はりしを以て、書甚大に發達せり。先づ宋朝第一の書家を李公麟とし、第一の書家を蔡襄とす。蘇軾、米芾(フツ)はまた書畫兩道に達せり

宋の佛教

佛教は五代の末、周の世宗の迫害に逢ひ一時衰微せしが、宋の太祖卽位するに及び大に力を佛教に盡くし、僧侶を印度に派し、經を譯し、大藏經を出版せしかば佛教また興れり。而して道學の諸儒多く佛說をも研究し、伊川學派の中には遂に禪宗に傾きたるもあり。

道教

宋に至り眞宗大に之を崇拜す。徽宗最も之を信じ、天帝降臨の說に迷ひて宮殿を作り、道階を制し、道士二萬人を宮に入れ、道學博士を置き、道士

史學　李公麟　蔡襄　宋代佛教興隆　道學博士

第十六圖

徽宗帝の畫

（二六―二七）

を編し、自ら其教主と稱して天下の懇望を買へり。爾來歴代の、信仰厚く、其流派もまた多く、正一教、眞大教、大乙教等ありき。

第四十一章　宋代の西城諸國

一、サマン朝―ペルシア豪族イスマイル
二、カズニ朝―突厥マームード
三、セルジュク朝―突厥トグルルベク
四、ゴール朝―アフガン人シャハブ・ウッデン
五、西遼―遼の王族耶律大石
六、ホラズム朝―セルジュク家の臣ヌシテギン

サマン朝　バグダードのアッバス朝既に傾き、所在の豪族スルタンと稱しハリファの代理者として、其地方に於ける兵馬政治の實權を握り、ハリファは單に宗教上の虚位を有するに至れり。◎サマン朝の創建　八七四年ペルシアの豪族イスマイルと云ふ者ハリファの爲めに叛徒を平らげ其信任

スルタン

サマン朝の創建

を得てブハラに治し、サマン朝を起して、天山の西麓よりペルシア灣及印度の北境に至る地方を奄有せり。◎ウィグル　是より先き回紇は吐蕃及黠戛斯（キルギス）に逐はれ、一部は河西に奔て西夏に投じ、一部は高昌より吹河（ヴィ）上のベラサグンに移りて中央アジアを侵し、其主イレクハンはブハラの主イスマイルの死に乘じ討てサマン家の領土を蠶食し、天山の東端よりアム河に至る大領土を占領せり、

ウィグル

イレクハン

ガズニ朝　突厥の唐に破られしより、其種族のハリファ及ペルシアの諸王侯等に仕へて奴隷となる者多かりしが、武勇を以て軍隊に編入せらるゝに至り、漸く勢を得たり。サマン家の奴隷アルプテギン其主マンスルを怨みて遂にガズニに據り、其子セブクテギンを經て孫マームードに至り、遂にサマン家に代てスルタンと稱し、北アム河より南ペルシア灣に至る地方を領せり。◎其隆盛　マームード死して國衰へ、セルジュク朝の起して五年間に十七回の印度侵入によりて南はグジェラートより東はカノージに至る間を領有す。◎其衰滅　マームードは印度の亂るゝに乘じ、征討の軍を起してラージプト族の諸侯を破り、一〇〇四年回紇のイレク汗を破り、甘粛に至る地

マームードガズニ朝を起す

廿五年間十七回のインド侵入

セルジュク朝　セルジュークはもとブハラ附近に住せる突厥の一部なりしが、一一八六年ゴール朝に滅ぼさるゝに至り、ガズニ朝を破りてホラサンを取り、一〇三七年ニシアーブルに都して、ハリファよりエミル・アル・オムラ（宗教俗権）の號を得たり。◎其隆盛　其姪アルプアルスランに至り國威強く、東ローマ帝ローマヌス四世を擒にし、アルメニアを破り、其子メリクシアーに至りてセミズカンを取り、カシュガルを併せアラビア、シリア、エジプトを侵し、其領土はカシュガルよりアラビアに至り、セルジュク家の全盛を極めたり。◎其衰滅　メリクシアー其國を分けて諸子功臣を封じたるより國勢衰へ、中央アジアに西遼起るに至て、また振はざるに至り、遂に一一九四年ホラズム朝に滅ぼさる。

エミル・アル・オムラ

アルプアルスラン

セルジュク朝の衰滅

西遼朝　西遼の德宗はメリクシアーの子サンジアールを破り、ホラズムを降し、西アラル海より東西夏に及べる大版圖を領し、威を中央アジアに振へり。◎其衰滅　一一三六年德宗死し、子仁宗を經て孫直魯古に至る。

西遼の滅亡

時に蒙古勃興して乃蠻（ナイマン）部の屈出律（フチウルク）來奔し、ホラズムに通じて西遼は遂に其分割する所となる、時に一二一一年なり。

ホラズム朝　ホラズム朝の祖をヌシテギンと云ふ、もとセルジウーク家の兵馬指揮官たりしが子孫相次て獨立を謀る。◎其隆盛（ホラズム朝の隆盛）　曾孫アルスランに至り、サンジアルが西遼の爲めに破らるゝに乘じホラサンを奪ふ。子テキシは西遼に歲幣を納れて東顧の患を絶ち、一一九四年遂にセルジューク朝を滅ぼして、西方アジアに號令せり。一二〇〇年子モハメッド（モハメッド）立ちてホラズム王となるや、深く西遼に歲幣を輸するを辱ぢ、其頃蒙古に逐はれて西遼に依れる、ナイマンのフチャルクと東西相應じて西遼を滅ぼし、悉くシル河以南の地を奪へり。◎其衰滅　モハメッド一二一七年バグダードのハリファを伐たんとし、成らずして還り、幾許もなく蒙古に滅ぼさる。

第四十二章　傳記及解說

趙普　字は則平、薊州の人、宋の大祖の創業を佐く、其節度使の權を殺ぎ、通判、轉運使を置き、禁旅を設くる等、皆其計畫する所なり、太宗の世太師に任ぜられて死す。

曹彬　字は國華、宋の太祖の創業を佐け、潘美と共に南唐を降し、仁厚の處世を取りしを以て稱せらる、太宗の時屢征伐に從事す、八六年遼を伐て岐溝關に敗る、性溫厚篤實、二帝の信任を受け、尤も士卒に信愛せらる。

耶律休哥（エーリュウカ）　遼の宗室にして智略才能あり、程宗の時宋の太宗の軍を高梁河に破り、進て瓦橋關を圍む、聖宗幼にして母后蕭氏朝に臨むや、休哥用ゐられて政局に當り、宋將曹彬の來り擊つに當り、之を岐溝關に破り、深く內地を掠む。

寇準　字は平仲、宋の眞宗の相となる、遼大擧して入寇するや、內外震駭し遷幸を勸むる者あり、準固く親征の議を執り、帝を奉じて澶州に至り遼軍を退けたり、既にして和成り、益〻信任を受けしが、後王欽若の讒によりて雷州に貶せられ貶所に死す。

韓琦　字は稚圭、仁宗の世に西夏の寇あるや韓琦范仲淹と共に經略安撫使

となりて徑州を固守す。敵畏憚して來り犯さず朝廷賴りて安し。邊民曰く「軍中有二一韓西賊聞之心膽寒一軍中有一范西賊聞之膽破」と。次て樞密副使となり英宗の朝魏國公に封ぜられ、一〇七五年神宗の熙寧八年死す。年六十八。

范仲淹　字は希文、韓琦と共に仁宗に事へ、西夏の寇を防ぎて功あり、文武の才に長ず。郭后の廢せらるゝや之を爭うて貶せらる。尋て樞密副使となり、參知政事に遷り、日夜弊政を改めんとせしが反對黨の爲めに貶せられ、陝西河東の宣撫使となる。仲淹經學に深く文を能くせり。

胡瑗　字は翼之、泰州如皐の人、若くして五經に通ず。范仲淹之を朝にすゝめ、湖州の教授となす。遠方の士其門に出入するもの數千人、多く異才を出す。門人稱して安定先生と云ふ。

歐陽修　字は永叔、廬陵と號す。仁宗の初年廢后の議あり、其不可を論じて貶せらる。仁宗の末年また參知政事となり、神宗の世死す。少き時苦學し、文筆に達す。五代史、新唐書等を撰し、專ら虛飾の文體を排して古文を研究し、遂に一代の文宗と仰がる。

《范中淹（富弼三二）》

梅堯臣　字は聖俞、宣城の人、歐陽修と相師友す。仁宗の世國士直講となり、後都官員外郎に遷り、晚年歐陽修等と共に唐書を修む。年五十八を以て死す。其詩單思精微を以て稱せらる。

蘇洵　字は明允、老泉と號す。眉山の人なり。年二十七始めて書を讀む。進士に第せず。作る所の文章を燒き、戸を閉ぢて勤學する數年、遂に六經百家の書に通ず。乃ち二子軾轍と共に京師に上り文名忽ち揚る。後校書郎となり禮書を編輯し、未だ成らずして死す。二子蘇軾、蘇轍また皆文を善くし、共に三蘇と稱せらる。洵の文奇峭雄拔頗る先秦の風あり。

蘇軾　洵の子、字は子瞻、東坡と號す。幼にして頴悟博く經史に通じ、文章天稟の才あり。仁宗英宗神宗に事へて史官に出仕す。王安石の新法の不可を上書して貶せらる。後歷官を遷され、徽宗の世常州に死す。年六十六。軾才氣縱橫其文奔放の勢あり。夫の前後赤壁の賦は一代の傑作にして、世人の傳唱する所たり。詩書畫また皆天下の逸たり。

蘇轍　洵の少子、字は子由、潁濱と號す。年十九にして兄軾と共に進士の第に上る。王安石の新法を駁して斥けられ、哲宗の時召されて諸官に歷仕し、徽

宗の時大中大夫となる。後致仕して終日獸坐すること十三年、年七十四を以て死す。其文高雅の中に奇氣を含めり。

周敦頤　字は茂叔濂溪と號す。初め獄吏となり訴訟を斷じ公平の稱あり。後閉居して門人程顥等と哲學を研究し天理の根源を明にし萬物の終始を究め大極圖說及通書四十三篇を著す。有名なる愛蓮說は其作なり。

邵雍　字は堯夫河南の人康節先生と稱す。其著に皇極經世書觀物內外編等あり其說天地の消長萬物の變化皆一數を以て說明し得べしとなす。

程顥　字は伯淳河南の人周子に學び進士に第し累進して太子中允權監察御史裏行に至る。神宗屢召して治道を問ふ。王安石新法を行ふに當り其不可を直言す。後官を辭し讀書講學す。士大夫從ふ者多し。德望愈高く四方の學者遠しとぜずして來り學ぶ。外和にして內剛克く人心を服す。文淳博其墓に題して明道先生と云ふ。

程頤　字は正叔顥の第なり。兄と共に道學を周敦頤に受く。英宗に事へ書を御前に講ず。容貌特に嚴莊中の語句を引き屢諫む。屢名益揚り四方の學者仰慕して學を請ふ者多し。哲宗の世西京國子監となる。其性行及學派の異なるより洛黨を率ゐて蘇軾の蜀黨と相爭ふ。後朋黨の禍に逢ひて流され、徽宗の世赦されて家に還りて死す。世稱して伊川先生と云ふ。

張載　字は子厚橫渠と號す。志氣豪壯好んで兵を談ず。後二程に見えて道學の要をきゝ、佛老を棄てゝ儒學に向ふ。神宗に召されて知太常禮院となりて死す。

呂祖謙　字は伯恭東萊に居るを以て人稱して東萊先生と云ふ。朱熹及張拭と友たり。仕へて秘書郎となり主管明道宮を以て死す。

張拭　字は敬夫南軒と號す。仕へて吏部侍郎となる。朱熹と親交あり二程の說を信ず。一一八〇年死す。

李公麟　字は伯時舒城の人神宗の熙寧中進士となり官朝奉郎に至る。後龍眠山に歸臥す。故に龍眠居士と號す。古を好て詩文に長ず。其書特に勝れ佛畜山水に巧なり。

王安石　字は介甫臨川の人故に臨川と號す。神宗に用ゐられ新法を行ふ。二たび相となりて富國強兵を謀りしが反對黨の爲めに果さず。一〇八六年（元祐元年）死す年六十八。安石經史に明にして文章に達し議論卓出剛愎堅忍、

宋代屈指の政治家なり。

曾鞏（ソウキョウ）　字は子固南豐（江西）の人、故に號を南豐と云ふ。歐陽修に師事して其學を傳ふ。唐宋八大家の一人なり。其溫雅なる文體は西漢の劉向に似たり。王安石と友とし善じ官は僞に中書舍人に至る。

司馬光（司馬光の部 高二三）　字は君實河南陝州の人なり。仁宗英宗神宗に歷仕す。王安石新法を發するに及び主として反對す。出でゝ洛陽にあること十五年、兒童走卒も司馬君實あるを知る。哲宗の朝和となり新法を除くに汲々たりしが僞に八ケ月にして一〇八六年死す。帝爲めに朝をやめ太師溫國公を贈り文正と諡す。資治通鑑二百九十四卷を著す。

黃庭堅　字は魯直山谷と號す。分寧の人。紹聖の初め鄂州に知となりしが蔡京等に惡まれ謫せられて涪州の別駕となり三遷して宜州に謫せらる。蘇軾甞て其詩文を見て歎じて曰く萬物の表に獨立せりと。世其時を以て一〇五年六十二を以て死す。

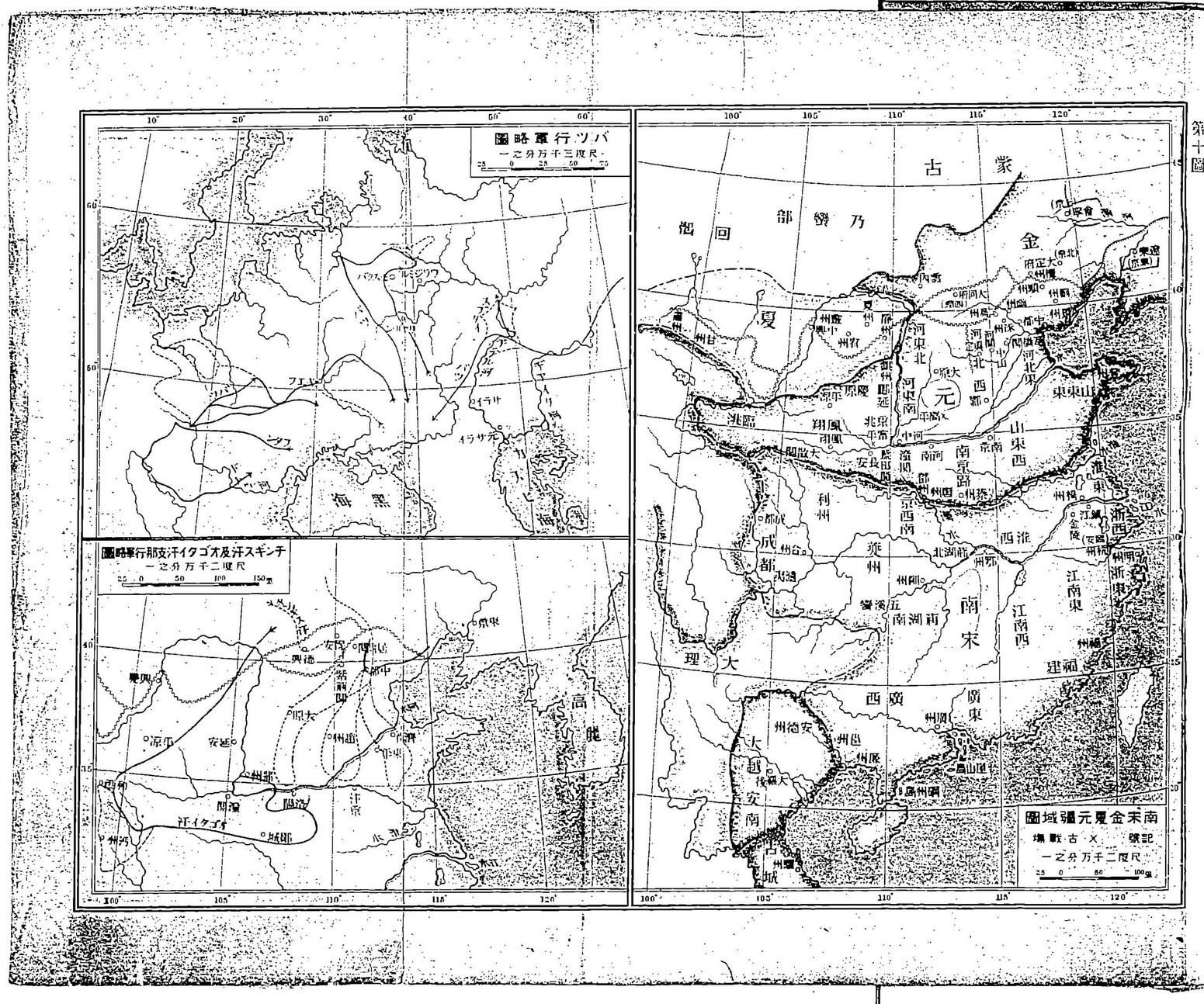
李綱　字は伯紀金人入寇して欽宗地を割くを議するや綱罷を主とし兵部侍郎に拜せらる。一一二六年（靖康元年）金兵汴に迫り、軍政遷徙の議あり。綱また死守を主張し爲めに忌せらる。高宗位に卽くや相となり北方恢復の志あり讒に遇ひて斥けられ地方官となる。綱文に長じ著書頗る多し。

韓世忠　字は良臣陝西延安の人。汴京陷るや高宗に從て南渡し兀朮來りて侵すに及んで能く之を拒ぎ敵を破りて江を渡らしめず。秦檜政權を握り和議を唱ふるに及び其非を上言して用ゐられず。是より退きて復た出でず。

岳飛（岳飛 高師三八）　字は鵬擧江南相の人なり。學に深く膂力あり。高宗の世金將兀朮と戰ひ屢之を破り勝に乘じて河北を平定せんとす。秦檜和を結ぶに當りとし爲めに兵を收ふるを欲せず。飛深く孫吳の兵法に達す。其獄中に在る時曾て背を獄吏に示す「盡忠報國の四大字の黥あり」しと云ふ。

朱熹（朱熹（朱子） 高師三三）　字は元晦晦庵と號す。婺源（安徽）の人なり。學を李侗に受け程子の學統を傳ふ。高宗の世諸官に歷仕して治績あり。寧宗の世侍講となり上疏して韓侂胄の意に忤ひ僞學者として斥けらる。死して文公と諡せらる。誠意を以て主とし著書頗る多し。

陸九淵　字は子靜象山と號す。金谿の人。高宗の朝に仕へて將作監正となる。



第十圖

台州崇道主管に遷る。光宗の朝荊門關に差知となり治績大に擧る。年五十四を以て死す。其學朱子と異なり二人皆て稽湖及白鹿洞に會し互に論はざりき。

文天祥（文天祥の事蹟は卷四十二五）

朱末の忠臣宇は宋瑞盧陵の人なり。元兵の入寇せし時贛州に知たり。慨然起ちて孤兵を提げ獨り之に抗せしが廷議既に降るに決し天祥をして之に使せしむ。天祥乃ち往きて伯顏と論難す。伯顏怒りて囚さず。後夜潜に逃れて歸り厓元軍と戰ひしが後捕へられ降を強ひらるゝ從はず。後燕京に送られて殺さる。

第三篇 近古史

（西紀一二〇六年―一六四三年）

五代（五四年）北宋（一七年）南宋（一五〇年）元（九二年）明（二七七年）清

（契丹遼（二〇年）女眞金（一二〇年）

九代 十代 十七代

西夏（一九〇年）

蒙古（一一帖木兒帝國（一三八年）莫臥兒帝國

第一期 元時代（西紀一二〇六年―一三六八年）

第四十三章 蒙古の勃興

(一) 蒙古（地―オーノン、ケルレン河源、ブルハン山の邊

人―哈不勒―[illegible]―也速該―鐵木眞

一 泰朱烏

二、塔々兒部
三、克烈部
(二)鐵木眞征略
四、乃蠻
五、西夏
六、オイラン河上集會成吉思汗と號す

一、ウエラト
二、ヒルギス
三、乃蠻王子屈出律
(三)成吉思汗征略
四、ウイグル
五、西夏
六、金

蒙古の興起

蒙古は唐の世契丹の西北に散處せし室韋の一部にして幹難性格連兩河の源なる不兒罕山の邊に近牧し世々遼金に隷屬せしが部長哈不勒に至り始めて蒙古國王と稱す其孫也速該に至り近傍の諸部を併呑し勢始めて大なりしが後嗣々兒部の爲めに殺さる。◉鐵木眞其

(成吉思汗)(一一六二―一二二七)(在位一二〇六―二七)

子鐵木眞十三歳にして即立す諸部其幼なるを侮りて叛き去る者多し鐵木眞先づ塔々兒部を破り功ありて金の冊封を受く(當時金と蒙古人の部)(一一八―一二三)(世紀頃―時代に於ける)次で蔑里吉部を討じ克烈部を滅ぼし乃蠻部を破りて其酋(元太祖)(一二〇三)

(ナイマン)太陽汗を獲一二〇六年斡難河上にフリルタイを開きて大汗の位に即き成吉思汗と號す(ケレイト)

元の太祖の征伐

元の太祖の征伐時に乃蠻の太陽汗の子屈出律蔑里吉の部長脫々と共に蒙古に迫る太祖乃ち麾下を率ひて脫々を殺し屈出律汗を逐ひ別失八里の畏吾兒部(即ち回紇)を降し海押立(バルカシ)湖東南の柯耳魯部を併せ兵を進めて西夏に迫まる。夏主李安全元昊五世の孫其女を納れて來降す是に於て太祖全力を注て金に向ふ。◉金を伐つ時に金は章宗既に死し叔父允濟位にあり柔弱にして國勢振はず太祖此機に乘じて之を伐ち四子(赤)(察合臺)(窩濶臺)(拖雷)と共に三道より兵を進め西京(大同)を陷れ河東河北遼西の州縣を拔き燕京に逼まる。金の大臣允濟を殺して章宗の庶兄珣を立て公主と金帛とを獻じて和を乞ふ太祖乃ち師を班せり然れども宣

宗燕京に安んずる能はずして汴京に遷るや、太祖其の己を征べるを怒り兵を遣はして燕京を取り、更に西より汴京附近を剽掠し、黄河以北の地殆ど蒙古に没す。金は是より勢日に蹙まる。◉太祖の西征　太祖の屈出律を逐ふや、屈出律逃れて西遼に依り、尋でホラズム王モハメッドと内外相應じて西遼を滅ぼし、シル河を境として其地を分ち太祖が金を伐つ虚に乗じて蒙古を襲はんとす。太祖乃ち哲伯（ジェベ）をして屈出律を平らげしめ、悉く西遼の地を定む。是に於て蒙古の領地は直にホラズムと境を接するに至れり。◉ホラズム亡ぶ　時にモハメッドはアフガニスタンを征し、轉じてハリアフ、ナシル、ウッヂンを伐たんとしてバグダードに向ひ大雪に逢て還り兵氣大に衰ふ。會〻蒙古の隊商ホラズムと互市をなさんと欲しオトラル城主に殺され、次て蒙古の使者またモハメッドに殺さる。太祖乃ち一二一八年四子と共に西征し、アルマリクを經、シール河を渡りてホラズムに入り、連りにモハメッドの軍を破りて遂にブハラ及サマルカンドを陷る。モハメッド走てホラサンに至り、蒙古の將哲伯速不台（ジェベスブタイ）に追蹤せられ、裏海の一孤島に逃れて死す。其子扎蘭丁（ジェラルエッヂン）ガズニに走りて恢復を圖りしが、太祖の來り伐つに及てインドス河を渡りデリーに逃れ、其王アルタムシに依る。而してモハメッドを逐て裏海に入り、ニシアプル、ヘラットを屠り、哲伯速不台の二將はモハメッドの西に至り欽察部（キプチャク）が最に蔑里吉の除衆を納れしを以て、更に北進してカフカズ山を超えて之を伐ち、阿羅思（オロス）の諸侯幾當（キエフ）の大公等が敵を援けしを怒り、其連合軍をカルカ（アゾフ附近）河畔に破り、裏海の北を過ぎ還て本軍に合し、一二二二年全軍蒙古に歸れり。

太祖の西征

（元太祖の四征を記せず海兵三五）

ホラズム亡ぶ

モハメッドの窟死

札蘭丁

阿羅思征伐

宋金及西夏の形勢

金宋を伐たんとす

宋の形勢

◉金宋を伐たんとす　時に金の宜宗死して、哀宗其位を嗣ぐ。蒙古の西征に會し、其侵寇暫く少かりしを以て宋を侵して疆土を擴めんとす。◉宋の形勢　宋は寧宗死して、理宗立ち、金の衰弱を侮りて歳幣を致さず。金之を責めて遂に宋に寇す。宋乃ち西夏と結て同盟を約せり。◉金宋の和　爾來宋金の間に歴〻交戦ありしが、金は士風漸く頽廃し、國力頗る困弊せしを以て、和を宋に請ひ兵を罷む。◉西夏亡ぶ　時に西夏もまた連年の攻戦により國力大に疲弊せしかば、太祖の西より歸るや、先づ西夏を伐ちて其主李睍を降せり。西夏は李元昊より十主百九十年にして亡ぶ。時に一二二七年なり。

金宋の和

西夏亡ぶ

西夏の世系

李繼遷—徳明—元昊[1]—諒祚[2]—秉常[3]—乾順[4]—仁友—安全
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　仁孝[5]—純祐[6]
　　　　　　　　　　　　　　　　　□—喜宗—遵頊[8]—徳旺[9]
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　清平郡王—睍[10]

領地の分封

太祖死す

太祖既に西夏を滅し、更に進で金を侵さんとし、六盤山（甘肅鞏昌府附近）に至て病歿す、年七十三、時に一二二七年、宋の理宗の寶慶三年なり、後世祖の時諡して太祖皇帝と云ふ、當時蒙古の版圖はヨーロッパ、アジアの二大洲に跨る、太祖既に領土を四子に分ち、各〻之を領せしむ。

四子の領土

一、長子朮赤（早く死す）……吉利吉思（キルギス）より以西の地。
二、次子察合台……西遼の故地。
三、三子窩濶台……乃蠻の故地。
四、四子拖雷……蒙古の本土

第四十四章　太宗及憲宗の外征

(一)拔都の西征→キルギス、ブルガル、モスクバ、キエフ

太宗の即位

一、本軍—拔都→ホンガリア……
二、別軍—海都→シレジア、モルダビア……ベスト

(二)憲宗の外征

一、忽必烈——大理王段智興
二、也古——高麗王高宗
三、兀良哈台——安南王陳暒
四、旭烈兀 2、アッバス朝 3、シリア、ダマスク
五、宋—理宗（賈似道專權）

金の滅亡

太祖の四子拖雷の主唱によりてフリルタイをケルレン河畔に開き、窩濶台を奉じて大汗の位に卽かしむ、卽ち太宗なり、太宗都を喀喇和林に奠め、父の志を承けて金を滅ぼさんとし、拖雷と共に陝西に入り、風翔を降し、更に道を分ち拖雷をして漢水を渡らしめ、自ら潼關を破り、腹背より汴京を襲はんとす、金主恐れ質を納れて和を媾ぜり。◉蒙古の再征

既にして金人蒙古の使者を殺せしかば、太宗再び兵を發し、且つ宋の理宗に通じて河南の地を與ふるを約し、金を夾擊す。時に金の哀宗は汴京の禍盡きたるを以て蔡州（河南汝寧府）に奔りしかば、蒙古軍は北西より、宋軍は南東より來り圍む。一二三四年城陷りて哀宗死し、金遂に亡ぶ。金は建國より凡九代百二十年なり。

蔡州陷る

金の帝系

- 太祖阿骨打
  - 太宗
  - 宗峻 — 熙宗[3]
  - 宗幹 — 廢帝亮[4]
  - 宗輔 — 世宗[5]
    - 允恭
      - 章宗[6]
      - 宣宗[8] — 哀宗[9]
    - 廢帝濟[7]

高麗の臣服

是より先き高麗は權臣政を專にして簒弑相次ぐ。會遼の遺族遼東に據り、國を建てゝ大遼と云ひ、數〻高麗の北邊を侵略す。高麗王高宗之を拒ぐ能はず蒙古軍の援を得て、漸く大遼を討平するを得、元の威を仰ぎしが其後蒙古の使者を殺したることありしかば、太宗大に怒り兵を出して京城を陷る。高宗江華島に走り、遂に質子を出して降を請ひ臣と稱せり。

高麗の臣服

大遼

ローロッパ侵略軍
- 拔都（二三四―五三）
- 同（海兵三四）
- 同（隊師三四）
- 同（女婿三六）
- 同（子葉爵三五）

蒙古軍の歐洲侵略（一二四一―四二）

本軍及別軍

ワールスタットの戰

十字軍

欽察汗國

り、時に一二四二年なり、

拔都の西征

太宗既に金を滅ぼし、高麗を從ふ、此時札蘭丁、デリーより故地に歸て西方を侵擾す、太宗乃ち伐て之を破り、更にヨーロッパ侵略の大軍を起し、兀赤の子拔都（バツ）を元帥とし、太宗の子貴由（ケユ）、拖雷（トレ）の子蒙哥（マンゴ）以下をして之に從はしめ、速不台を先鋒とし、總軍五十餘萬、一二三六年を以て發せしむ。大軍ギルギス曠原を過ぎ、ブルガールを平らげ、阿羅思に入り、リヤザン、モスクバを陷れ、またキエフを燒き、各地を蹂躪せり。◎本軍及別軍は本軍を伸ぬ、ポンガリアに向ひ、別軍は海都を將とし、クラカウを取り、シレジアに進み、シレジア侯及チュートン騎士の聯合軍をワールスタットに破り、モルダビアを過ぎて本軍に會す。拔都等既にマデアール（ポンガ）に入り、敵軍をサヨ河に破り、ブダ・ペストを陷れ、ドナウ河の氷を渡り、グランを屠りしかば、ヨーロッパ諸國震駭し、ローマ法皇は檄を飛ばして將に十字軍を起さんとせしが、會〻太宗の訃音到れるを以て、拔都は兵を收め、諸將をして東に還らしむ。◎欽察汗國　拔都はボルガ河下流のサライに留まり、斡耳朶（オルド）即ち帳殿を立て、キルギス以西カルパト山以東の地

及ドナウの下流、カフカズの北を統治し、ヨーロッパ、アジアに跨れる大國を建てたり、是を金帳國、または欽察汗國と云ふ。◎白帳國及青帳國　また拔都の兄斡魯朶は康里の地に白帳國を建て、弟昔班はウラル河の東に青帳國を建てゝ、皆金帳の汗に隷屬せり。

金帳國
白帳及青帳國

定宗及憲宗　太宗死して後皇后政を攝すること五年にして、貴由西征より歸り遂ばれて大汗の位に卽く、之を定宗とす。在位三年にして死す、皇后海迷失及太宗の一族は太宗の從子失烈門を立てんとせしが、一二五一年拖雷の子蒙哥、フリルタイに推されて位に卽く、之を憲宗とす。是に於て太祖の皇統は拖雷の後に歸し、太宗の子孫悅ばずして叛を謀る。憲宗依て失烈門及其兄弟等不平黨の主領を殺し、太宗の子濶端、孫海都を阿爾泰山附近の地に移して之を遠ざく。是より太宗の子孫と拖雷の子孫とは永く仇敵となり、蒙古帝國分裂の基をなせり。

帝統拖雷の後に歸す
蒙古帝國分裂の基

憲宗の外征　憲宗の二年フリルタイを開て大征伐を議定し、皇弟忽必烈は大理、吐蕃を征し、諸王也古（太祖の姪）は高麗を征し、兀良哈台は安南を征し、而して弟旭烈兀はペルシア及小アジア地方を征せり。◎大理國降服　大理は唐の南詔なり、唐末より勢衰へしかば、忽必烈臨洮（甘肅州府）より吐蕃の東境を經て雲南に入り、大理王段智興を降し、轉じて吐蕃に入る。◎吐蕃征服　當時吐蕃に佛敎の一種なる喇嘛敎行はれ、喇嘛扮底達全國の主權を握りしが、忽必烈到るに及び和を結び、扮底達の姪八思巴を伴ひ還り、後之をして吐蕃の領土を統領せしむ。◎安南降服　當時安南は陳冥、李氏に代て交趾王となり、其勢頗る盛なりしが、兀良哈台兵を進めて其都城を破り、屢〻敗績を被して降を納れき。◎高麗の臣附　高麗の高宗は既に太宗に降りてまた反せしかば、定宗、憲宗の際四たび征伐の師を興して途に之を服せり、是より蒙古の官吏其治に與かり、殆ど諸侯の觀あり。◎宋との交涉　既に西南三國を降したるを以て、憲宗は弟阿里不哥を喀喇和林の留守となし、自ら軍を帥ゐて、南宋征伐の途に上り、四川に入て合州（重慶府）を圍む。忽必烈乃ち鄂州（湖北武昌府）を圍み、兀良哈台また交趾より北上して潭州（湖南長沙府）を圍み三面合擊をなす。宋は理宗久しく位にあり、賈似道權を專にし、國政大に紊れしが、似道鄂州救護の命を受くるに至り敢て戰はず、密に和を忽必烈に請ひ、臣と稱して歲幣を納れんことを求めしが得ざりき。

吐蕃征服
高麗の臣附
宋との交涉
合州
鄂州
潭州

忽必烈と阿里不哥との爭位

ロクンエッデン

ムラヒダ國

イスラム敎國亡ぶ

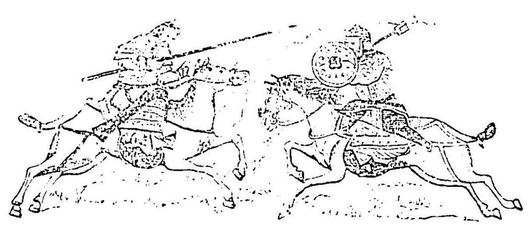
伊兒汗國

世祖の即位　偶〻憲宗軍中に死し、喀喇和林の諸將阿里不哥を立てんとす。忽必烈此報を聞くや、乃ち賈似道をして歲幣銀絹各〻廿萬を容るゝを約せしめ、和を約して北に歸り、開平（內蒙古ドロンノールの北）に至り、少數のフリルタイに推されて帝位に上れり。阿里不哥もまた喀喇和林の西にありて大汗と稱し、互に位を爭ひしが、後四年阿里不哥遂に降り、忽必烈都を燕京に奠め、國號を建てゝ元と號す。之を世祖とす。時に一二七一年なり。

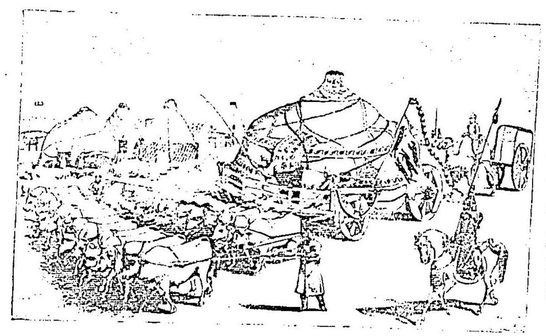
旭烈兀の西征　時にペルシアはイスマイル派敎主の支配する所となる。此派は第十一世紀の頃クヒスタンを取りて此に都し、敎主ロクンエッデンに至り勢益〻強くなれり。旭烈兀乃ち西征の途に上り、進んで裏海の南方なるムラヒダを服し、更にクヒスタンを圖みしがば、ロクンエッデン遂に降る。◎イスラム敎國滅ぶ　旭烈兀更に進て一二五八年バグダードを陷れ、ハリファ、モスタシムを擒殺し、アッバス朝を滅ぼす。◎伊兒汗國建設　旭烈兀は更に郭侃をして印度方面の敵を討たしめ、自らモスタシムの一族の密昔兒（ミシル）（エヤブト）にあるものを平げんとし、更に進でシリアを襲ひ、アレッポを略し、ダマスクを陷れ、天方（アラビア）を服し、將に密昔兒に入らんとせしが、憲宗の

第十七圖

元の世祖（銅牌）



蒙古の騎兵



蒙古の大汗發鴈の圖

部に接して歸途に就き、尋で小アジアの一部分を平定し、タブリズに都して、アム河以西を併せ爰に伊兒汗國を建つ。㊟三大汗國　是より伊兒汗國は、北赤の子孫の領する欽察汗國、察合臺の子孫の領する察合臺汗國と共に、蒙古帝國の三大藩となれり。

タブリズ

蒙古帝國の三大藩

第四十五章　世祖の一統

A、宋を滅ぼす
- 元―伯顏
- 宋―度宗、賈似道專權
- 恭宗―文天祥、張世傑
- 端宗―陸秀夫、張世傑
- 帝昺―厓山の役、全滅

B、日元の衝突
- 一、時宗元使を斥くること三回
- 二、文永の役
- 三、弘安の役

- 緬征服
- C、其他の經略
  - 安南
  - 占城
  - 爪哇

賈似道の専横

南宋の滅亡　鄂州の圍解くるや、賈似道は其實を秘して己の功となし、大に理宗の信任を受けて政を專にし、理宗死し度宗立つや益〻專横なり。是より先き世祖使を遣はして所納を履行せんことを求む、似道事の露はれんことを懼れ、元の使を拘留して報ぜず。世祖大に怒り、乃ち南伐の軍を起して襄陽を圍み、守將呂文煥を降し、更に伯顏を將として宋の首都に迫らしめたり。時に度宗死し恭宗立ち、賈似道を貶して勤王の師を徴し、文天祥、張世傑等義兵を起して入衛せしが防戰利なく、元軍臨安に迫まるに及び、宰相陳宜中和を唱へて戰はず、伯顏等帝都に入るや、表を草して元に降る、伯顏乃ち恭帝を奉じて上都開平に送れり。㊆端宗の擧兵　宋の遺臣陸秀夫、張世傑等皇兄端宗を奉じて逃れて海に浮び、福州に據りしが、元兵に迫まられて廣州に走る。㊇厓山の役　陸秀夫等更に其弟昺を立てゝ厓山に據る。元軍水陸より並び攻め、文天祥は五坡嶺に執へられ、陸秀夫は帝を負うて海に投じ、張世傑は安南に走て再擧を謀らんとして途に溺れ、宋室全く滅亡せり、太祖より此に至るまで十八代、三百二十年、時に一二七九年なり。

陳宜中衰亡して元に降る

端宗の擧兵

厓山の役

（文天祥の事蹟（高商三五）趙宋の衰亡せし概略を述べよ（高商三八））

宋の帝系

北宋

- 1 太祖
  - 燕王德昭
  - 秦王德芳
  - 2 太宗
    - 3 眞宗
      - 4 仁宗
        - 英宗
          - 神宗
            - 哲宗
            - 欽宗
            - 徽宗
              - 南宗
              - 高宗
        - 濮安懿王允讓
        - 商恭靖王元汾
  - 5 英宗
  - 6 神宗
  - 7 哲宗
  - 8 徽宗
  - 9 欽宗
  - 10 高宗
  - 11 孝宗
  - 12 光宗
  - 13 寧宗
  - 14 理宗
  - 福王與芮
    - 15 度宗
      - 帝昺
      - 16 恭宗
      - 17 端宗
  - 18 帝昺

高麗の忠烈王

元と高麗

時に高麗は元宗權臣に廢せられしが世祖に助けられて位に復し、其子忠烈王は世祖の女に尚し、元の支配を受けたり。

日元の衝突

日本は唐末遣唐使を罷めてより、支那への通聘全く絶え、唯

僧徒商人の私に往來するに過ぎざりしが、元の世祖武威を以て我國を招致せんと欲し、高麗の忠烈王を介して使節を送れり。◎北條時宗の英斷　鎌倉幕府の執權北條時宗其書辭の無禮を怒り、使者を斥くること三回に及べり。世祖大に怒り忻都をして高麗兵と共に壹岐對馬に寇せしめしが功なくして還る。文永の元寇卽ち是なり。是に於て世祖は征東行中書省を高麗に設け、元宗を以て左丞相とし、着々東征の軍備を整へ、また使を送て我邦を諭す。時宗之を斬て更に應ぜず。◎弘安の役　世祖遂に范文虎を將とし、元兵十萬、高麗兵一萬及水戰に長じたる江南の軍を加へて十四萬餘人を派し、壹岐對馬を經て博多に寇す。我軍能く拒ぎて元兵上陸する能はず、偶〻暴風大に起りて四千餘艘の軍艦概ね覆沒せり。實に一二八一年にして後宇多天皇の弘安四年なり。

緬の征服　緬國卽ちバルマは夙に印度と交通を開き、佛敎を國敎として國運頗る隆盛を極め、都をバガンに奠め、アラカン及ペグを併せ、また遥國卽ちシアムを略して威を後印度に振へり。然るに元の大理を平らげ雲南を下して境を接するに至り、使を遣はして之を招降せしめんとせしが

元の世祖我國を招致せんとす（蒙古襲來の原因）（三篇三章）
文永の役
弘安の役
元忽必烈が我邦に來寇せし時の元が世界に於ける勢力は如何なりしか（英衛三五）

相吾答見　遥主元に降る

王敢て命を奉ぜざりしかば、世祖は兵を出して之を討ずること二回に及び、一二八三年元將相吾答兒遂に國都バガンを陷る。緬王恐れて降を請ひ、アサム地方及遥國もまた前後相繼ぎて元に入貢するに至れり。

安南及占城征討　占城は安南の南にあり隋唐時代の林邑にして、今のコシェンシーヌの地なり。世祖之を招き降さんとす、占城其險遠を頼みて之に應ぜざりしかば、一二八二年唆都をして海軍を率ゐて之を討たしめ、二年の後皇子脫歡をして更に陸軍に將とし、唆都の應援をなさしむ。脫歡乃ち道を安南に假らんとす、時に陳賢の孫昤交趾王たり、其要求を聽かず、却て拒守の計を爲す。脫歡乃ち唆都と安南を擊ち却て大に敗れしが、尋て脫歡再擧を謀り國都を陷る。既にして歸途に於て其要擊に遇ひ、また大に敗れたらざれど昤の子烜に至り入貢して罪を謝し、占城もまた尋て來降せり。◎南海征伐　世祖また使節を遣りて南方諸國を招致せしむ、マーバル（馬八兒、インド南岸）、ライライ（來來、マレー南部）、スマトラ（蘇木都剌）等皆入貢し、獨りジアバ（爪哇）之を拒む。世祖依て兵を發し伐ちて之を降せり。

領土の膨脹　鐵木眞蒙古の大汗となりしより、其孫世祖が宋を滅ぼすに

至るまで、僅に七十年間に、蒙古は實に空前絶後の一大帝國を建設せり、即ちアジアの南北南端を除き、アジア大陸を横貫して東は日本海より、西はヨーロッパの東北部に跨るに至る、而してアム河の西は伊兒汗國其北は欽察汗國天山附近は察合台汗國アルタイ山附近は阿窩台汗國の版圖となり、支那本部を中心として遼東、內外蒙古、青海、チベット、中央及東南アジアは元室の直轄となれり、世祖は蒙古の大汗を以て此大帝國に臨み、アム河、嶺北、遼陽の三行省及阿力麻里、別矢八里の兩元帥府を置きて邊要の地を督せしめ、中央政府を燕京に置き、中書省、樞密院、御史臺等の諸官衙を設け、諸官の長には必ず蒙古人を用ゐ、國の內外を問はずして人材を登用せり、されればイタリア人マルコ・ポローを始めとして、西方人士の元に來るもの頗る多く、隨て東西の交通大に開くるに至れり。

最盛期に於ける元の版圖を問ふ（海機三八）

元室の直轄地

三行省

兩元帥府

東西の交通

蒙古人の特徴

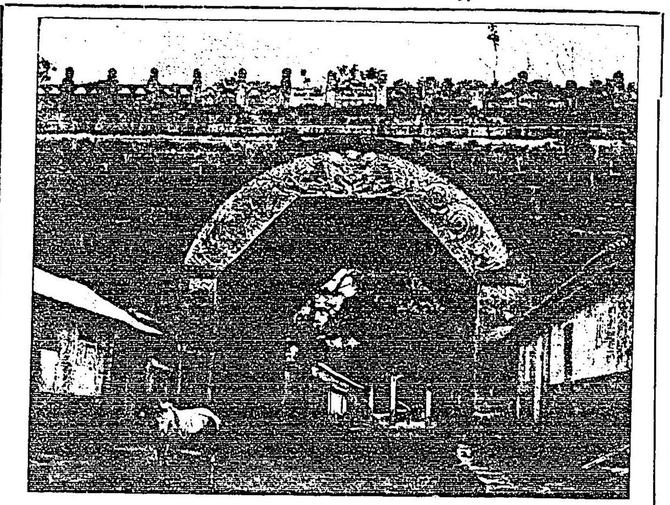
大略左の如し

(1) 騎射に工なり—故に其兵尤も精鋭なり、騎兵は乘馬三四頭を有す。

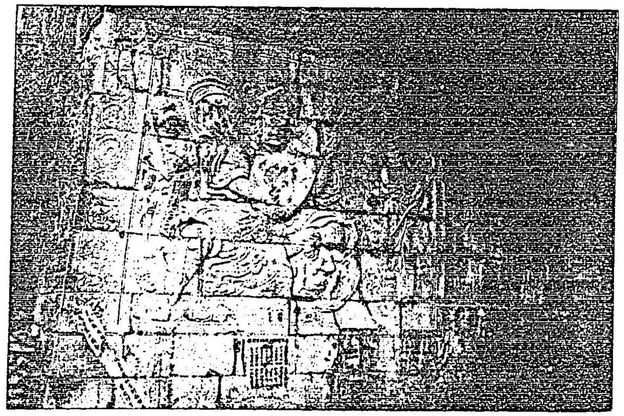
(2) 騎兵の飲食物—馬乳、馬血及其乾酪のみに依り、時に能く進行す。

(3) 軍隊の好組織—軍隊すべて秩序あり、部長は無限の權力を有す。

第十八圖



關庸居



居庸關內面の彫像

（二四六—二四七）

(4) 納税の義務―蒙古兵は出陣の間も納税の義務あり、故に頻年兵を用ゆるも財源缺乏の患なし。

第四十六章　諸汗國の盛衰

四大汗國　世祖即位の初に當り、諸王族の領土を私有するもの多し、即ち左の如し。

海都陰に反亂を企つ

欽察汗と伊兒汗との軋轢

海都大汗となる

乃顏世祖乃顏を破る（海都汗の興亡を記せしに同じ）

海都汗の反亂

憲宗の大汗に選ばれし時太宗の子孫皆不平なりしかば、

阿里不哥

旭烈兀……伊兒汗……ペルシア及西アジア一部の地

世祖の位に即くや海都は喀喇和林の留守阿里不哥を助けて反を圖り阿里不哥の敗るゝに及びエミルに退きて陰に時機の到るを待てり。◉欽察汗と伊兒汗との軋轢　欽察汗別兒哥の姪は熱心なるイスラム教信者にして常にヨーロッパのキリスト教徒を困しめ、而して伊兒汗旭烈兀はバグダードを攻落してイスラム教徒を虐遇す。是に於て兩國互に相嫉視せり。海都の反するや旭烈兀は世祖の弟たるを以て元に從ひ欽察汗國及察合台汗國は竊に台汗に與みし海都を以て大汗に推し和與に元に抗せり。

海都汗の敗滅

海都は察合台汗都哇を幸ひて破西に侵入したりしが元將伯顏の爲めに破られたり。◉乃顏（太祖の弟）の孫乃顏世祖の末年（一二九四年世祖死し孫成宗立つ。海都機に乘じ大衆して元を侵す。成宗の從子海山喀喇和林に進擊して大に之を破る。尋て海都死し其子察八兒は都哇汗と共に成宗に降りしが海山立て武宗となるに及び察八兒また異志を抱きしかば都哇は兵を出して之を伐ち武宗もまた之を討じ遂に察八兒を降しぬ。是に於て阿窩台汗國全く亡び其地は概ね察合汗國に入り四十年の兵亂漸く鎭定に歸す。時に一三〇八年なり。

伊兒汗國の盛衰

阿八哈

旭烈兀―阿八哈―阿魯渾―合贊―哈兒班答―不賽因

旭烈兀は一二六五年に死し子阿八哈嗣ぐ。東は察合台汗八剌を破り西はエジプトのスルタン、ビバルスを擊ち東ローマに通じてキリスト教徒を保護し國內能く治まれり。◉合贊に至り大に德政を振興して內治を圖り、ローマ法王ボニファチオ八世と同盟して十字軍に加はり、エジプトのスルタンを伐ちシリアを恢復せり。◉不賽因に至り、十二歲にして位に卽く。貴族漸く跋扈し、欽察汗月卽伯興其北邊を犯して國勢振はず、一三三五年死す。旭烈兀の弟阿里不哥の遠孫アルパクト

察八兒

阿窩闊汗國亡ぶ

合贊

不賽因

伊兒汗の勢衰

ーン立つに及び、ホラサンシリア皆叛き、伊兒汗の勢大に衰へたり。

察合汗國亡ぶ

察合台汗國の盛衰

察合台 ムワツカン ― 拜達兒 ― 阿魯忽 ― 哈剌旭烈兀 ― エッセンテワー八剌 ― 都哇 ― 也先不花 ― トグラク・テムル ― エリアス・ホージア ― ギデル・ホージア

也速蒙哥

一三〇九年也先不花位に登り歷元を侵せしが仁宗の師に破られて其東境を略せられしかば西に向て地を擴めんと欲しホラサンに入り、元兵の東境に迫るを以て引き還りしが伊兒汗阿八哈に歸路を襲はれて大に敗れ察合台汗の國勢之より振はず位を嗣ぐもの多くは暴君にして、四十年間に十五汗代り立ち叛亂相續きて其領土は殆ど土崩瓦解し諸酋長は皆反きて獨立し後遂に帖木兒の滅ぼす所となれり。

欽察汗國の盛衰

拔都欽察汗 ― 撥里答 ― 忙哥帖木兒 ― 脫々 ― トグルル ― 月即別 ― 札尼別

脫々蒙哥

忙哥帖木兒脫々を襲ぐに至りロシアの諸侯王を率ゐて歷ポーランドホシガリアを劫略し、二三二三年月即別に至り姫をエジプトのハリファに通じイスラム教の爲めに向盟して歷伊兒汗不衰因を伐ち、また東ローマ帝國及ヨーロッパ諸國と交通して其文化を傳ふ、當時イタリア人殊にヒノア人は欽察汗國に來りて盛に商業を營みアゾフ海附近は東西兩洋貿易の要衝となれり。◉ロシア帝國の起源 時にロシアは數多の小侯國に分れて皆欽察汗の制を仰ぎしが、モスクバ大公イバン一世はチエル侯の反を平らげ其功に依り月即別の信任を受けロシアの大公となり、汗に代て全國の租稅徵集者となれり。◉欽察の衰頽 月即別より二傳して札尼別立ち能く父の遺圖を繼承しポンガリアポーランドを伐して其國威を張りしが一三五七年其死するや篡弒相續きて拔都の裔なる金黨の血統全く絕ゆ。◉三汗の爭 是に於て白帳汗月即別汗哥皇來汗五に正統を爭ひ各欽察汗たらんとして紛擾止む時なく、札尼別の死後二十年間に十五汗の交立ありて國勢大に衰へ遂に帖木兒の時に至れり。

全國の租稅徵集者

ロシア帝國の起源

金藏の血統絕ゆ

月即別汗

第四十七章　元代の治亂

財政の紊亂

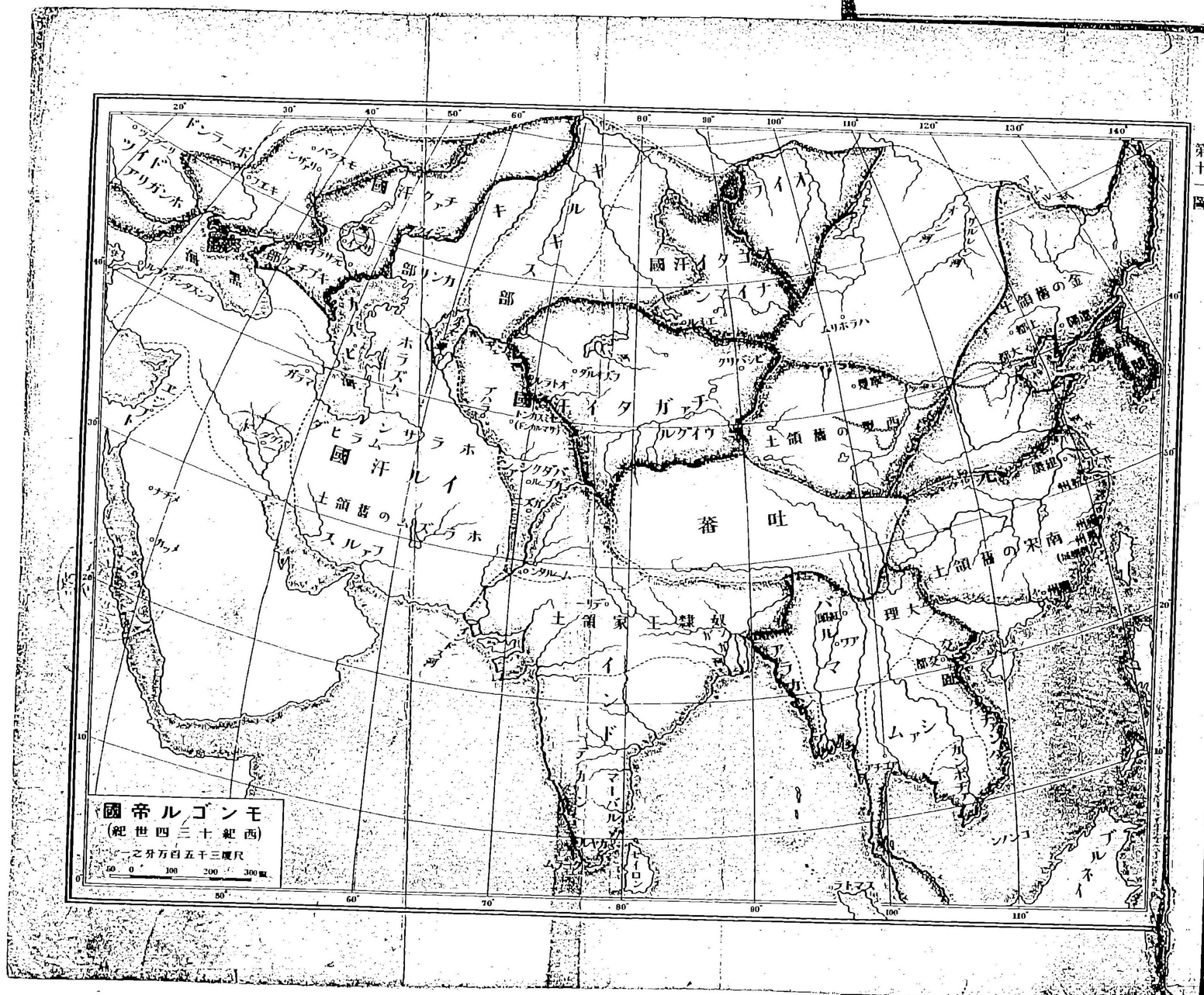
世祖兵を四方に用ゐ加之海都の反亂久きに亙り國用置乏

(一)財政紊亂
(二)阿合馬・鐵冶鹽稅
(二)盛世笑交鈔監禁

(二)繼承の亂
(一)原因トフツルタイ
(二)結果ト歷世爭ム

元朝滅亡の原因
(三)權臣跋扈
(一)武宗ト脫脫
(二)仁宗ト鐵木迭兒
(三)英宗ト鐵失
(四)漢族不平
(一)漢族重用セラレズ
(二)宋ノ諸陵發堀

四天順ト燕帖木兒
五文宗ト燕帖木兒
六順宗ト伯顏


第十一圖
モンゴル帝國
(紀世四十三紀西)
尺度三千五百万分之一
50 0 100 200 300 哩
キプチャク汗國
チャガタイ汗國
オゴタイ汗國
トルイ汗國
土領轄の欽察大王
土領轄の阿魯忽王
土領轄の斡羅思王
土領轄の南宋
土領轄の大理
土領轄の交阯
土領轄の占城
土領轄の緬
土領轄の西夏
土領轄の金
土領轄の西遼
土領轄の回紇
土領轄の畏吾兒
土領轄の哈剌魯
土領轄の康里
土領轄の欽察
土領轄の阿速
土領轄の斡羅思
土領轄の欽察
土領轄の阿魯忽

せしを以て阿合馬を殺げて財政を司らしむ阿合馬即ち鐵冶を興し鹽稅を增し鹽に收斂を行ひしかば人民の怨望を受け遂に王著に殺さる後盧世榮桑哥等相次て登用せらるるに及び妄に交鈔を濫發し鹽鐵酒醋の稅を增し或は外國貿易及收斂を官榷とし或は諸路の錢穀を勾致して財政の急を救ひしかば人民怨望し群臣彈劾して二人遂に誅せらるされど是より財政益紊れ元室漸く衰ふ

阿合馬

盧世榮

元室漸く衰ふ

繼承の爭亂

繼承の際常に爭亂あり

元の衰亡漸く四朝後に現はれず

繼承の爭亂

蒙古の國風は父子必ずしも相傳へず、フリルタイ大集會の決議により宗族の中より有力者を推戴して大汗となすを例とせしを以て、繼承の際常に爭亂の紛起を免れず、世祖即位の時既に阿里不哥の亂あり、海都の反また之に因す。◉成宗●世祖死し諸王大統を覬覦せしが名將伯顏世祖の遺命を奉じて成宗を立つ。帝劉深及哈剌帶等に命じて西南夷八百媳婦を討伐し利を失ふ是より元の勢威漸く西南諸蠻に振はず。◉歷●世●繼●承の●爭●降て成宗より末主順帝に至る九帝の中、武宗英宗泰定帝明宗文宗の五帝は其繼承の際皆紛擾を極め兵戈を弄せしかば樞臣其間に乘じて私曲をなし國勢の推移を憂へず朝政紊亂して安んぞ挽回すべ

からざるに至れり。

仁宗の治

權臣の跋扈　成宗より武宗を經て◉仁宗に至る帝英明にして能く斷ず、卽位の初め奢侈を亂もし武宗の權臣脫脫を誅し老臣十五人を召して庶政を諮し前代の弊に鑑み左右に戒めて妄に官を加ふる勿らしむ。帝また儒學を尙び專ら恭儉を主とし政令簡明天下安寧なり。◉鐵木迭兒の專橫

貪虐兒穆昔しかりしかば中外憤怨し、帝また之を誅せんとせしに太后の寵中に逃れしを以て唯其相を罷めしのみ。◉英宗立つに及び鐵木迭兒擁立の功を負みて暴虐益甚し、帝漸く之を疎んじ專ら拜住に任ず。鐵木迭兒樂ばず病て死す。◉拜住身を以て天下の事に任じ紀綱大に擧がる。然るに鐵木迭兒の黨鐵失等皆誅せらる。◉乘帖木兒の專橫

孫蔴定帝を立てしが次て鐵失等自ら安んぜず、遂に拜住を殺して世祖の孫晉王也孫鐵木兒武宗の次子圖帖睦爾を京師に迎へ、帝死し天順帝九歲にして卽位す。乘帖木兒の專橫

兵を以て上都を攻め遂に帝を降し武宗の子明宗和世㻋を立て、圖帖睦爾を皇太子とす。明宗位に卽きて暴に死し、圖帖睦爾立つに及び文宗と爲す。燕帖

本兒策立の功を負み右丞相となりて國政に專にす。濶徹伯等之を憂ひ、乘帖木兒を殺さんとして事遂に成らず。帝死し寧宗を經て順宗に至る。◉伯顏の專橫

伯顏の專橫

伯顏の專橫　順帝立ち伯顏丞相となりて獨り政柄を握り、諸王を貶殺し諸衞の兵を領し漸く異圖を抱く。伯顏の甥子脫々其專恣を憂ひ順帝と謀りて伯顏を退し、自ら代て政を執る。然れども海內漸く亂れて元室また支ふべからざるに至れり。

漢族の蜂起　世祖かつて吏天澤劉秉忠許衡等を重んじ學校を興し文敎を盛にし仁宗は唐宋の制に倣ひ科擧を設けて士を取れり。故に元朝は漢人才學の士を用ゐし事少なからざれども將相の重任は蒙古人に委ね而かも其下には契丹人(キタイ)唐古特人(タングート)畏吾兒人(ウイグル)康里人(カンリ)欽察人等多く任用せられ漢人は其に平章に働くのみ。漢族は是を以て夷狄の屈辱を受くる者とし常に報復を思ふ。◉喇嘛敎　世祖喇嘛敎を入れてより武宗深く之を信じ大に營制を破り遂に宋の諸陵を發掘するに至りしかば漢族の憤怨一時に爆發するに至れり。

漢族不平の原因

漢族常に報復を思ふ

元朝の滅亡　加之元朝は國初より交鈔を濫發したる故其價下落し物價

人民亂を思ふ

勝貧し、且つ喇嘛僧の跋扈甚しかりしかば國民皆怨み、順帝に至りて朝政全く衰へ、盜賊四方に蜂起し、朝廷之を制する能はず、且つ民兵十七萬を發して黃河を治するに及び、民心益〻離叛して亂を思ふに至れり。

群雄の蜂起

群雄の蜂起

紅巾賊―韓山童、劉福通、兵を直隸に起し、妖術を以て衆を惑はす。
方國珍―臺州に起る。　李二、張士誠―高郵に起る。
陳友諒―漢陽に起る。　明玉珍―成都に起る。
郭子興―安徽に起る。　徐壽輝―湖南湖北に起る。

棚思監

丞相脫々之を討じ、李二、張士誠を破りしが、讒に逢ひて其職を罷めらる。而かも帝は尙ほ意を國事に止めず、姦臣哈麻及び棚思監を丞相として國政を委ねしかば、益〻禍亂を醸成せり。御史大夫老的沙、依て之を彈劾し、却て斥られしかば、大同の鎭將孛羅帖木兒と共に兵を起して燕京に逼まり、棚思監を殺し、之に黨せる皇太子愛猷識里達臘を逐ふ。是に於て索羅帖木兒丞相となりて權を弄す。河南の主將擴廓帖木兒依て兵を起して索羅帖木兒を誅し丞相となれり。

李羅帖木兒

擴廓帖木兒

朱元璋の天下平定

◎朱元璋の天下平定　時に郭子興の部將に朱元璋と云ふ者あり、士民の心を得て遂に子興に代て其衆を領し、金陵（江蘇江寧府）に據る。會〻陳友諒、徐壽輝を殺して其土地兵衆を領し、張士誠と共に元璋を夾擊せんとす。一三六三年元璋擊て友諒を鄱陽湖に破りて之を殺し湖南、湖北、江西の地を併せ、尋て張士誠を破て江淮の地を收め、方國珍を降して浙江を定む。是に於て兵を南北に分ち、南は胡廷瑞等をして福建廣西を定めしめ、北は徐達、常遇春等をして燕京に迫らしめたり。元の順帝之を支ふる能はず、上都に奔り、朱元璋遂に帝位に登る。之を明の太祖とす。時に一三六八年なり。

鄱陽湖の戰

徐達常遇春燕京に迫まる

元の帝系

- 太祖[1]
  - 太宗―定宗[3]
  - 拖雷
    - 憲宗[4]
    - 世祖[5]―眞金
      - 甘麻剌―泰定帝[10]―天順帝[11]
      - 答剌麻八剌
        - 武宗[7]
          - 明宗[12]
            - 順宗[15]
            - 寧宗[14]
          - 文宗[13]
        - 仁宗[8]―英宗[9]
      - 成宗[6]
        - 愛猷識里達臘
        - 脫古思帖木兒―也速迭兒

第四十八章　元代の文化

(一)文藝
- 一、文字—蒙古文字、八思巴の創作
- 二、詩賦—元遺山、楊維貞等
- 三、文章—四大家、歐陽玄、揭傒斯等
- 四、儒學—馬端臨、金履祥、許衡、吳澄等
- 五、小說—施耐庵、王實甫、高則誠
- 六、科學—郭守敬、李冶等

(二)交通
- 原因—蒙古大帝國
- 交通
  - 海路
  - 陸路
    - 一、イタリア人—マルコ・ポロ；
    - 二、西藏人—八思巴
    - 三、波斯人—阿合馬
  - 結果
    - 1、カルピニ
    - 2、ルブルック
    - 3、コルビノ

四、キリスト教徒

元好問

蒙古文字

趙孟頫

四大家

儒學

金履祥

許衡
吳澄

文藝

◎遼金の文學　遼金は北方に起りしかば文學盛ならず、されど金には馬定國、宇文虛中、元好問の丙に鳴る。好問は詩文を以て名海内に鳴る。好問は遺山、太原の人、金亡て後仕へず、金の遺事百餘萬言を著す。◎蒙古文字　蒙古はもと文字を有せず、回紇文字若しくは漢字を借りて其用を辨ぜしが、世祖の時喇嘛八思巴始めて蒙古文字を作るされば中國の文化に浴すること遲く、充分の發達を見ること能はざりき。◎元の文學　趙孟頫(子昂)は書畫文章經濟を善くし、元代文學の氣運を開き、虞集は學問治博一代の文宗たり。楊戴范梈楊傒斯はまた文を以て鳴り、虞集と共に文學の四大家と稱せらる。同時に馬祖常薩都剌の名家あり、また楊維貞は元末に出て詩を以て著はる。◎儒學　宋の遺儒には馬端臨あり、文獻通考を著はし、金履祥あり、大學章句疏義、論孟集註考等を著はす。趙復は太宗の時始めて程朱の學を傳へ、是より姚樞郝經、劉因等出づ。世祖に至て

北に許衡あり、元儒の泰斗と稱せられ、南に吳澄あり、文章經學を兼ぬ。◎科學　郭守敬は天文學に精しく、授時曆を作り、李冶は數學を窮めて測圓海鏡を著はす、共に元代の新發明にして前代の及ばざる所なり。◎小說戲曲　元代が支那文學史上に新紀元を開きしは、小說戲曲の勃興なり。蓋し漢以後詩に樂府の體あり、宋に至り變じて詞餘となり、宋元の際變じて戲曲となる。卽ち施耐庵の作と傳ふる水滸傳（スヰコデン）の大作、高則誠の著はせし南曲の琵琶記、王實甫の作りし北曲の西廂記等は實に文學の麗珠たり。

科學
郭守敬
小說戲曲
水滸傳
琵琶記
西廂記

東西の交通

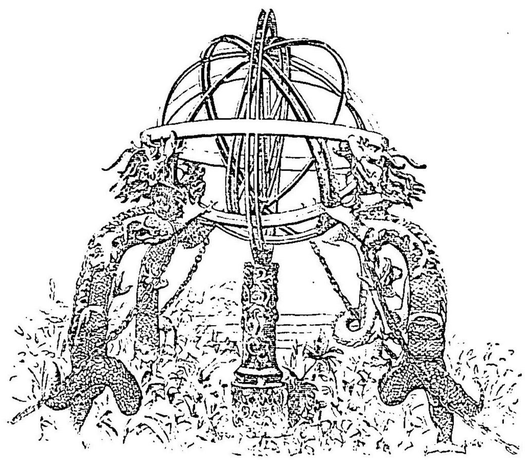
世祖の世蒙古は空前の一大帝國をなし、所在に割據せし幾多の小國は悉く滅亡し、交通往來の危險減少せしかば、東西兩洋間の往復頗る頻繁となれり。◎陸路　其陸路に依るものは西アジア及ヨーロッパより、一は中央アジア、天山南路を經、一はシベリアの南部より天山北路を經て、喀喇和林燕京に至る。◎海路　其海路に依るものは、ペルシア、インドの沿岸より、泉州（福州）に達せり、イブン・バツータ、マルコ・ポローの如き大旅行家の支那に來りしは、實に此時代のことなり。

東西交通の頻繁

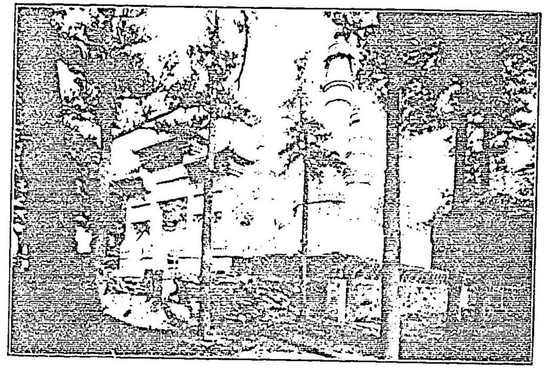
西洋文明の輸入

蒙古の大汗は國の內外を問はずして、人才を登庸せ

第九十圖



北京司天臺の渾天儀（世祖時代建作）



黃寺の喇嘛塔（北京）

り、卽ち遂人耶律楚材は編輯經籍所の總裁となり、イタリア人マルコ・ポロ
一は樞密副使となり、チベット人八思巴は佛學を以て帝師となり、ペルシア
人阿合馬は理財を以て相位に上れり。故に當時西アジア及ヨーロッパ人の
燕京に來て其朝廷に仕ふる者頗る多く、天文、數學、砲術等は是の如くして
支那に輸入せられたり。

天文數學砲術等支那に輸入せらる

喇嘛敎

喇嘛敎の起原

吐蕃は乘宗弄讚以來歷代佛敎を信奉せしかば、第八世紀の半頃
パドマ・サムバーバ北インドより來り、吐蕃人に適せる一種の佛敎を創む、
之を喇嘛敎と云ひ、其敎主を喇嘛と云ふ。爾來喇嘛敎の勢力頗る盛なりし
かば、世祖は此地を征定するに當り之を利用し、喇嘛八思巴を聘して帝師
となし、其命令をして詔勅と幷び行はれしめぬ。かくて喇嘛敎は歷代元室
の尊信を受け、其派の僧侶は利を貪りて飽くことなく、近待に結納して布
施を强請し、爲害百出するに至れり。

喇嘛の弊害

キリスト敎

蒙古は建國以來宗敎に對しては寬容の見を執りしを以て、
喇嘛敎の外、道敎、イスラム敎、キリスト敎もまた行はれたり。此頃ヨーロッパ
は既に數回の十字軍を起し、イスラム敎撲滅の氣焰盛なりしが故に、蒙古